

オリジナル

大泉総理と風子さん
上巻

作 岸塚 康子

神奈川県・相模原市に『大将』と呼ばれ客から親しまれた男の理容店があった。その大将は亡くなったが、母と娘二人でこじんまりと理容店を営んでいる店である。夜のとばりが降りて、店の前のサインポールの灯りが消えると、間もなく二十歳前後の娘がバケツを持って店から出てきた。娘は何やら楽しげに鼻歌を歌いながら硝子を拭き出した。すると娘の前でステッキが止まった。

「今日は終わりか。アンタは綺麗好きだね。大将も客が引けると、窓拭きやっていたのを思い出すよ」老人は足を止めると、そう言った。

「あっ、村上のおじいちゃん。今晚は、お買い物ですか？」娘は振り向くと言った。

「そんな。面倒くさいことやるかい。散歩だよ。今日も30分歩いてきたところだよ。そこへ、べっぴんさんが出てきたんで足が止まったというわけさ。ああ、ここを通る度に大将を思い出すよ。気っ風がいい男だった」

「思い出して頂いて有難う御座います。父も喜びます。――あっ、待って」娘は、ぬかるみにでも入れたのか、汚れているステッキを見て言った。手際よくバケツに雑巾を浸して絞ると老人からステッキを受け取り綺麗に拭き出した。老人は嬉しそうに微笑しながら

「でも、間もなく雨が降るって言っていたよ。窓拭きは無駄になるよ。止めた方が良い」

「そうですか、少し肌寒いんで一雨来るのかなと思っていました

けど。ハイ、どうぞ、ステッキ」

「有り難う。良い娘になった。来週は孫の誕生日でね。家族でどっか食事に行こうって、不景気なときだから、ばあさんがやめとけて息子に言ったんだが。私は息子に賛成してやったんだ。息子がカメラ磨いているのを見てね。私ら、昔の者だから写真が苦手だ。それでね、口実を作って年寄り引っ張り出して、家族の写真撮っておこうという息子の魂胆だよ。ソロソロそういうことに協力してやらないといけないと思ってね。――そういうことで来週、頭やりに来るから」

「そうですか、きっと楽しいお孫さんの誕生日になりますよ。お待ちしております」

「それじゃあ」老人は綺麗になったステッキを上に上げると、静かに歩いていった。昔の人は何かあると散髪に来る。どうやら長い人生の儀式みたいなところが散髪にはあるのだろう。風子は老人の後ろ姿に頭を下げると手のひらを上に向けていたのだが、間もなく店に入りシャッターを閉めるボタンを押した。外側の電気の灯を消して店の中を清掃しているとラジオから

「黙っているより、もし、僕と同じ思いの人が僕の話聞いて元気になってくれたらと思って、お話します。僕のお父さんは、1年前、家で首つり自殺をしました。理由は借金を苦しめたからでした。僕が中学校1年生の時です。自殺する前の日、僕がお風呂に入っていると、お父さんはいきなり、僕の入っている湯船に入ってきました。いつも、そんなことしたことないのに、今思えば、お父さんは、僕とお風呂に入って最期の思い出を作りたかったのかも知れません。でも、その時はどうしてそんなことするのか分からないから、僕は急に恥ずかしくなって風呂を出てしまったのです。お父さんが僕の名を呼んだような記憶がするのですが、良く分かりません。でも、その時がお父さんと僕の最期の別れでした。翌朝、お父さんは首を吊りました」動いていた娘の手が止まった。止まったその手の甲に娘の涙が落ちた。

相模原を走る車の中でも少年の声を聞いている黒塗りの国産高級車があった。

「もし、お父さんがお風呂に入ってきたとき、子ども時代にそう

したように手と手を合わせて水鉄砲したり、なぞなぞしたり、お父さんの背中を流したことがなかったから、流してあげれば、お父さんも、死にたい気持ちを息子の僕に語り出して、僕が、何いってんだよ、お父さんだけじゃあないよ。バブルを作ったのも崩壊させたのもお父さんじゃあない。

借金は僕が、いずれ返してあげるからと言えばお父さんは死ぬのをやめたかも知れない。僕が薄情者だったから、お父さんは首を吊ったんじゃないかって、お母さんにも、妹にもお風呂のことは言えませんでした。今でも、僕の頭はあの時のことから前に進めません。いつもそのことを考え勉強をする気も失せて友達と話しをするのもいやになって、お母さんに話そうと思ったけどお母さんが聞いたら、何て言うか想像すると怖くて。思い切り怒って貰った方がいいけど、その後でお母さんも僕と同じような思いになるのかなって、妹は小さいから、まだ僕よりショックが少ないと思うけど、でも段々と僕のしたことが分かってきて、冷たい兄さんだと思われてもいいけど、そう思う妹も可哀想で、僕は、どこからでもいい、お父さん出てきてくれって、昔、お父さんで行ったところへいけば、お父さんがあの時のように手を振って出てきて、隠れていたんだよ、探していたか、ビックリしただろうって、僕の前に出てくるんじゃないかって、でも、ずーっと歩いてお腹が減ってきてても、出てきてくれないお父さんに、僕が殺したんだ、僕が殺したんだって。もういないんだって、そんな日を毎日毎日繰り返して、妹が捜しにきてくれて、でも僕は――」

「もういい、切ってくれないか」後部座席の男は静かにそう言った。慌てて運転手がラジオのボタンを押して消したのだった。――車内がシンとなった。 暫くすると

「総理、もうソロソロじゃあないんですか」SPの山田が助手席から後部座席に居る大泉首相に言った。

「そうだね」大泉は静かに言った。山田はなおも話しかけようとしたが、大泉は熱心に車窓からの景色に見入っている。大泉の細い目にキラッと光ものを見たような思いになって、山田は視点をフロントガラスに転じた。小雨がぱらついてガラスを叩いていたが、雨足が速くなってガラスに小さな川のような筋が出来ている。

「ニュースやっているだろう、掛けてくれないか」大泉が言うと、運転者はラジオのボタンを押した。

「米国株式市場はダウが続落・ナスダックも続落となり、本日の東京マーケットは小幅安で始まりましたが、前場・後場と下げ続け全面安の展開となり、日経平均の終値は昨日より321円19銭安い9820円でした。又、全値動きを表す東証株価指数のトピックスは――」

「切ってくれないか」大泉はそう言って目を閉じた。

――午後、政調会長を降りた亀田が総理官邸に来て言った。

「大泉さん。米百俵の精神はいいんだが、時代が違う。景気はマインドで決まる時代なんだよ。赤字たって、六本木で飲めや歌えの大騒ぎしてこさえた660兆じゃあないんだから、構造改革なくして景気浮揚なしを、景気回復なくして構造改革なしに切り替えなくちゃあ、アンタ私より若いのに頭固いよ。このままじゃあ、日本は沈没だ。アンタ、前に絶対に8月15日には靖国神社に総理大臣として参拝に行くと言っていたのを、大胆且つ柔軟に2日繰り上げて参拝したじゃあない。考えを改めるのに憚る事なかれだよ。どうして意固地に国債発行額30兆円にこだわるの」大泉は目を開けると曇ってきているガラスを手で拭きだした。

運転手の中村はダッシュボードを開けてタオルを助手席の山田に渡した。山田が中村を見たので、中村は無言でハンドルを握る左手の親指を立てて見せた。親指は大泉総理の意味である。山田は大泉に

「総理、お使い下さい」

「ああ、有難う」大泉は受け取ったタオルでガラスを拭くと、大将が亡くなって何年になるかと指を折り始めていた。夜のとばりにネオンが瞬き始めている。雨のせいでネオンサインの光がぼーっとしていて輪郭が定まらない。大泉は晴れない心境と同じだと思った。

大泉は床屋の消えたサインポールの側に車が近づくのを見て

「ここは、私の、いわば親戚みたいなところだ。君たちはどこかでくつろいでいてくれないか。終わったら連絡するから。そうだな、2時間くらい後になるかな」そういうと車を降りた。

大泉は呼び鈴を押した。間もなく娘が現れた。

「久しぶりだね。風ちゃん元気かい。どうしているかって気には掛けていたんだけど」

「お久しぶりです」風子は大泉の首に抱きついてきた。まるで恋人に会えたような喜びを見せた。

「総理のご活躍は毎日、テレビで拝見しています」年頃の娘の大歓迎に大泉は大いに照れた。

「今日はもう終わっているのに悪いね。私の為に、ところで、佳枝ちゃんは？」大泉は、風子の妹が居ないので尋ねると

「佳枝は親友のお婆さんが亡くなったので母とお通夜に行っています。大泉さんに会いたいと言っていたのですが父が居たなら、いつでも会える生きている人より、もう会えない人を優先しなさいって言うからと説得しました。そういう訳で母も色々とお世話になった方なんで、失礼させて頂きました」

「それでいい、大将だったら必ずそういうさ。大将の声が聞こえてくるようだ」

大泉は風子に上着を脱がせてもらおうと髪をカットする椅子に掛けた。

「風ちゃんに初めて髪をやってもらうか」アノ小さな娘に髪をやってもらうとは思ってもいなかった大泉は感無量だった。鏡には

準備をしている。風子の後ろ姿が映っている。大将にはこうした風子の姿が見えないんだと思うと胸が痛んだ。大泉は鏡の中に居る風子に言った。

「ところで、大学辞めたんだって」

「ええ、そうなんです」

「風ちゃんは、確か、コンピュータに強くて、プログラマーになるのが夢だったはずだよ。大将にコンピュータどうやって勉強したのって聞いたら、自分で勝手に本を買ってきて研究しているって言ってたね」

「ええ、中学を卒業してから通信教育で理容師の勉強していたんですけど、ここで理容免許も取れましたから。――床屋は平日は一人でもいいんですけど土日・祝日は猫の手も借りたい忙しさになりますから、私がやらないと母に負担が掛かります。母まで亡くしたら私と佳枝は親なし子に成ってしまいます。私の夢も大切ですが、家族の和の方を優先すべきだと思って決断しました」

「でも、コンピュータは最先端技術だ。大学へ行っていた方がいいだろう」風子は大泉の髪をとかしながら、カットする長さを決めているようだった。

「私も、そう思って期待して大学に入ったんですけど、実際には役に立つ情報技術はないように思いましたから、未練はそれほどありません」

「えっ、そうなの？」大泉は風子の言った言葉にショックを受けた。

「結局、学校というところは、起きてしまった過去の情報を分類して教え込んでいるだけなんです。でも、私は、これからのコンピュータというものは将来を予見していくツールだと思っているんです。3日先のテレビ番組を見たければ、新聞では駄目ですよ。そこで専門のテレビガイドの本を買う、でも、突発的な出来事が発生した場合には番組変更が起きるから意味がない。そう

なるとインターネットでテレビ番組のサイトを見ている方がより、的確に成るわけです。ところで総理――髪、短めになさいますか？」

「ああ、それから、総理はじゃなくて、今まで通りおじちゃんがいい、総理と言われると、つい手を挙げたくなる。だから、今まで通りに呼んでくれ」

「分かりました。おじちゃん。髪型は？」

「風ちゃんに任せるさ。大将にもそうしていたからね。これからも、そうさせて貰うよ。このトレードマークになったライオンヘアーも大将の作だった。それから運が付いてきたんだからね」

「父が聞いたら喜びます。そんなにご贔屓にして頂いて」風子はしなやかな指先で髪を切りだした。

「おじちゃん。結局ね、大学と言うところは、アメリカの同時多発テロ事件のときでも、キャンパスでは今までと変わらないんです。年が同じでも社会人なら、自分の勤めている会社はどんな影響を受けるかって考えますよね。学校だって考えなくちゃ。学生集めて、世界の一大事ですもん。大学は社会人になるための最期の学校じゃありませんか」

「ナルホド、一理あるね。しかし、理容業を始めたら、コンピュータが疎くならないかな」

「そうですね……」風子は少し意味ありげに微笑した。大泉はどうして微笑したのかと思った。いつも通り、軽いパーマを掛けている最中に大泉は眠気に誘われてうたた寝をしてしまった。風子は全てが終わっても眠っている大泉に亡くなった父親の面影を感じていた。そう言えば父親の肩を揉んでやったことは、あっただろうかと少し後悔の念を感じながら……。

「ああ、いい気持ちだ。ずーっと揉んでくれていたの？ 悪いことしたな」大泉がそう言った。

「大した時間じゃあないですから」

「ああ、さっぱりしたよ。どうしてだろう、散髪すると気分がよ

くなるのは」

「散髪してシャンプーすると、グッと血の巡りがよくなるからですよ」

「……へえ、そうなの。初めて知ったな」

「大泉のおじちゃん。時間ありますか？」風子が少しはにかんだように言った。

「ああ、あるよ。どうして」風子は大泉から散髪代を受け取ると大泉を二階の部屋に案内した。

「私の部屋です。どうぞ」大泉はうら若き乙女の部屋に入ることを一瞬、躊躇ったのだったが、中を見ると8畳ほどの部屋にパソコン・スキャナー・プリンターまでは分かるが、後は大泉の理解できない機器が沢山あって、それもこれも、全てが配線で繋がれている。まるで情報局といった様相だ。

（これは！ もう女の部屋ではない男の部屋だ）と思った。

「どうぞ」風子は大泉を大きなディスプレイの画面の前に座らせると、何やら起動を始めた。

『大泉のおじちゃんの部屋』と書かれた画面が表示された。

「今、お茶でもご用意させていただきますから、おじちゃんの部屋ですから自分の部屋だと思って勝手に見て下さい」大泉は何か言おうとしたが、呆気にとられて何も言葉が出なかった。風子は、そんな大泉を見て微笑すると部屋を出ていった。大泉もメールマガジンを配信する関係で少しはパソコンをいじれる。マウスを持つとクリックしてみた。風子のどこまで情報が集められるかというタイトルが気になり、そこをクリックして驚いた。そこには、亡くなった大将と家族全員が写っていて、その中に、散髪に来た大泉が映っている。大泉の頭には白い物が一切ない。写真の下には撮影日と時間が書いてある。その時、大泉が言ったコメントが書いてあった。

『嘘を付いた大泉のおじちゃん』というタイトルで、風子があどけない表情で写っている。風子は、まだ保育園に言っている頃の

ようだ。

ふー：大泉のおじちゃんは、何年？

大泉のおじちゃん：なんだと、思う

ふー：ネズミ？

大泉のおじちゃん：ネズミ、違うな そんな弱いもんじゃあない。猫年だよ。

ふー：そうか猫年か

私は干支から年を当てる事に熱中していた頃で、それで何年だか聞いたのだが、一杯食わされた。そこから思うに、猫年という、ありもしない干支を言って子どもを翻弄しても罪の意識は感じて居ない風。うまく交わして、年を分からないようにした秘密主義から血液型はA B型の可能性が大とある。

もう一枚の写真には、『元気のなかった大泉のおじちゃん』とある。

ふー：（元気がないな。大泉のおじちゃん）

大泉のおじちゃん：風ちゃん。久しぶりだな、おじちゃんも女の子が欲しかったな。

後に、大泉のおじちゃんが、離婚していたことを両親の会話から知る。きっと、女の子がいれば、何かが違っていただけなのでは。

「お待たせしました」

「ああ、ありがとう」大泉は風子が持ってきたお盆から珈琲と洋菓子を受け取りながら言った。

「私の血液型はA B型で、女の子がいたら、違っていただかも知れ

ないと感じていた頃だよ」

「そうでしたか」

「明快な推理だ。それにしても、どうして私のコーナーを？」
そういうと風子は珈琲をじっと見つめながら

「総理大臣になる人だと思っていましたから、先回り」と言った

。

「昔、私が小学生だった頃のことですけど、公園で私に話してくれてこと覚えていらっしゃるでしょうか」

「……………」

「大泉のおじちゃんも首相になると忘れてしまうのねえー。忙しいですもんね」

「これは、いつ頃作ったの？」

「作ったのは、6年前です。総理になられてから作ったのでは店の宣伝しているようですから」

「そうすると、風ちゃんは、こんなに小さかったのに私との会話、覚えていたわけ」

「ええ、ここに書かれている会話の言葉に脚色はありません」

「……………」

「これをお見せしたのには少し理由があります。内閣府の景気ウォッチャー調査は景気に敏感とされるタクシー運転手やコンビニ店長らが入っているそうですね」

「そうなんだ、景気は小難しい経済学の先生の意見では駄目だと思ってね」

「床屋の語源となる床は、江戸時代、男の髪結（かみゆい）が床店（とこみせ）で仕事をしたところから床屋になったそうです。当時はタクシーもコンビニもありませんから、唯一の情報交換の場所だったと思うんです」

「そうだろうね」

「さっき、おじちゃんから、コンピュータ技術の点では大学で学んだ方が良くないかと言う話がありました。アメリカ

は情報を技術として捉えていますよね。だからサイバーテロなんてとんでもないと思う世界の世論に対してでも、俺たちは技術があるから出来るんだ。悔しかったら俺の技術を上回るワクチンを作ってみろという技術優先の考え方があるわけです。でも日本は情報を情けに報いるという漢字で捉えました。私はそうした情報を情緒の情で捉えた先人の解釈が凄いと思うんです。つまり情けに報いる技術でなければいけないという日本型情報テクノロジー。

そうですね、JIT構想のようなものが政府にあるべきだと生意気な考え方をしています。情報の前に道徳が優先されるような教育システムです。刃物は鋭利でなければ価値がありません。料理人が用いれば誰もが幸せを感じられる料理ができますが、悪人が持てば昨今の筆舌に耐えない事件を引き起こします。用い方によって善にも悪にも成ります。このことは今後、重要な教育のあり方になると思います」

「うーん」大泉は唸った。これは教育審議会の面々からは出てきていない新鮮で斬新な意見であった。大泉は風子の話しに興味を持った。

「風ちゃん。続けてくれ、君の話が聞きたい。感じていることを言ってくれないか」

「これは家に来る小学校6年生の男の子の頭をやっているときの話しなんですが」大泉の珈琲カップは空になっていた。風子は大泉のカップに二杯目の珈琲を注いだ。大泉は気分がいいと珈琲一杯では物足りない、果たして風子はそこまで知っていたのかと記憶力の凄さに大泉は感心した。

「一ヶ月内ほど前の話しです。余りに早い時間に、お姉ちゃん、女の子にもてるような髪型やってとその男の子が入ってきました。アンタ、又学校、ズル休み？ どうしたのよと聞くと、今日は全校生徒、早期下校だったんだよと言いますから。どうしてさと聞きました。何でも、包丁を持った男が中学校近くに出没したとのことでした。その情報が小学校に入ってきたのが昼食時だったらしくて。それで給食を食べてから集団下校させられたという

ことでした。私は変だなと思いました。どうして包丁を持った男が中学の辺りをうろついたのか、小学校と中学校は急ぎ足で5分の距離です。中学生と小学生とでは根本が違います。包丁の男が小学生を追っかけたら逃げ通せる子は少ないでしょう。でも中学生なら、大半は逃げられるでしょう」

「それは、そうだ。それに、中学生だったなら、反対に包丁男を追いかけて回す血気盛んな子も出てくるだろうし」

「そうです。相手が包丁を持った男であっても、こうもり傘で4・5人の男子生徒が立ち向かえば、そうは簡単に斬りつけることは出来ませんよ。それに、そこの中学は男子生徒だけでも400人は居ますから、4・5人どころではない筈です。黙っていても50人は応戦するでしょう。それなのに、どうして中学を狙ったのかという疑問でした。もう一つはどうして小学校はその情報から集団下校をさせたかです。包丁男の本当の目的は、中学校に姿を現して、小学校が集団下校させるところまで読んでいたとしたら、ランドセルを背負って身軽でない低学年の子が列をなすようにして帰って来るわけですから、いったい何人の子が犠牲になったかと考えると……」

「背筋が凍るような話だね」大泉は本当に背筋が冷たくなるのを感じながら言った。

「翌朝、店の暇な時間にジョギングをしていたら、知り合いの小母さんが真相を話してくれました」

「本当に居たのか？」

「いいえ、ただの不審者でした」

「不審者！」

「ええ、人相が悪かったのか、それとも身なりが悪かった程度の風体の悪い不審者だったんだと思います」

「不審者が包丁を持った男にどうして変わったの？」

「その理由は分かりません。でも情報が伝わってきた小学校は、直ぐに中学校に電話すれば単なる不審者であったことは分かった筈ですが、それをしていなかったという事です。その小学校の卒

業生の半分以上は、そこの中学に行くくらいの密接な関係でありながらです」

「電話もしていなかったのか」

「最大の問題は、本当に包丁男が現れて、集団下校の小学生を狙っていたとしたらという問題です。偽情報で集団下校をしたことは何の問題にもなりません。情報化の時代に一番問われる能力は、その情報が正しいのか正しくないのかという判断材料、つまり情報があっても調査する能力がなかったら、がせネタで崩壊しかねない訳です」

「うむ、……大変な問題だな。もし、包丁男が小学校の近くで待ち伏せしていたらと思うと一子どもの命に対して余りにも無防備すぎる」大泉は腕を組んでしまった。

「結局、小学校は万が一のことを考えて学校のいい訳を考える策にでたんですね。包丁男が出ていることを知っているにも関わらず、何かあったら、その事こそ問題にされるって」

「子ども達の命と引き替えにメンツを重んじ中学に電話をいれることまで放棄していたのか」

「この国は、事があってから、慌てふためくことに趣があって、事前に察知して対処する能力がゼロであるということです。これほど命の尊さが叫ばれているのに、幼い命の雛を大量に同じ時間にばらまいて無事に帰れると思っていた訳ですからね」

「真っ先に狙われるのは小学校低学年である1年生、その子達を今回のような事件があっても最上階にして、高学年を1階にするような措置を取った学校ってあるんでしょうか、それともそうした通達が文部省から出ないと出来ない制度でもあるんでしょうか」

「……うん。侵入されるであろう窓際は男子の席とする。何かあったときには、呼子を吹けば高学年男子と教諭が全員揃って、犯人を撃退する。何故なら、逃げると言うことは大悲鳴が轟き渡ることから、犯人を悪戯に激情させてしまい被害を大きくさせるだけのことだからである。それより、全員が傘を机か椅子の側に置いておけば、包丁一本の刃に対して、傘の切っ先を全員が向ければ十二分に対抗できると考える。一人で、身の丈の大成る者と戦

うということは血が失せて、身体が強張って勝負は眼に見えてしまいが全員で声を出し、6年生は1年生を守らなければならない、頑是無い可愛い弟・妹の命を守る戦いであることを認識すれば血湧き肉躍って必ず勝利を勝ち取れる。机も椅子も投げることで武器になると考えれば、防御の態勢はなおいっそう強くなる。他方、侵入者は、当然にして逃げまどう姿を描いて侵入して来るに違いないから、当てが外れ大いに戸惑う事となる。教育のありようでは小学生でも十二分に包丁男には対抗できると思うよ」

「私ね、その事があってから、地域のことは地域で守るようなシステムを構築したいと思い始めたんです。こうした情報ってタクシーの運転手さんから聞けないでしょう。だってタクシーに地元はありませんから、コンビニの店長だってアルバイトで地元の人ではないでしょう。顔見知りでは買いにくいという顧客の心理からワザと遠い所へ配置しているコンビニもあるそうですから」

「そうなのか」

「でも床屋なら、信憑性のある情報かそうでない情報かの区別も出来ますから客観的なんです。同じ話しでも聞き手によって判断は異なります。でも、いつも大げさに言う傾向の人か、的確に判断出来る人かを理容師は良く知っています」風子がマウスを操作しようとしたので、大泉が椅子を引くと、風子の客の情報がデータベース化して現れた。おまけに顔写真まで付いている。

「これは？」

「歯形を歯医者さんから入手して犯人とか被害者を確定することはできますが、その人がどういう人でどんなことを考えていたかは床屋の方が分かるんじゃないでしょうか」

「デジカメでお客さんの写真を撮って上げて、次に来たときに印刷して差し上げているんです。その時の写真がデータベースになっているんです」

「この血液型とか、趣味の欄はわざわざ聞くの？」

「いいえ、これは全て私が聞いたのではなく、父の頃から来ている人は私の頭に入っていますし、私からのお客さんは、私に話したことを暇なときに入力しただけです」

「孫の名前まで書いてあるんだ」

「下にもパソコンがあって、この方、山下のおじいちゃんが来たので、前回来られたときに、どういう事を話したのかチェックしてから髪を梳いていたんです。おじいちゃん、晴れやかな顔をしていたので。お孫さん。合格されたんでしょうと言ったら驚いて、どうして分かるのかって、だってこの前、来られたときに孫が第一志望の大学に入れるかどうか大変心配されていたから直ぐに分かりました。東大ご入学おめでとう御座いますと言って、おじいちゃんの大好きなおせんべいの入った詰め合わせをお渡しして、確かお孫さんもお好きな筈でしたからお二人でどうぞと言ったら大変、喜んで下さいました」

「来る日まで分かるの？」

「ええ、グラフ化して来られる日を予想してみたんですが、お年寄りには狂っても3日ほどです」

「それは凄い。大学では学べない。正にITだね」

「恐れ入ります。私だけでなく、理容業をされている人達のネットワークを作れば、もっと地元で貢献できるんじゃないかって思っているんですけど」

「景気ウォッチャーにどうして床屋をいれなかったのかなあ」大泉はそう言うと、急に洋菓子が食べたくなって手を伸ばした。

「緑茶の方がいいですね」風子が言った。

（うん。又しても読まれている感じがする）大泉は風子に頭を下げた。

車中の人となった総理は目を閉じていた。時を同じくして同じ現象を見ているにも出る結論は人によって違う。子どもが目の前で転んで血を流している。すぐに手をさしのべるのが良いのか、それとも自分の力で立ち上がるのを見届けるべきなのか、これは持って産まれた感性に寄っても違う。どちらが正しいのかは、いくら語り尽くしても当初の見解から変わることはなかった。

日本はバブル崩壊でゴルフの会員権は10分の1に商業用不動産は8分の1になった。株と土地の合計では1300兆の富が忽然と消えていた。大物政治家の亀田は人の顔を見るたびに国債枠30兆円にこだわるな、大型補正予算を組めと大泉に詰め寄る。亀田には首相予備選での恩義があった。自ら立候補を降りたことで、スムーズに大泉が首相になれた経緯があり。しかし、どう

しても、大泉はそれが飲めなかった。――それにしても風子の話しは、学者の机上の空論とも違う、役人の上から見下げるような統計解釈とも違う。政治家の支援母体の代弁とも違う。今まで味わったことのない新鮮さを感じていた。

大泉は風子との出会いが、いつだったのか思い起こしていた。その昔、大将が元気な頃で、風子は、まだ小学生にもなっていなかった。大将が大泉の髪を切りながら、風子の話しをさせた。

「大泉さんが、この前、家に来た時に風子の頭を撫でて帰ったんですけどね。風子が大泉さんの後ろ姿を見ながら、あの人、総理大臣になるって言うんですよ」

「頭を撫でたのが良かったのかな」と大泉が言うと、大将は首をひねった。

「風子は誰からも頭を撫でてもらっていますからね。だから特別に大泉さんだから感激したということはないと思うんですよ。おべっかをいう子でもないし。それにね、私に言うという感じじゃあなくて、独り言のように呟いたんですよ。風子のそうした言葉は、当たるんですよ」と言った。大泉は小派閥に属しているから無理だと思いつつも、大将の話しを聞けば悪い気はしなかった。そんな大将が亡くなって、初めて総裁選に出て敗北した直後に風子の母親に髪を切って貰って居ると

「風子が大泉さんを見て、総理大臣になるよって言うんですよ。だから、大泉さんには総理になって欲しいけど、派閥が小さいし族議員でもないから無理なんだよ。あっ、ごめんなさい」と言ったので大泉は気にしてない、それより、その後の話しを聞かせてくれと言うと

「転換期には旧式の考えは逆目に出ると言うんですよ。……ただ、あの子の言ったことは当たるから、何度でも総裁選には出て下さい」というのだった。

風子は時間があると、店に出てマンガを読みながら静かにしているのだが、お客の世間話にどうも耳をそばだてているらしくて、困って居るんですよねというから、何か悪いことでもあったのかと聞くと、まあいいことなんですけどねと前置きしてから大将は大泉に話して聞かせたことがあった。

「当たっているよ。大将。お宅の風子ちゃんがいっていたことさ。東西銀行に行ったら融資してくれるってさ」ある日のこと、左官屋の哲ちゃんが店に入って来るなり言ったらしい。哲ちゃんが言うには、資金繰りが苦しいのに銀行が金を貸してくれないと大将にぼやいていると、風子が東西銀行に行けばいいのにと待合いの席から哲ちゃんに言ったというのだ。しかし大将にはその記憶がない。多分、前に大人の話にクチバシを入れるなど注意していたから、大将に電話が掛かってきて居ない時にでも哲ちゃんに言ったのだろうと大将は言っていた。哲ちゃんは、取引先の告別式の帰りに駅前の東西銀行に差し掛かった時、俄に風子が言った言葉を思い出した。しかし葬儀の黒いネクタイではと思ったが、その時鞆の中を覗いてみると、祝いの白いネクタイが入っていた。妻がどちらも、入れておけば間違いないとって入れておいたことは後で知るのだが、それでネクタイを黒から白にして東西銀行の融資課に入ると、トントン拍子に話しが進んで融資を受けられたというのだ。しかし、大将は記憶にないので、お礼なんて頂けないというと、哲ちゃんは大将にやるんじゃない。風子様にあげるんだからと、風子の好きなカステラと、その中にお小遣いと称した万札が一枚入っていたというのだった。

大泉が髪を切りに行くと、大将が、ふと、その時も風子の話しをしたものだった。

「いや、家にはね。零細業者の社長が良く来るんですよ。金の悩み、取引先との悩み、従業員の悩みをみんな抱えて居るんで、うかつには言えないんですけどね。大泉さんは政治家だから話す

んだけど。実は私の客に、イイ奴なんですけどね、嫉妬の固まりみたいな男がいてね。それが一回りも年下の後妻を貰ったのはいいんですけど、男が居るんじゃないかってね。何度も思い過ごしだと言っても聞く耳をもたないんですよ。

ところがこの前来たら、ニコニコしてねえ。一度も女房のことでは愚痴らなくなっちゃった。そうなる则ち気味が悪いもんで、その後若い嫁さんとは上手くいっているのかと聞いたら、家の風子がね。直してくれたんだって言うんですよ。まさか風子が仲裁に！ まだ小学校4年になったばかりですよ。どういふ事よというね。こういう事よって訳で話し出したんですよ。嫉妬夫がです。夜の8時頃に散髪終わって家の店を出て帰り掛けると、シャッターを下げる手伝いが日課の風子が居て言ったというんですよ。おじちゃん。今日は右側から帰れば。その男の家は左側なのに、風子はそう言ったんですよ。勿論風子は右側からでは遠回りになることは知っていたと思います。風子は大人しい子で、大人をからかうような子でないことを知っているその男は、風子に言われ、そうか、それも、たまあにはいいなというわけで、右側を歩き出した。気が付けば、夏から秋に変わりつつ夜風が心地いい、そう思っで歩いていると、目の前を、恋女房が横切った。遅番続きで帰りが遅い亭主の隙を狙ってどこに行くんだというわけで、嫉妬夫は後を付けだしたんですよ。女房はスーパーに入っで、熱心に値札を見比べて一円でも安い商品を籠に入れだした。レジを済ませビニール袋に詰めだしている女房を見て、稼ぎが少ないからと少しほろっとしたらしいんですが、その後で女はスーパーの近くの酒屋に入っで、惜しげもなく高級ウィスキーを買ったんですよ。男だ！ と直感した男はパチンコをして時間を潰して、いつも通りの遅い帰宅をした。すると、女が意味深げな顔でそのウィスキーを出してきていったんです。

「今日は二人の結婚記念日よ、御祝いしましょう」ってーそれ
それで、俺は馬鹿だって。あの時、風子が右の方から帰れと
いったのが不思議でならないらしいですよ。私も不思議だなー
と
思っていたので、いつだったか風子にその話をしたら、最初、
風子は覚えていないというんですよ。

しかし、親としては放って置くわけにはいかない。そりゃー、そうですね。もしもですよ。風子が言ったとおり右側から帰って恋女房が間男と密会しているところ出くわしたらどうなります。嫉妬夫は単細胞ですからね。カッとしたら、どうなるか知りませんよ。人間の一生がね狂っちゃう。事件って奴は特別に因縁がある場合もありますけど殆どは、どこにでも居るような男と女がひよんな出来事をきっかけに凶悪な犯罪が発生するように思うんですよ。そんなことになったら風子だって暗い人生を送る事になるでしょう。だから思い出すまで、飯は食わせないといったら泣き出しちゃった。ここで負けたら、一生、風子は自分を考えない子になると、その日の夕食も翌日の朝食も食わせないで、そして翌日の夜になった。さてどうしたもんかと、私も夕食を取らないで風子と向かいあう事にしたんですが、その風子が居ない。店の外に出たら風子はシャッターの前でうずくまっている。涙も枯れた目で、じっと地面を見ている、私はその時、全てを察しました。風子は忘れてるんじゃないって、他人にはない、自分だけが持ってしまった。何といるのか特殊才能とでもいうやつをね。風子は自分の悩みを親にも言えなくて悩んでいたんだって、親なのにその事に全然気が付かなかった訳で。私はなんて駄目な父親かと思って、自分の頭を金槌で殴ってやりたいって思いました。つくづく可哀想になっちゃった。私はしゃがんでね、『風子！ 悪かった。お父ちゃんが悪かった』って言いました。風子はしゃがんだまま、私を見上げたんです。その目には涙がいっぱいあった。風子の涙を拭いてやって抱きしめてやっていいました。『悪か

った。お前が苦しんでいるのを、お父ちゃん知らなかった』って、風子は私にしがみついて泣き出した。風子はそういう事をしたことがなかったんで、自分の特殊な才能を一番怖がっていたのは風子自身だったんだなって実感しました。

このことは私と風子だけの秘密にしようと思って、家内と佳枝には、お姉ちゃんと外でも行くからといって、二人でぶらぶらと歩き出した。そう言えば、最近二人して歩いていなかったと思いながら、そうして風子の大好きなラーメン屋に入って ラーメン2杯注文しましてね。私のラーメンの中にある卵を風子のラーメンにいれたら、風子が嫌いなほうれん草をレンゲで私のラーメンに入れてきました。私は風子を見ると風子は笑っている。それで私は風子は許してくれたんだってね嬉しい気持になりました。その後、二人で公園に行って、夜空の星を見ながらブランコをこいでいると、風子が云いました。

あの日、武田のおじちゃん（嫉妬夫）は家のお店を出ると、右側を見ながら微笑したらしいですよ。そうしてから、いつも通り左に向かいだしたので、右から帰ったらと言ったというんです。

武田のおじちゃんは、いつもなら眉間に皺を寄せて腕時計を見ると嫌そうな顔をしてから左側に歩き出すのに、その時は帰る方向ではない右側を見て微笑んでいるのに反対の左側に歩き出したから右側から行ったらと言ったというんです。風子がいうには、右側を見ても嫌そうな顔をして、いつも通り左側を行っただのなら何も言わなかったと言うんです。武田のおじちゃんは散々、奥さんの悪口を言っているのに、右側を見て微笑んだ。おじちゃんは、奥さんの悪口を言っている分、本当は好きなのに素直になっていないなと思ったというんですよ。それで私が、風子は右側におじちゃんの奥さんが居ることが分かっていたのかといたら、姿は見ていなかったけど、おじちゃんが右側を見て微笑したときに

奥さんが右側の方にいるのは確信したというんです。でもその後、おじちゃんも天の邪鬼が出て反対の行動をとったから、右に行ったらと言ったというんです。それで、おじちゃんは奥さんを見たのかといたら、見えないと思うというんですよ。

でも、あの時、奥さんが右側の方に居ることを無意識でも分かる人は他人の誰でもなく、身内のおじちゃんしかいないというんです。小学校4年生ですからね。どうかとも思ったが、事が事ですからね。私は風子に、だけど、奥さんがおじちゃんが言っているように、好きな人が居て、その人と会うために右側にいたらどうなったかと思うかと一番、聞きたいことを聞きました。そうしたら、風子は、その場合は右側を見ても微笑しないで、唾を吐くとか嫌な顔をする筈だから、右側から帰れなんて絶対に云わないというんですよ。こんな話しは他の客が居たら出来ないのだが、閉店してから特別に髪を切る大将との間柄だったから、大将も包み隠さず大泉に話しをしたものだった。大将と大泉は生きた環境も選んだ道も違うのに何故か馬があった。

――あれは大泉が初の入閣を決めた頃だったか、大将の所へ行くと自分が天下を取ったように満面の笑みで迎えてくれたことがあった。髪を切っている大将に大泉が、ところで風ちゃんはどうかと尋ねると大将が複雑な顔をして微笑してから、

「先だってね。家の常連の客の子どもに万引きの疑いが着せられたんですよ。結論はとんだ濡れ衣だったんですけどね」

「風ちゃんが解決したんだ」

「ええ、まあ、そうなんですよ」

「悪ガキに家の子が狙われているらしくて困っているという話しは聞いていたんですよ。問題の子は信一という名の小学生の子で家で髪を刈っているんでね。良く知っています。坊主の頃からきていましたから、優しい男の子なんですけど、見ようによっては

、優柔不断に見えなくもない。その辺をワルにつけ込まれるらしい。そのワル軍団がスーパーで万引きをしたが、数人は逃げたらしいんですね。その中の一人が、信一だと誰かが警察で白状したとかで、ところが親が問いつめても信一は万引きなんてしていないと言い張ります。

当日のビデオには信一と確定出来る人物は居なかったんですが、リーダーにそう言えと脅迫されているものなのか、万引きで検挙された全員が信一が居たと口を揃えているから、やっかいです。家で、父親の髪を切っていたら、来週の火曜日に警察に呼び出されていて親の私も行くんだけど、どうしたものかってね。その時、後で分かるんですけど、町内会の方が耳に入れておきたいことがあるとかでチョットの間だけ私が電話に出た隙に風子が信ちゃんの父親に近づいて、警察に行くときは美ちゃんも連れて行った方がいいよと囁いたらしいんですよ。父親は丁度ひげ剃りの前にする蒸しタオルを私がかぶせたらしくて、風子の顔は見えなかったらしいんです。私が電話を終えてタオルを取ったので、信ちゃんの父親が鏡越しに後ろを見ると風子の姿は見えなかったって、それも後で聞かされて分かるんですけどね。何だか風子の言ったことが気になってしょうがない信ちゃんの父親は、保育園を休ませて美津子ちゃんと信ちゃんとを連れて警察に行ったんですね。調書も終わり帰り掛けたときに、美津子ちゃんが警察官にお兄ちゃんはその日、保育園に迎えに来てくれたといったんですよ。犯行は午後4時50分ごろですから、立証されればアリバイってやつができるって訳ですよ。それで信ちゃんの父親と奥さんは保育園に行って身内の証言では弱いので、先生でも、その他の誰でもいいから、問題のその日、保育園で信一を目撃した人がいないかってね。信ちゃんも、そこの保育園の卒園ですからね。行けば、見かけた先生が、信ちゃん、久しぶりと声を掛けているかも知れないんですよ。ところが、信ちゃんを見かけたけれど、果

たして、その日だったかどうかは先生も覚えていなかった訳
です。迎えに行ったり行かなかったり、誰か覚えていてくれたら
という、はかない希望が崩れた訳です。

信ちゃんのお母さんが、送り迎えのときに時間と来た人の名前を書く所に美っちゃんが身じろぎもせず心配そうにして、さっきから立っているの、美っちゃんに心配しないでと言うために近づいた時に閃くんですよ。登園簿を見て、慌ててページをめくったんですけど、問題の日のところはなかった訳で、今ある登園簿の前の登園簿は何処にあるのかということになって、園長室にいったらあったわけです。問題の日の自筆を見ると、迎えの欄に5：02。迎えに来た人。兄（信一）と父って癖のある信ちゃんの字で書いてあるのを発見しました。癖字がこんなに頼もしく見えたことはないってみんなで大喜び。その日は運良く、父親と信ちゃんが行ったんですね。普段だったら父親が記帳するんですけど、その時、保育園に業者が来て、その業者の人と信ちゃんの父親が、たまたま知り合いだったので、それで父親は美っちゃんを抱きながら話していて信ちゃんにお前書いておけと言うことで記帳は信ちゃんがした訳なんです。母親と迎えに行ったのなら母親が書いていましたがね、その日、ものぐさの父親と美っちゃんを迎えにいったことが幸いして無罪放免ですよ。全ては、警察に妹の美っちゃんを連れていけばいいとってくれた風ちゃんのお陰だって。この前、信ちゃんの両親が来てね。風子の手を取って涙流していました。風子に言わせると、私の力じゃあない。美っちゃんの手だって。公園で風子が美っちゃんを見かけたら友達とは別のところで寂しそうな顔をしていたらしいですよ。風子が近づいて、どうしたの元気ないじゃないと言うと、美っちゃんが、お兄ちゃんのことを心配なのと言ったというんです。その翌

日に、美っちゃんのお父さんが頭を刈りながら大将にその話をしていたので、美っちゃんのお兄ちゃんが心配なのといった理由が分かったという訳なんです。それにしても、幼い美っちゃんがどうして、万引きの日に信ちゃんが来た日であることを覚えていたのかですけど、美っちゃんが大好きな先生の誕生日を覚えていて、自分で作った折り紙をその先生に渡そうとしたんですけど恥ずかしくて渡せません。

美っちゃんにしてみれば初めてのプレゼントを渡すのですからドキドキです。しかし帰る時間になって、美っちゃんは勇気を振り絞って大好きな先生に真っ赤な顔をしてプレゼントを渡したら先生は大喜びで美っちゃんの頬にキスしてくれた。それで美っちゃんは来年もプレゼントしたいと思って、まだ字が書けませんからね。大好きな先生の誕生日を忘れまいとした訳ですね。その後すぐに信ちゃんとお父さんが保育園に美っちゃんを迎えに来たわけです。警察で警察官が言った日付が大好きな美っちゃんの先生の誕生日だったんで、その日、信ちゃんが迎えに来た日であったことと合致した美っちゃんは、その日はお兄ちゃんを迎えに来てくれたと言った訳です」――散髪が終わると、大将の妻が大泉の大好きな珈琲とピーナツを待合い席に運んできてくれた。大泉が一口飲んで美味しいと言いながら、大将の顔を見ると、眉を潜めるようにして珈琲を口に運ぼうとしている。

「大将、嬉しくないのか？ 風ちゃんの才能が」そういうと、大将は飲みかけた珈琲カップを膝に置いて

「世間では頼もしい子だとか、こんな子が家にも居たらなあとかいいますけどね。でもね。風子のような子を持った親は複雑です。予言者、郷里に容れられずとか言うでしょう。ノストラダムスを語る気はないですが、ジャンヌ・ダルクは火あぶりにされたし、いえね。ジャンヌ・ダルクと家の子を一緒にする気はないんですがジャンヌ・ダルクにして火あぶりでしょう。そういう意味なんです。……やっぱり風子は普通じゃないから、私も気になって調べてみたんです。予言者と言われた人達を――エドガー・ケ

ーシーは1877年にアメリカで生まれ。その9年後の1886年（明治19年）に日本で御船千鶴子が誕生しています。二人ともリーディングとって、催眠状態にある時に色々な質問をすると無意識の彼方的確な回答が返ってきて、ケーシーの場合、質問内容は何に対してでも良く、医療関係の治療法とか、各種の予言とか、過去の透視に至るまで多岐に渡り、その数も一万数千件に及んでいるらしいですね。

御船千鶴子（明治19～明治44年）は明治末期に千里眼の女として日本中にその名を轟かせた人物で。東京帝国大学・助教授・福来友吉博士（明治2～昭和27年）によって見い出され千鶴子は、千里眼...今でいう超能力を持つ女性として、当時の新聞によって一躍スターにまつり上げられたらしいですよ。義理の兄・清原猛雄が彼女にかけた催眠術が発端で、催眠術により透視能力を身につけた千鶴子は、海底の炭坑（九州・万田坑）を探し出した事から2万円（現在の金額で2000万）もの礼金を得たけれども。やがて、父と義理の兄の間で千鶴子を巡り醜い争いが始まり、千鶴子の最期といえは自ら毒を飲み悲劇の終焉を迎えています。私はね、風子の特異な能力に気が付くまでは、ケーシーや御船のことなんて信じない人間でした。しかし風子のことを通して、今は二人の能力はあったんだと確信はしているんですけどね。ケーシーも、金儲けの餌食にされた節がある」大将はそう云いながら天井を見ると大きな溜息を付いたものだった。

「これは大将が気が付いているかどうか分からないけど風ちゃんには確かに、少なくとも一個所だけはあきらかに違っているところがある」

「.....」

「それは、人の話を真剣に聞くところだ。何だ当たり前かと思われるが、相手の話を真剣に聞く人はあまりいない。まして、まだ子どもだもの。まだまだ聞くより話したい年だよ。しかし、あの子は耳でも聞いているが、どうも、心で聞いている。魂で聞いているようなところがある。国会での野党との討論があるよね」

「ええ」

「以前にね。私は野党の人に、同じ日本人、同じ政治家として誠心誠意答えたことがある。真剣に本当に真剣にね。しかし聞いちゃあいなかった。用意された原稿用紙を読むように主張だけした

。

人間の会話って、そういう物じゃあないだろう。真剣に話すから、こちらも真剣に話す。そこで相手の立場だとか、そう考えていた理由も分かる。誤解が解けるってやつだ。それだから、堂々巡りしないで、次の話しに進んでいける。しかし、国会にしてそういうところじゃあない。何時だって最初から最後まで堂々巡りだ。つくづく嫌になってね。人の話は真剣に聞くものだと思ったとき、風ちゃんの顔が現れた。私は、ずーっと以前から風ちゃんの人のお話を聞く態度に魅せられていた。誰でもが出来ることは、実は誰にも出来ない。人の話を真剣に真心こめて聞く人というのは居ないもんだよ。昔の人は言霊といって言葉には魂が込められていると信じていたらしい。きっと風ちゃんのような人が沢山いたのかなあと思ったこともある。言葉尻を捉えて何年も前に言った当の本人さえ忘れていた記事を掘り起こして引用しては足をひっぱっているところが政界だということにね。……風ちゃんは公園で美っちゃんを見かけた。普段より元気がない。その時、みんなが近づくだろうか。そして、美っちゃんの目の高さで果たしてみんなが聞くだろうか。美っちゃんは、この人なら分かってくれると思うから、お兄ちゃんのことを心配だと本当のことが言えた。小学校にも行っていない女の子はもしかすると直感的に話している人か悪い人かを選別する能力があるのではないかと考えるな。そうして、美っちゃんの心を知った風ちゃんは、その事を気に掛けていた。だから信ちゃんのお父さんの話とが頭でぶつかり合って電光石火の閃きがあったのではないのかな。私は素晴らしい風ちゃんの特長であると思っている。大将、アンタ素晴らしい娘を持つ

ているのに、どうして誇りに思わないんだ。風ちゃんが誰にも理解して貰えないときがあったとしても、大将は信じてあげるべきだよ。だって、風ちゃんは何一つ嘘をついていないじゃあないか、その能力を一切悪いことに使ってやしない。

大将、私はね、これは大将だから話すんだが、政治家は未来が見えたら鬼に金棒だよ。これから先、どうするおつもりですかと聞かれるね。分からないさ。誰だってそうだろう。私と総裁選を戦った梶谷さんも亡くなった。大淵さんも、もう居ない。そうしたら私だって分からない命じゃあないか、私にマイクを向ける彼女たちだって、今付き合っている彼とゴールイン出来るのか、破局を迎えるのか、それとも意中の人でない人に申し込まれるか、考えてみたら自分の事だって分かりゃしない。まして世界経済なんて先物取引があって、コンピュータで実際にある金の数十倍の金が世界を電子マネーで行き交う時代に、小さな頭の一個の人間で対処出来ますかって言うんだよ。未来が見える人なんて、成りたくてもなれやしない。何十年に一度出るか出ないかの逸材だよ。政治家は分からないとは言えない、政策がない方針がないということになるからね。だからみんな分かったような顔をして言っているが肝心の自分の命も分かってない。自分の命が計算できなければ、本当は計画なんて立てられないんだ。私は本当に日本という国を豊かにしたいと思っている。しかし時として自分を振り返れば、妻と別れ、その結果最愛の子ども達も二つに分かれてしまった。全て不徳の致すところとしか言いようがない。家族も幸せに出来ない男がどうして、国を幸せに出来るのという声が、どこかで聞こえてくるような気がする。しかし明快な反論の言葉は見いだせない。政治家でありながら、私は具体的には風ちゃんのような人助けはしていない。風ちゃんは政治家でもないのに、政治家以上の人助けを、身近なところで着実に実際にやっている。大

将の言うとおりに、未来が見える予知能力を持った人が身近の悪い人を見抜けないのかという疑問はある。しかし大将がその役割をしてあげればいいじゃないか。適任じゃないか、風ちゃんを一番、愛している人は貴方しかいないんだからね」――大泉は手のひらを見つめた。あの日、大将は自分の手を握りしめ、何度も頷くと言った。

「大泉さん。私も正直に云います。私はそう永くないように思ってます。子どもの頃から病弱で良く今日まで生きて来られたと思ってます。それで、普通の親のように二人の娘の行く末を見てやれないんじゃないかってね。そんな気持が、どこかにあります。私には二人の行く末を頼める兄弟も居ない。それで私が死ぬようなことがあったら、もし風子が大泉さんから見て、悪い方向へ行っていると思ったときは注意してやっていただけませんか。何と言ったって、私なんかよりは視野が広い、世界を見てる。風子も、大泉さんの言うことなら私が言っていると思って聞くに違いありません。風子は実は人の事には強いんだが自分のこととなるとからっきしの所があるんです。そういうときに悪い奴につけ込まれるとガタガタっていく。私はソレを恐れているんです」あの時、握りしめた大泉の手のひらに大将の涙が一粒落ちた。あつい。と感じたことを大泉は思い出していた。

大泉は車の中の二人に言った。

「君たち、ジャンヌ・ダルクって知っているか」

「君の瞳は一万ボルトって歌の中に、ジャンヌ・ダルクよって歌がありましたっけ」

「ジャンヌ・ダルクは教会の異端審問（宗教裁判）にかけられ、異端者（魔女）としてルーアンの広場で火刑に処され、この時ジャンヌ19歳。如何なる理由があったとしても、仮にジャンヌに罪があったとしてもですよ。19歳の娘を大の大人が処刑したんだ。しかも火あぶりだね。時として大人というものは余りにも無知な時がありますよね。誰もジャンヌを諫められなかったくせに

最期はそうした形で大人を鼓舞したんですよ」

「人間は認め合わなくてはいけないのに、自分には到底出来ない才能を見せつけられると利用しようとしたり、嘘だと決めつけたがる傾向があるね」

「そうかも知れませんね」

「ドンキホーテ、ジャンヌ・ダルクに会うか」と大泉が言うと
「はあ」

「はあ」二人は顔を見合わせた。

「人間は認め合うことが必要だ。高め合わなくてはいけない。そうでないと戦いという道しか選べなくなるよなあ」――大泉は大将の熱い涙を感じたその手を見つめた。

翌日、急転直下の出来事があった。大泉は夜になると一人で考えていた。憲民党最大派閥・本橋派の本橋隆太郎と先月、極秘に数人だけで話し合いの場をもてた。今日、その本橋から電話が入り、大泉の政策に協力する。只、公表はしない。反対勢力が狼煙を挙げるからだという。果たして、信じて良い物かどうか、大泉の側近は本橋が大泉を裏切る為の戦術であるかも知れないと訝ったが。大泉はそう捉えてはいなかった。その人のことを理解することは頭では不可能なことだ。しかし同じ立場に立ったことがあれば、相手の長所も短所も遙かに客観的に正しく見えてくる。本橋も大泉と同じ、景気浮揚か財政再建かという剣が峰に立っていた男だった。大泉は総理になって本橋を理解し、総理を降りた本橋は大泉が今、孤独の淵に居ることを誰よりも理解しているのだと思った。派閥が異なり、取り巻きが牽制しあって、会話のチャンスは減ったのだったが、本会議などで互いに会釈する時、自分を見つめる本橋の視線を以前より熱く感じている、大泉は本橋の言葉を素直に受け取りたいという気持になってきていた。一寸先は闇、今日の敵は明日の味方と言われる政界で生きてきた大泉であったのだが、それにしても風子に会うと不思議に良いことが

起きる。咽の渴きを覚えた大泉はサイフォンで珈琲を立てた。琥珀色の液体を見ているときに思い出した。

風子は昨日、珈琲の琥珀色を見ながら懐かしそうに

「昔、私が小学生だった頃のことですけど公園で私に話してくれてこと覚えていらっしゃるでしょうか」と言った。

「……………」

「大泉のおじちゃんも首相になると忘れてしまうのねえー、忙しいですもんね」

何をいいたかったのか。 風子と公園に行った事があったろうか。いつも髪をカットしに行くだけである。大泉は珈琲カップに珈琲を注いだ時に、そうだ！ 一度だけ風子と公園に行ったことがあることを俄に思い出した。公園で珈琲を飲んだ事がある。しかし、どうして、風子と公園だったのか。あれは、夏の頃だったな。私は開襟シャツ。風子は黄色地に色々な動物の絵がプリントされたワンピースを着ていたが、頭には日よけの帽子を被っていた。帽子を取った顔はプールで日焼けしたのか小麦色に染まっていた。しかし元気がなかった。

あれは。風子が小学校3年生位の時だったのだろうか。相模原に用事のあった大泉は、時間が空いたので大将の所へ行って頭でもやってもらおうと思い、足を向けたのだったが、定休日でもないのに店が閉まっている。仕方なく帰ろうとすると

「大泉のおじちゃんだ」という声が聞こえた。振り返ると麦わら帽子を被った小さい女の子が俯いている。元気に声を掛けてくれたのに振り向くと俯いているので顔が見えない。大泉がしゃがんで、麦わら帽子を取ると、やけに目が白く見える。日焼けした顔が目を目を白く見せている。

「風ちゃんじゃあないのか」大泉は風子の頭を嬉しそうに撫でながら言った。ところが風子は微笑しない。小麦色の頬に泣いたような後がある。どうやら大泉であることを知って思わず声を掛けたが、泣いたばかりの顔であることに気が付いて、俯いてしまったようだった。

頬のあたりに涙の後がある。

「髪を切ってもらおうと思ってね。大将に……そうしたら」

「お父さんは、理容組合の会長さんが亡くなられたので、お母さんと妹を連れて、お葬式の手伝いに行きました。それでお店は午前中に閉めたんです」風子は申し訳なさそうに言ったものだった。

「そうだったのか。このまま帰るのもつままないな。どうだ、おじちゃんと、どこか行くか？」

「うん」

「どうした。元気がないじゃあないか。おじちゃんとデートしてくれよ」大泉はランドセルを店に置いた風子の手をとって歩き出したが、いつもの風子ではなかった。

「おじちゃんは、女の子を持ったことがないから、こうして二人で歩くと嬉しいな」大泉がそう言うと風子の耳たぶが桜色に変わった。大泉は微笑した。大人顔負けの予知能力を持つ風子の手は小さいものだった。いったい、こんなに小さい身体のどこに秘められた才能があるのかと思っていた。

二人でマクドナルドでハンバーガーと、大泉は珈琲を風子には牛乳を買ってから公園まで行った。二人はベンチに腰を掛けた。

「アイス珈琲飲まないの」風子が不思議そうに重い口を開いてポツリと言った。大泉は微笑すると

「おじちゃんはアイス珈琲っていうのは余り飲まないんだよ。夏でも熱いのがいいよ。旨いなあ」

「大人は苦いの好きね」

「風ちゃんは苦手か。子どもはみんなそうだ。おじちゃんもそうだった。イヤ、おじちゃんの頃はこんな手軽に珈琲飲めなかったな」大泉がそう言って風子を見ると、また元気のない風子になっていた。食欲もないようだった。――さて、あの時、私は風子に何を言ったというのか、それが、いっこうに思い出せない。

珈琲を飲み終わった大泉は公園で何を話したのか。どうも気になってしょうがない。時計を見ると9時を少し回った頃である。大泉は受話器を取るとボタンを押した。呼び出し音を聞きながら、メモも見ずにボタンを押せたと思っていると直ぐに風子の弾んだ声が聞こえてきた。一通りの挨拶が終わったあとで

「ところで、風ちゃんが言ったことを思い出してね。二人で公園に行ったことだよ。確か、あの日、大将が誰かの葬儀に出席で居なくて、二人でマクドナルド行ってさ。公園に行ってから、それから何を言ったのかが全く思い出せないんだ。気になって仕方ない。それで思い悩むより当の風ちゃんに聞いてみようと思ってね」

「……気にしてくれていたんですか」

「気にするさ」

「おじちゃんは私に、あの時、的確なアドバイスを言ってくれました」

「的確なアドバイス？ 風ちゃんに」

「そうです。余り的確だったので、しっかり、ハッキリ覚えています」

「……さて」

「あの日、私におじちゃんは、女の子を持ったことがないから、こうして二人で歩くと嬉しいなって言ってくれましたけど、本当はあの日お忙しかったのではと私は思っています。何度か時計を見ていらっしやいましたから。マクドナルドから公衆電話を掛けて、それから微笑して私の頭を撫でてくれました。きっと私の為に

次のスケジュールを割いてくれたんだって分かりました」

「そうだったのか」それにしても驚異的な記憶力ではないか10年以上前の事を昨日の出来事のように風子は話した。

「私は、公園のベンチでおじちゃんに心配掛けたくなかったので、努めて普通を装いましたけど、時折、嫌なことを思い出して、会話が出来なくなりました。その時、大泉のおじちゃんが言いました」

「何って？ 自分で言っておいたことを聞くのもなんだが」

「……おじちゃんね、郵政三事業民営化という、風ちゃんには、まだ難しいことを言った頃から、ドンキホーテと言われているんだ。物事に積極的な人だと思われているけど、風ちゃんと同じ頃は引っ込み思案で声が小さくてね。オヤジは後を継がせたかったようだけど、代議士には到底無理だろうという冷たい視線を感じながら生きてきたんだ。どうして引っ込み思案だったのかは分からない。でもこれは私だけじゃあない。ガキ大将が久しぶりに会うと、私とは反対で、物静かな男になっていたりもするからね。あの頃、私は大人になったら、子どもの時代と違って、みんな完成品になって、気の弱い子は強くなり、気の強すぎる子は静かになってってバランスが取れて。そんな風に漠然と大人になるんだと思っていた。そんなことを考えていたんだから、おじちゃんは少し虐められっ子だったのかも知れないなあと思っている」

「おじちゃんが虐められっ子だったの？」

「だって、虐めっ子の発想じゃあないだろう。代議士の長男だったから、表だって虐められた訳じゃあないが、陰湿な虐めにはあったんだよ。犯人が分からないような虐められ方だったんだな。鈍くて気が付かなければ、どうって事はなかったんだらうけどね」あの時、風子は太股の下に両手を敷いて白いサンダルを履いた足をブランコのようにぶらつかせていたことを風子の話しを聞きながら思いだしていた。

「でも大人になると、みんな直っていくんですか？」

「完成品になるって話しかい。それが違っていた。子どもの世界

も大人の世界も変わらないな。妬みや僻みが、あったりしてね。子ども時代と変わりはしない。あからさまに出来ないだけ陰湿だったりするな。子どもの世界では、大企業の社長の子も貧乏な子でも、足が特別に早かったり、勉強が出来れば、それなりに高い評価が得られるだろう。

良い意味の通信簿ってやつがあるからね。ところが大人の世界はもっと複雑だ。勉強が出来た子が商売して成功するとは限らない。大人には通信簿が付けられない。稼いだお金で順序を付ける長者番付があるけれど、世の中の貢献度とは、ほど遠かったりで正当な評価は難しい。だから、完成品なのか未完成なのかの基準もないな」

「そうなんですか」風子は残念そうに言った。大泉はベンチから立ち上がり風子の前でしゃがむと手を握って言ったのだった。

「風ちゃん。君は他の子と違って、先が見えるという才能を持っている。だから、どうして他の子どもは、こんな事も分からないのだろうと悩むこともあるだろう。一方、大人や教師達は風ちゃんが望んでいないのに特別扱いするから子ども達は面白くない。風ちゃんを虐めてやろうという連中もいるだろう。風ちゃんが、誰にも言えない君にしか分からない悩みを抱えていることを、連中は分かろうとしないから、君は大いに傷つくかもしれない。殆ど人は先が分からないが、先が見える風ちゃんには、その恵まれた才能故に悩まなくてはならない。訴えてみても、先が見えない人には、ただただ贅沢な悩みでしかないと映るから、悩みをうち明けても理解してくれない。ところがだ、人生そう捨てたもんでもない。将来、風ちゃんに好きな人が現れたとする。その風ちゃんの愛する人にうち明けたら、その人は風ちゃんの苦悩を自分のことのように考えてくれるかも知れないよ。……風ちゃんは神様の存在を信じているのかな？」

「信じています」

「そうか、多分、風ちゃんの世代、いや、おじちゃんの世代の人に聞いたとしても大半の人は分からないと答えるだろうな。……それじゃあ、神は人に試練を与えると思うかな」

「神様は、人に試練は与えないと思います。私の中にはいつも二人の私がいます。そんなことを言うと馬鹿にする人がいますけど、本当に二人います」

「実は、おじちゃんの中にもね。二人居るんだ。気の弱いおじちゃんと、もう一人、そんな気の弱いことでどうするんだって叱咤激励するおじちゃんだ」

「本当ですか、やっぱりそうなんだ」

「そうだよ。その二人は心の中で、いつも綱引きをしているんだな。今もそうだよ。何とか風ちゃんを勇気づけたいという自分と、子どものことなんか昔のことで分かってあげられる訳ないじゃあないかって言っている自分と二人居るんだ」

「私は気が付いてしまったから、教えてあげたいと思う自分と、教えてくれとも言われていないのに余計な事を言うのは失礼だし生意気だ止めた方がいいと言う自分が二人います」

「そうか、そういう風に神は人間を創ってくれたのかなあ」

「そういうふうで作ってくれた人こそ神様だと思います。でも、神様を信じていない人は、そのことに実は気が付かないんです。綱引きをしている二人がいつまで立っても綱を引っ張り切れずにいるときは、神様だったら、どっちに応援するかって考えると、どちらかの自分が綱を離してしまうので心が決まります」

「だとしたら、自分のしたことに反省しない子どもや大人は不幸な人なんだね。許してやろうか、それとも怒ってやろうか。どうしようか、風ちゃん」

「怒る人は神様に褒められないと思います。怒るってことは自分の弱さを見られたくないから。怒って屈服させようとしているだけ、それより我慢する方を選んだ方が神様は頭を撫でてくれると思うから……」

「医学を目指す人に、私の中には二人の人格があると言ったら、それは二重人格者だというだろうね。だけど、相手が怒って自分も怒っていたら喧嘩になって殺し合わなければ結論が出なくなる。

もう一人の自分が相手の立場を理解しようとするから、丸く収まるということになる。神様は凄いね、一人の人間に二つの相反する感情と一つの理性を一人、一人の人間に埋め込んでくれたんだからね」

大泉のおじちゃんは私の膝を両手でポンと叩くと立ち上がって沈み掛けていく太陽に向かって背伸びをしました。私には夕日になって沈んでいく太陽が、これから昇ろうとする朝日のように思えたものでした」

「だんだん思い出してきたよ。そうだったね」

「あの時のおじちゃんは、私のことを真剣に考えてくれました。人は理性で分かっただけじゃあ動かないと思うんです。熱い息吹とか血潮とか熱い物に触れて感動して人の心が動くんです。おじちゃんは人の心を動かせる人です。だから、私は総理大臣になるって思ったんだと思います」

「……………」風子に何か言おうとしたが大泉は言葉を失っていた。——やっと大泉は言った。

「この前は、私が変わったように思えたんだね」

「……ええ」

「……どう思ったのか言ってくれないか」

「おじちゃんは凄い人気でしたね。恐らくおじちゃん自身も慌てているくらい、分析されました？ どうして人気があるのかって」

「うん。そんなに悪い顔でもないが、そんなにいい顔でもないしな。ドンキホーテがいきなり将軍になった心境だよ」

「フッフッフー」

「まっ、結局、分からない。この人気の理由が」

「人気って株価と同じなんですよ。株は美人投票であるっていった人がいたんですけど」

「ケインズだったかな」

「現在の株価が適正か低いのか高いのかは前のチャートを見なくては分かりませんよね」

「そうだね。つまり、私の人気は前任者達を見なければ分からないってことだね」

「そうです」

「うん、言ってくれないか。総理ともなると面と向かって忠告してくれる人はいないもんだ」

「でも……」

「いいんだ言ってくれ、風ちゃんには何を言われてもカッカしないよ。娘だもんな」

「それじゃあ、父親の大將に言っている気でいいですから」

「ああ、それでいい」

「人気って、根拠がないんです。西郷さんは九州では南州王と言われるほどの人ですけど奥さんには頭が上がらなかったと聞いています。奥さんがどこかの球団の監督夫人のようにシャシャリ出てくる人と同じ時代背景だったら果たして南州王と言われたかどうか分かりません。政治家は芸能人ではありませんから、分かる人かどうかということが大きな問題だと思います」

「その通りだよ」

「私は政治の奥深くは分かりませんから、あくまでも一般の気持で見た場合、本橋さんは構造改革と景気対策の二兎追うもの一兎をも得ず内閣で分かりずらく暗いイメージを抱かせてしまった事で総理をする前の人気を回復出来ていません。冷めたピザと称された大淵さんの人気は低かったのですが景気浮揚一辺倒で楽観的イメージ内閣で株価も随分とあげました。問題は森田さんで、のっけから神の国発言、相次ぐ問題発言でなにもしないのに勝手に

転けている感じで暗いと言うより、何でこの人が総理なの、大淵さんには志半ばということと、景気を上げていたので前の人の方が良かったという思いにさせたのが森田内閣で森田内閣は明るいイメージでも暗いイメージでもなく、何で？ というイメージだと思います。前の人の方が良かったは大淵さんの娘さんが衆院選で立ったときの信じられない得票数が実証していて、あの票の殆どは生きていてくれたらなあという故・大淵元総理への票であったと思います。問題は私のおじちゃんです。

前任者が余りにも酷かった、前々任者の大淵さんになってくれと言う願いと、少し暗いかも知れないけど、兎も角分かりやすいということ、それとダントツ人気の町中真紀子さんが母親・女房役をしてくれたことで、奥さんの居ない、あっ、ごめんなさい」

「いいんだ続けて」

「その、おじちゃんのハンデを上手くカバーしてしまった。それで人気に火がついた。株価は一挙に3千円も上がった。しかし一政策の実体分かるにつれて5千円も暴落して時価総額100兆円消失してしまった。どうしてか、ここからは私の勝手な推測です。おじちゃんはあるから株価が上がったと判断した。ところが株価は下がった。しかし、人気は衰えない。そこでおじちゃんは株価と人気は別もんで切り離して考えるようになったんじゃないかって。……でも、そうだとしたら、それは考え違いだと思います。株価と大衆人気は違うというのであれば、大衆内閣発足当初の株価の値上がりの説明できるものがなくなります。又、株価と人気は別物と考える事こそが人気に溺れています。おじちゃんのやろうとしていることは、誰がやっても一世一代の大仕事です。国民的人気を維持しなくては到底不可能の大事業です」

「しかし、株価が下がっても人気があるよ」

「それは人気があるのに株価が下がったというように考えて下さい。何故人気があるのか、分かりやすいからです。本橋さんから、おじちゃんまでの間で、何て言ったって分かりやすい。小学生でも構造改革なくして景気浮揚なしというフレーズは暗誦出

来るんですから。しかし大泉さん大好き。だけど、株は買えない。だって景気はますます落ち込んで失業者が出て、それでも景気が良くなるかどうか分からないんでしょうということです。人気があるから票には結びつくが株には連動しないという今までになかったパターンが起きています。未曾有の大不景気なのに餓死者は出ていない。

おじちゃんは参院選で米百俵選挙といったでしょう。アノ時代、餓死者が出ていたのに米百俵を食べなかったというイメージから、不景気、イコール喰えなくなるかもという。日本人がもっとも恐れる飢餓の恐怖のDNAを呼び起こしてしまった。そのことで経済をしている人は、おじちゃんを悪い人ではないが経済には弱い人だというイメージを定着させてしまいました。大淵さんみたいに最初は冷めたピザも食べたら暖かいということで人気が後から付いてくるパターンの逆になっています。このままだと最低の内閣になる可能性があります。最善にしなければならぬところに、人気先行の町中真喜子という、失言の女王を送り込んでしまった。反論はあると思います。適材だと思って外相にしたのでしょけれど、何にもしないうちに問題を起こしているのですから、総理の目は節穴だと思われても反論できません」

「うーん」大泉は唸った。

「風ちゃんの事だ。何か意見があるのかい」

「文句だけ言って、策がないのは、無責任ですから、私なりの秘策ですけど」

「言ってくれ」

「でも、私は学生の分際と言うより中退して社会をあまり知らない人間ですから」

「構わない、社会を知り尽くしたという人間ほど、言うことを聞いたら大変になることもある。……言ってくれ」

「さっきも申し上げたとおり、大泉内閣は人気があります。この支えがある以上は大泉内閣は維持できます。でも、それは町中さ

んという小母さん族に絶大のカードをなくしたときのことを考えておかないと人気だけが取り柄の大泉内閣は持ちません。問題は前代未聞の党内の反対勢力です。商人は利益を割ったときに考えを変えます。企業は株価が下がり株主が怒り出すと変わります。政治家は選挙に落ちてただの人になるかも知れないと思うと豹変します」

「待ってくれメモするから。……どうぞ」

「前代未聞の党内の反対勢力の人達に、おじちゃんの話しを通さなければ次の選挙で落選するかも知れないと思わせる特効薬が必要です。それも形に見えるようにしなくてはなりません。それには……」

大泉は日経平均11000円に届かずという見出しの夕刊の上に紙を置くと風子の声に、いちいち頷きながらメモを取りだし始めた。

仕事が終わる風子はメールをチェックしていると、妹の佳枝が

「風ちゃんに、会いたいという男の人が見えているんだけど、どうする？」風子が二階の窓から下を見ると玄関のところに20歳前後の男が緊張した面もちで立っている。

「いいわ、お通しして」佳枝は踵を帰して階段を降りていった。間もなく男が現れた。少し度のキツイ眼鏡を掛けている。苦学生という言葉が死語になってきているが、苦学生とでも表現すればぴったりするような男であった。男が名刺を出したので、風子も名刺をだした。男の名刺には

株式会社ブルースカイ マネージャー 井上憲司とある。緊張した面もちの井上を椅子に座らせると

「あの、ブルースカイはご存じでしょうか」といつてきた。

「私の記憶が正しければ、確か学生の時に出版会社を設立されて、その後、電子書店で当てられた方がいらっしやいました。社長は確か井上天成さんだと記憶していますが」

「有難う御座います。井上天成は私の兄で、私は弟です。現在、首都大学3年生です」

「首都大学、凄い、頭いいんだ」紅茶を運んできた佳枝が言った。

「佳枝、失礼よ」井上は佳枝にも名刺を渡した。

「いいんです。私はこんな男ですから首都大学という肩書きで、なんとか女性に男性として認められている訳で、だからいいんです」佳枝は風子を見ると肩をすぼめた。真面目にしているのなら卑屈な男だが、そうではなさそうだ。佳枝は名刺を見ながら「ブルースカイって、今、若い女の子に一番人気があるWEBサイトと同じ名前ですけど」

「ええ、そのブルースカイです」

「すごい！」佳枝は感心したように言った。

「妹の佳枝ですが、ご一緒しても構いませんか？」井上は頷いた。佳枝は最初からその気でいたらしく、ちゃっかり、紅茶のカップを3つ用意していた。

「実は、今日は、兄からの依頼で私が伺わせて頂きました。と申しますのは、以前より風子さんのWEBサイトを拝見させて頂いておりましたのは私で、特に『風子の独り言』の大ファンでして、この度の『包丁男が不審者？』というエッセイは良かったと思います。それで兄にその話をしましたら、早速、風子さんのWEBサイトに入って拝読したのですが、生憎、兄は現在フランスに取材中でして」

「かっこいい、何の取材なんですか」佳枝が眼を輝かせて聞いた。

「私は興味がないので、良くは分からないんですが、やはり、ファッションの取材の筈です。良く聞いてくればよかったですね」井上は済まなそうに頭を掻いた。風子は井上に真面目さを感じた。番カラと言われた学生が居た時代のインテリとは、井上の

ような人ではないかとフト思った。佳枝が井上に聞いた。

「ブルースカイのポリシーって何ですか」

「一つの考え方に固守しません。上なる男はこう考え、中なる男はこう考え、下なる男はそんなことを考えずに女の尻を追っているというような主張です。つまり多くの女性読者に上級の男と下の男の考え方とは全く異質なものであるということを知らせているんです」

「それって、セクハラ、そのまま女性を男性に置換して返信したいわ」

「それは勿論、男性でも同じ事ですが、うちのサイトは女性週刊誌と違って一切、WEBサイトに来られる女性に媚びたりしません。流行など、どうでもいいんです」

「でも、さっき、社長はファッションの取材でパリだとか」佳枝が言った。

「うん、そこが難しいところです。お陰様でスポンサーもだいぶ増えてきました。そうすると、どうしても世の中の風潮に合わせなくてはならない面も出てきます」

「何だかたってつけない方がいい方」佳枝は井上に反論している。井上と佳枝のバトルになりそうなので

「それで」風子は井上にケーキを勧めながらいった。

「はい、今日お伺いしましたのは、風子さんに、原稿を定期的に送っていただけないものかと、ジャンルは問いません。つまり、風子の独言の延長で良いんです。週に一本です」

「かっこいい、作家みたいじゃあない、やりなよ、お姉ちゃん」佳枝は風子に言った。

「……………」

「あの、お気を悪くされましたか」

「そうじゃあないんです」

「それでしたら、何か、ご不満なところでも」どうしたものかと風子は思った。自分のサイトなら一切気を遣うことはない。自分の思っていることを赤裸々に語ってよいのだが、広告収入で運営

されているとなると話しは別だ。スポンサーに差し障りのあることも出てくるかも知れない。言いにくいことをハッキリ言えないとなると

「……そうですね。井上さんにもお兄さまにも私を認めて頂いて、びっくりすると共に嬉しい気持で一杯なんですけれども……」

「お姉ちゃん、どうしたのよ」

「ここで、お聞きしたことは一切他言は致しません。勿論、風子さんにとって不利なことは兄といえども話しは致しません。

その、つまりですね。昔付き合った女性が有名になった腹いせにヌード写真を売る輩がいますが、つまり、私はそういうことは致しませんと言う意味です。……ああ、私、へんなことを申している、つまりその……」

「お気持ちは分かりました」

「いいえ、これは、真意が伝わらなければ、今日は家に帰っても眠れませんので、もう一度申し上げますと、ジャーナリズムを目指す資質として、人には言えないようなことも聞き出してしまう職業なのです。本日もアポなしで来たのは、風子さんの生の姿を見たかったからです。事前に知っていたでは用意されてしまいますので、裏返せば、取材する側は最初から、このように不遜なわけです。私は、職業上、やむを得ないことではありますが、まづは人間たれというのが、つまり私の信条であることから、只、恥ずかしながら、話しが流暢でないで……」

「井上さん。……以前から気が付いていることなんですけど、私はみんなと、というより、同じ年頃の女性と考えていることが余り共通していません。例えばですね。向こうから背の高い男性が女の子にキャーキャー言われながら歩いてきて、カッコいいスポーツカーに乗り込んだとします。私はこうした男性に興味はありません。でも、男が戦い破れて、帰路の道で涙を流していても、小さな家に光が入るのを見て立ち止まります。フト気がつくやうに焼き芋屋さんが近づいてくるのが見えました。家の前で目頭を拭いて頬を叩いて、出迎える子ども達に満面の笑みを浮かべて、『お土産だぞ』と言います。子ども達は大はしゃぎです。私はそうし

た男性に心を引かれます。それは幼いときからそうです。だから同じ世界を見ていても、友達が見て感じた事と、私とは全く違います。そんな訳で、私の感じた事に、賛同してくださる方は少数ですから、ブルースカイのカウントを稼げないと思います。お断りさせて頂いた方が宜しいのではと思いますが」

「お姉ちゃん。勿体ないじゃあない」

「風子さん。兄は男性です。ソレなのに兄は女性向けのサイトで当てています。先ほどと重複するかもしれませんが。兄のサイトは迎合しないということなんです。今の男は女に対して迎合します。卑屈なんです。ただただ、モテたい。だから女に人気があることが男の価値だと思っているんですね。兄は男のサイトを最初、試みたんです。そうしたらホモセクシャルな人に人気が出てきてアングラになってしまいました。それで逆転の発想で女性専門のサイト風にしたら、あたったんです。今の性はですね。女が男に近づき、男が女に近づくことで、ファッションが中性化して外見からは男か女か分からない。不思議なことに外見が似てくると内面まで似てくる。男の分野であった。柔道・レスリング・マラソンは、女性の方が凌駕している事実があります。無いものと言ったら……」

「相撲くらいかな」と佳枝が井上に言った。

「そうです。しかし、どうでしょう。女相撲というのはすでにアングラではあるようです」

「あるんですか」風子が真面目な顔で言うと、井上は声を落として

「マニアの世界では、あります」

「オッパイ同士がぶつかり合うんだ。痛そう、だけど見てみたいな」佳枝が言った。

「……佳枝、アンタに、つられたわ」風子は頬を赤らめて佳枝を睨むと溜息を付いて言った。

「失礼しました。脱線したので話を戻します。つまり、その、男がより男で有ると言うことは男の本質を磨くことにより、その……」どうやら井上は佳枝が言ったオッパイ同士のぶつかり合いから、思考に混乱が生じてきたようだった。――井上は、無理矢理話題を変えようと

「風子さんは、本来、食のために使用するのが本筋の道具である包丁を若者が凶器として利用していることにはどう感じていますか」

「一番の問題は、残忍さより動機です。推理小説の作家は殺人を犯すことになる犯人の動機を書かなければ推理小説ではなくなります。裏を返せば、納得できる動機がない以上、殺人は犯せないという暗黙の大前提があった訳ですが、三流小説以上の動機なき殺人が現実には起きている。包丁は、どこにでもあるもので、そこにあるから使っただけのことです。マスコミは動機なき殺人が起きる社会の精神構造にスポットライトを当てるべきです」

「風子さん、兄が風子さんのコメントを欲しがっている理由が、お話を聞いて良く分かりました。是非、投稿をお願いしたいのですが」

「お姉ちゃん、やってみたら」

「佳枝、悪い話しは誰でも慎重になるわ。でも良い話しには慎重にならないでしょう。でもね。それは逆なのよ。悪い話しは、結論が見えるでしょう。でも良い話しは結論が見えないでしょう。だから、より慎重にならないといけないのよ」

「でも、結論は見えなくても良いじゃあない」

「悪い話しと良い話しはね。人が持って来て下さるものなの。悪い話しは悪い縁で良い話しは良い縁を導き出すということなの。良い縁は、謙虚で慎重に考えて導き出すことが必要なの。悪い縁談が良縁になることはないでしょう。だけど、良縁だと思っていたものが悪い縁に変化するのには、最初の一步の踏みだし方が、有頂天になっていて将来考えられる障害の布石を打っていなかったことに原因しているものなのよ」井上は風子の話しに新鮮さを覚えていた。今まで投稿を依頼した才女は、何の躊躇もなく飛びつ

いてきたのだったが風子は違う。ただ何が違うのかは言葉では表現しにくい。会わなくては分からない人がいることを初めて知った思いだった。

「私は、井上さんのサイトを見たことはないんですけど。男は女に迎合しない。女も男に迎合しない。

素直に原点である男と女という点を誇示して表現することで、より鮮明に相手を認識して理解が深まる。好きだとか嫌いだとかいうのは二の次であるということでしょうか」風子がそういうと井上は眼を丸くして言った。

「そっ、その通りです。いや、驚きました。私もそのように表現させて頂くことにします」

「そのことなら、私も実は意識して居るんです。日本人の美学の中に、例え無学であっても親は立てるという美風があったわけです。今はすっかり様変わりして。お年寄りが、戻れない若者に合わせるように迎合する。若者はいずれなることが決定している大人や年寄りから学ぼうとしません。これはお互いに不幸なことです。パソコン文明は年寄りを排除して、なおいっそう子どもや若者を強者にしてはいますがそれは改めないといけません」

「風ちゃんの持論は年寄りは気概をもって、もっと威張っていいという考え方なんです」佳枝が言った。

「年長者がいたから若い人がいるんです。産んでくれなければ、どうしようもないんですから。大きく言えば、先人がいたから、私たち後人がいるんです。本当に先祖のしてきたことを否定したら、世界で今、生きている人なんて居ないんです。ところが現実には62億の人がいるとか、それは物理的には生きられるかも知れませんが、でも今、生きている人は将来、確実に年寄りになることを約束されています。私も佳枝も直ぐにおばあちゃんになります」

「いやだ。すぐに、おばあちゃんになるなんて」佳枝が口を尖ら

せていった。

「みんな、そうなのよ、いつだって、おばあちゃんになりたい人なんて居なかったわよ。でもなるんだから、しょうがない。つまりね。私達だってその時代に生きていたら、そうしただろうって謙虚な気持が必要なのよ。だから、年を取ったら、堂々としていたらいい」

「井上さん。ここからが凄いのよ、風ちゃんの話しは」

「聞かせて下さい」

「.....言わない方がいいかも知れませんが」

「是非」真顔で井上はゴクリと生唾を飲んで言った。その姿に風子は

「姥捨て山ってありますよね」

「あの、食べるものがなくなって年寄りを捨てて食い扶持を増やすやつですか」

「あれね。多分、お婆さんから息子に私を捨てにいけと言ったと思うの。息子からは言い出せませんよ。自分の食い扶持を孫にやれば、同じ命でも孫の方が重い訳です。お婆さんは涙ひとつ見せず毅然として息子オレを捨てろと言うんですよ。でなければ自分を産んでくれた人を捨てられますか。それは、息子や嫁に、お前達もその時が来たら、そうしろと言う教えなんです。だから捨てる事が出来るんです。祖父祖母の命より孫の命の方が遙かに尊いということなんです。今の人は年を取ると惚けて当たり前と思っているけど、姥捨て山にオレを捨てろと云わなくてはならない日があるから、惚けている訳にはいかない。だから毅然としなくてはならない理由があったんです。毅然とするのは大変なことなんです。自分が年を取ったときに、アノ辛い中でも婆ちゃんは毅然としていたという立派さが分かるんです。年寄りの毅然は子どもの教育に繋がっているんです」

「年寄りは大切にしなさいと言う話しだと思ったでしょう」佳枝が言った。

「いいえ単に年寄りを大切にしろという話しではないと思いましたが」

「でも 驚いた」

「ええ」井上はハンカチを出すと額の汗を拭いた。

「今の時代はやりたいことが出来る時代なのに、それをしない風潮がありますけど、私は太く短い人生も、細く長い人生も望みません。

自分が信じてやりたいことが出来たのなら、いつ召し上げられてもいいと思っています。何もしない人生ほど価値のないものはないと思うからです。惚けてなお生きたいと思うのは動物界で人間だけです。先ほど言いました姥捨て山の話し、今は未曾有の不景気でも餓死者は出ていません。天文学的に姥捨て山の時代よりいいのに、オレを捨てろという以上の気概も凜としたものも感じません。時代は変わっても、最悪の時代の人との対話は大切にすべきだと思います」

「風子さん。私は経済学部で勉強しています。いつも考えているんですけど、どうして景気が良くなるのか分かりません。教えてください」

「井上さんは、首都大学の経済学部でしょう？」佳枝が言った。

「ええ、でも風子さんに聞いてみたい」

「言いつらいわ。専門で勉強されている方に」

「でも、経済は実際にされている方が主役です。現実には風子さんはお店をされているんですから」

「上手い。流石、首都大学、これは答えるべきよ。だって首都大学の経済学部の方が風子さん、景気はどうですかと言われているのと同じなもの。風ちゃんは景気ウォッチャーに理容業も入れるべきだと言っているくらい何だから」

「あくまでも私見です。私は専門に経済を勉強していませんから、ただ、勉強すれば経済が分かるものなのかどうなのかは分からないという意味です。……日本は世界一になる気がありません。最初からないのなら50年前に太平洋戦争なんてやらなければ

よかったのによって思います。世界はアメリカの自由と平等の精神で進んでいるんですから、堂々とアメリカを抜くべきだと思います。その結果の2位なら、それはそれでいい。しかし世界一は、決して目指さないのだとしたら、アメリカが景気低迷したときには当然こちらも景気低迷するんですから、慌てることじたいがナンセンスだと思っています。

日本のソニーやホンダが世界を代表する企業になっているのに、その国は世界一になろうとしていない。世界第二位以下の性能しか目指していないCPUと容量のハードに世界一のソフトを起動させたいというのだから、いつクラッシュしてもおかしくないでしょう。口には出さない暗黙の了解で、けして世界一を目指さないという精神構造だから、プラザ合意で政府と官僚は二つ返事で了解した。国民不在の円高ドル安政策。これは太平洋戦争以上の失策ですよ。それならば太平洋戦争になる前に、政治家と官僚がアメリカ詣でして、日本の取るべき道を教えて下さい何でも言うこと聞きますからといえ、戦争になりませんでした。未だに同時テロ事件とパール・ハーバーが同次元で取り扱われるなんて屈辱だわ。バブルの崩壊が何故あったのかは、バブルがあったからです。どうしてバブルがあったのか、国民不在・秘密裏の内に日本人が選んだ政治家と日本のエリート集団が一切の抵抗なしに円安から円高の真反対の政策を取ったからです。そしてそのことを、今もって問題にしよとしないマスコミ。政治と権力とマスメディアがアメリカのいいなり、これではアメリカの経済が良くなって日本が悪くなるのは、何も不自然ではない。極めて合理的な結果だと言わざるをえないと思います」

「なるほど、目から鱗です。首都大学の経済学部の学長に推薦したいくらいです。もう一つ風子さんのサイトやお話には、いつも太平洋戦争が出てきます。いつ頃から興味を持たれたんですか」

「産まれた頃から」

「産まれたときから太平洋戦争を考えているんですか？」

「風ちゃん、それでは分からないわ」

「だって長くなると悪いから」

「いいえ、是非、本当に聞きたいんです」井上が真顔になって頭を下げたので

「そうですか、今でも私は何故、日本は太平洋戦争へと突入して行ったのかを、ライフワークのように考えています。実は父の影響なんです。父は幼い頃、アパートに住んでいました。と言っても今のアパートではないんです。私たちは知らない文化アパートの走りみたいなものです。夏の、うだるような熱い午後の日、父は4才くらいだったそうですが何の気なしに部屋を出て、アパートの玄関に向かっていくと、ジープが止まった。車なんてまだ、珍しい時代だったしオープンカーのジープは洋画の中の、いちシーンに見えたそうです。そうしたら、人が降りてきた。尻込みをしていると、階段を上がって何か英語で吠えている。父には、その男が赤鬼に見えた。カーキー色の上下の服、GHQ（連合軍最高司令官総司令部）だったんですね。どうやら、道を聞いているらしい事が分かって。当時タクシーの運転手が昼食を取りに帰ってきていて、その人が赤鬼に片言の英語で道を教えたそうです。アパートには光が入らないけど外は焼けつく太陽だから父から見ると、小さな日本人の大人、といっても当時としては中柄な男が巨人の赤鬼に対してるのがシルエットのように見えたと聞きました。道が分かった赤鬼は最期には少し、大人しくなって引き上げるんですけど、その赤鬼の半袖シャツから出た腕の太さと、日本人の男の足の太さは、赤鬼の方が太かったと言っていました。父は、その時あんなでっかいのに勝つわけではない。何で、日本の大人達はあんな赤鬼と戦争したんだ。絶対に勝つわけがないって分からないのか。子どもにだって分かるのにと首を捻ったことを昨日の出来事のように私にいつも話しをしていました」

「それで、太平洋戦争なんですか」

「ええ、太平洋戦争をいつも私は考えています。何故、日本人は何でも分かり合えるのに、天皇制と自衛隊だけ意見が分かれるのか。君が代を憎む人がいるのか。靖国神社の参拝問題。

そしてバブル経済崩壊と日本人は半世紀前から何かを引きずって生きています。でも、根本には触れたがらない」

「そこを勉強しない、見ようとしなくて、現在の状況だけで、判断しようとする、私のように結論が導き出せないということですね」

「そうだと思います。父は4歳の時に勝つわけないと思った。アノ当時は傷痍軍人が居て戦争の傷跡が見える時代でした。4才の子どもさえ戦争を引きずっていたんです。4才の子どもに分かる論理がどうして大人には分からなかったのか、そして半世紀、どうして日本はアジアの一員なのに世界の2位の次男坊に甘んじながらなのか」

「世界の2位だといけませんか」

「アジアはこれから台頭してくると思うんです。ですが、世界の第2位を気取っていると、アメリカに向けたい鬱憤をぶつけられないから弟を気取っているとしか見えない日本に対して、お前は世界の次男坊を目指しているばかりでアジアの長男になろうとしないという悪感情に対して答えを出せるだろうかという大問題が出てくるのではと感じています。アメリカと日本の合弁会社が増えてきてアジアへ推進していったとき、肌の色が同じ日本人がアメリカの手下のように見えてくる。アジアを下請けのように扱っていなくても、アメリカに向けられるべき憎悪を日本がアメリカに追随する以上、誹謗中傷として受け止めなければなりません」

「その根拠のようなものはありますか」

「半世紀もたつのに、日本の教科書に目くじらを立てています。日本人は忘れたくても周辺諸国が昨日のように太平洋戦争を語ります。日本人は太平洋戦争を忘れても彼らは忘れません。日本はアメリカとグルになって侵略して進出していると周辺諸国に同時に言われたなら、太平洋戦争を勉強もしていない。反省もしていない世代は沈黙を守り通せないでしょう。だから、頭を下げる。頭を下げた。

日本人は知っているのに知らぬふりを決め込んでいると取られることを考えないといけません。物事の火種は、いつも見えない、今という時間にあることを自覚しないと、後々取り返しがつかないと思います」井上は黙って聞いていたが、風子を見ると、真剣になって

「兄が風子さんに白羽の矢をたてた意味が分かりました。風子さんのお話を伺っていて、私は兄に対して少し尊敬の念を持ちました」と言った。

「いいじゃあないか。いい話だ。何を悩むことがあるんだ ハッハッハー」大泉は声を立てて笑った。深刻そうな声で話すもんだから、何事かと思えば、大した相談ではない。大学生の問題を難なく解ける小学生が子どものなぞなぞに悲鳴をあげているといった体とでも言うべきか

「笑うなんて不謹慎だわ」大泉は料亭通いが好きではなかった。出来ることなら、夜は一人で好きな音楽でも聞いていたいほうである。その他には電話で話すことは大好きだった。顔が見えない電話の会話は話しに集中できて味がある。だから風子の電話は大歓迎だったのだが。

『お忙しい、一国の総理に、私くしごとで申し訳ないんですけど』と風子に言われた時には大学生が分からない問題を中学生の自分が解かなくてはならないような心境だったのだが、

「だって、こんなに楽しいことはないさ。ハッハッハー。ハッハッハー」

「もう、一国の総理が、私のような女の子の話しも真面目に聞か

ないんですか。こんな人に世の中を託しているってことが分かったわ」

「ハッハッハー。ハッハッハー。ハッハッハー」

「何がそんなに、可笑しいの」

「ゴメン。ハッハッハー。悪かったよ。ハッハッハー。いや、つまりだ、ハッハッハー」

「笑いながら、話すな」

「まってくれ、今、水を一杯飲んでから話さ、それまで切らなよ」風子は大泉の態度に憤慨していた。人が真剣に相談を持ちかけているというのに何が可笑しいのか、風子は人の相談に対して笑ったことなど一度もなかったから余計だった。でも、そう言えば、私は人に相談を求めたことは嘗てなかったのだと気が付いた。それにしても何が可笑しいのであろうか。

「悪かったよ。ゴメン……いや、何事かと思ったら、それほど悩むことないじゃあないか。こっちから頼んだ訳でもない。向こうからの申し込みだ。受けたらいいさ。結婚の申し込みじゃあないんだから」

「結婚と一緒にしないで下さい」

「結婚だったら、慎重に慎重にって言うさ、だけど、途中でイヤになったら断ればいいんだから。結婚じゃあ、そうはいかない。そういう意味だよ」大泉はこみ上げてくる笑いを押し殺しながら言った。幼いときから大人顔負けの推理力と閃きの勘の子が、こんなことで悩むと思うと可笑しかった。風子の年頃の子なら、自分の才能も省みずに飛びつく話しであろう。そういう点では風子は現代女性にない初々しさを兼ね備えているといえる。それにしても、人の先は見えても自分の行き先は見えないものだろうか、

「済みません。私、少し興奮して、総理大臣に悪態付いたりして」

「構わないさ。以前に大将が私にね。自分に万が一の事があったときは風子の親代わりになってくれないかって頼まれている。今となってはね、アレは大将の遺言だと思っている。私は娘がいないからね。風ちゃんの事を実の娘と思っているんだ。悪態付いても構わないさ。さっきの話しただけど相手は新進気鋭の学生起業家だ。海千山千かも知れないし、日本を背負って立つ名実業家かも知れない。

おじちゃんとしては楽しみだな、二人の意見がかみ合ってもいいし、時にぶつかり合ってもいいさ。兎も角、風ちゃんは自分の思っていることを脚色しないで書けばいい」

「でも、私に本当のこと書かせると、怒ってばかりいる文章になってしまうことは分かっているんです」ナルホド、そうだったのか、風子が悩んでいたのは他人のサイトで怒ってしまうということの心配だったのかと気が付いた。

「分かったよ、君の悩みがどこにあったのか、さっきは笑って済まなかった。それじゃあ、こうしよう。風ちゃん、私の事を言いなさい。君が私に対して気が付いている点を私個人でもいいし、総理大臣としてでもいいよ。そこで判断しようじゃあないか。言われた本人がナルホドと思うか、それとも反感をかうか、人間って言うのは不思議な動物だね同じ事で叱られているのに、あの人だと許せないが、この人なら許せるということはあるんだよ。私も一国の総理大臣だ若い女性の選別も出来ないようじゃあ、この先うまく行かないさ。風ちゃんなら、相手に取って不足はない。さあ、言ってくれ。……風ちゃんの大泉評なら自分のことだからね、良く理解できる筈だ」大泉が、さっきとは打って変わって真剣になって言ったので、躊躇していた風子であったが、意を決したように言った。

「本当に言ってもいいんですか」

「言ってくれ」

「後で、そこまで言われる筋合いはないよなんて言ったら、一国の総理が約束したんですからね。ホームページで公開しますよ」

「どうぞ、構わないさ」

「おじちゃん。それじゃあ、私、本当の父親だと思って言いますからね。私、本気になって話しをするときは脚色しませんよ」

「うん」

「もう、ひとつ。私は本当に話をするときは怒ったような口調になります。それは、いけないことだと幼いときから気が付いています。でも性分で直せません。

優しく話そうとすると今度は閃かないんです。それは文章でも同じです。思いの丈をぶつけると、キツイ文章になります。それも自分の欠点だと昔から思っていました。悩みと言えば悩みではあるんです。その代わり私は誰にでもそうする訳ではありません。私は私の好きな人だけにそうして話しをします。あしからず」

「はっ、心して承ります」

「私は商売を知って商いの道を体得し、体得した者が企業を造って経営を知り、経営を知った人が政治家となり経済を語り、経済を知った人が閣僚となって日本国の舵取りをすることが一番のシステムだと考えています」

「その通りだと思います」

「ところが現状は地盤・看板・鞆の代議士二世かマスコミ受けするタレントでないと政治家にはなれません」

「うん」

「現場百回といますが、身を粉にして働いた警察官の最終ポストは決まっています。一切現場を知らない人でも学歴をもって名門を卒業すれば法律の重要ポストを治めるシステムだから、不祥事が絶えません。今の政界は世襲制の歌舞伎に見る代議士二世か恥さえマスコミに売って名を轟かす才にだけ長けたタレントが絶対有利な状況で、私の考える現場を知り尽くした人材は這い上がれないシステムです。日本が十年以上も不況にある元凶はそこにあると思います」

「そこまでは、素直に同意します」

「おじちゃんはお金をお金を貸して返して貰えなかったことがあります

ますか？」

「一回くらいあったかもしれないね」

「私の父は、五回貸してあげて、三回返して貰い、二回は逃げられました。散髪代ですから、大きな痛手ではありませんが、精神的には大きな打撃です。どうしてなのか、裏切られた、馬鹿にされたという思いが頭から離れないからです。一方、一年も音沙汰無かった人が、ある日、ひょっこり返済の散髪代と父の好きなウイスキーを持って来て。父は大感激していました。

金の問題は心の問題でも有るわけです。商人ならこう考えます。常連さんにはお代を頂いて、一限さんに無報酬では、常連さんに対して申し訳が立ちません。ですから5千円の金を得るには、何回、ハサミを鳴らさなければならないのか、何回、櫛で髪を梳かすのか、そして自分の人生の何十分をその為にあてることになるのかと、全て自分の職業を通して身体がその重さを覚えていきます。労働の対価と報酬を身体で知っていますから、誰でもが大抵けちん坊になります。ところが政治家はそうではありません。億・兆の単位の金をばらまいて大政治家と言われる時代がありましたけど、これは民間とは、ほど遠い精神構造です。身体が労働の価値と連動していない、二世議員は悪いことはしないが、現場感覚とは遠い金銭感覚となります。悲惨な事件も全てお笑いに特化する才能は政治の世界には必要としないものです。如何なる組織も現地現場で鍛え抜いた人が上に上がるシステムがない組織には腐敗が生じます。そういう点で官というアンタッチャブルだった聖域にメスを入れようとしている大泉内閣を私は支持しています。多くの国民が私と同じ気持ちで大泉内閣を見守っています」

「ありがとう」

「ところが、どうしても我慢出来ないことがあります。それは『痛みを耐える』と、おじちゃんがテレビで何度もコメントしている『痛みを伴う構造改革』というやつです。私は髪が薄くなって絶望的になっている人に、耐えなさいとは言いません。髪がなくなっても十二分に素敵ですと真剣に明るく言います。そうする

と頬に赤みが出てきて、明るくなって本当に元気になっていくんです。企業を再建した人は、殆どの人が、まづ社員に希望を持たせることから始まっています。その点に於いて大泉のおじちゃんは人の心の的を射てはいません」

「……………」

金の問題は心の問題でも有るわけです。商人ならこう考えます。常連さんにはお代を頂いて、一限さんに無報酬では、常連さんに対して申し訳が立ちません。ですから五千円の金を得るには、何回、ハサミを鳴らさなければならないのか、何回、櫛で髪を梳かすのか、そして自分の人生の何十分をその為にあてることになるのかと、全て自分の職業を通して身体がその重さを覚えていきます。労働の対価と報酬を身体で知っていますから、誰でもが大抵けちん坊になります。ところが政治家はそうではありません。億・兆の単位の金をばらまいて大政治家と言われる時代がありましたけど、これは民間とは、ほど遠い精神構造です。身体が労働の価値と連動していない、二世議員は悪いことはしないが、現場感覚とは遠い金銭感覚となります。悲惨な事件も全てお笑いに特化する才能は政治の世界には必要としないものです。如何なる組織も現地現場で鍛え抜いた人が上に上がるシステムがない組織には腐敗が生じます。そういう点で官というアンタッチャブルだった聖域にメスを入れようとしている大泉内閣を私は支持しています。多くの国民が私と同じ気持ちで大泉内閣を見守っています」

「ありがとう」

「ところが、どうしても我慢出来ないことがあります。それは『痛みを耐えろ』と、おじちゃんがテレビで何度もコメントしている『痛みを伴う構造改革』というやつです。私は髪が薄くなって絶望的になっている人に、耐えなさいとは云いません。髪がなくなっても十二分に素敵ですと真剣に明るく云います。そうする

と頬に赤みが出てきて、明るくなって本当に元気になっていくんです。企業を再建した人は、殆どの人が、まづ社員に希望を持たせることから始まっています。その点に於いて大泉のおじちゃんは人の心の的を射てはいません」

「―――」

「人気があることは認めます」

「はい」

「でも痛みを耐えろと言う人に人気を託さなければならないのは、肌で金銭感覚を体得して、西洋の主義主張を超えた商道を知って道を極めた傑物が政界に登壇できにくいシステムであって。つまり、言いにくいんですけど日本丸の政治家ほど手薄で人材不足なところはないという証です」

「手厳しいな」

「だって、当のおじちゃんが人気があることに面食らって、参院選の時に私は芸能人じゃあないのに、どうしてこんなに集まってくれるんですかって絶叫していましたよね」

「はい」

「自分でも予測の付かない人気は神様が後押しをしてくれていると思って下さい」

「はい」

「おじちゃんが、やろうとしている行政改革は特殊法人を解体して分割民営化へと持っていく。一部の特権で利権を貪ってる人達が困るのだけのことであって本来が明るい話しなんですよね。違いますか」

「本来、明るい話しであります」

「それなら、少し言い方を変えてみて下さい。要は表現力の問題なんですから、いいですか、これからは『痛みを耐えてくれ』という言葉だけ強調しないで下さい。人間の頭は良い情報には一時的に反応するだけですが、悪い情報は頭にこびりつくんです。だ

から悪い情報を繰り返して言う事は良い結果を生みだしません。言いたくなったら、こういう言い方をして下さい。『最大のピンチこそ最大のチャンスです』間違っても、その後に大胆且つ柔軟になどと言わないことです。緊縮財政の片方で大胆且つ柔軟では、どうせ何もする気もないくせにと国民を白けさせる最悪のフレーズなんです」

「大胆且つ柔軟はいけませんか。……気に入っていて好きなフレーズなんですが」

「いけませんね。前向きに善処しますと五十歩百歩です。作詞家や歌手なら苦情など云いません。でも、政治家の一言が積み重なることで人々は洗脳されます。一切、中身がないヒトラー如きの演説でも、繰り返すことで人々は洗脳されたんです。総理の一言は国民に勇気を与える金科玉条の一言に成り得る特権なんですよ。痛みに耐えてくれ、苦しいけど頑張れ等と言うことは幼稚園児が使う言葉です。殴るぞ！ 痛いからなと同じ低級言語です。日本国で一番偉い人が自分の言葉の一言一言が電波にのって地球の裏側までリアルタイムに届く時代に馬鹿のオンパレードのように、痛みに耐えろとは具の骨頂です。同じ台詞を言うなら美女を募ってテレビで痛みに耐えて頑張って一とセクシーポーズで叫ばせた方が余程、効果的というもんです。貴方より年下の方が遙かに多い国民は、人生の経験者である総理がチャンスだといえればチャンスかも知れないと思うでしょう。得意満面な顔をして痛みに耐えろと繰り返す貴方はつくづく無能だと思います」

「無能！ ……むっ」

「最大のピンチは、最大のチャンスと呼び込みます。それは、生きた生の経済指数の株価を見れば分かります。来年には必ず2倍3倍になります。今がチャンスですと大きな声でテレビの画面の前にいる見えない多数の国民をイメージして真剣に語るんです。政治家は分からないと言うことを言わない生き物です。それほど、全てをご存じなら、どうして10年以上も不景気なんですか。分かってもいないのに分かったような顔をするより、でっかい横断幕を翻して絶叫する応援団長に徹しなさい。人は理性では動き

ませんよ。熱にほだされて動くんです。前回の総裁選で何度でも挑戦するネバーギブアップのおじちゃんには迫力が一番あった。だから人々は共鳴したんです。その時のことを人気が出て有頂天になって忘れてるんじゃないやありませんか。人気は命の芸能人だって急落するんですよ。長島さんは何故に人気があるか応えて下さい」

「急に長嶋さんですか、そうですね。明るいからだろう」

「どうして明るいと思われるんですか？」

「それは、その……キャラクターとでもいうのか」

「違います。声です。最大の理由は声なんです。長嶋さんは現役時代より年を取る毎に話すキーが高くなって、しかも一つのメロディになっています。優勝は無理だと思われた年でもメイクミラクルという言葉で選手を活気づけ、絶対に最期まであきらめない姿を見て人々は自分が於かされている立場と重なりあって、長嶋巨人を声援したんです。声援の声は言霊であり、偉大なる方向性の進路を決定していきます。マラソンのランナーが、余りの苦しさに止めようと思ったときに奮い立たせるもの、それは自分に送られる声援なんです。手に取れない目に見えない声援が人の心を動かすんです。大泉のおじちゃん」

「はい」

「貴乃花の優勝の時におじちゃんの発したツーオクターブも高い『感動した！』と言う一言に館内の観客はどれだけ沸きましたか。そのおじちゃんが、ツーオクターブも低い声で痛みに耐えるとはなんぞやです。貴方はそういうことが分かっていません。這い上がる人、プレッシャーに強い人はみなさん。這い上がることが好きで、プレッシャーを利用する技術に長けているんです」

「うむ」

「人気のあった歌手が売れなくなると、俺のどこがいけないのかと悩むそうです。それは人気株が突然崩壊するのと同じことです。貴方が変わったのではなく、貴方のファンが他のファンになっ

ただけのことです。大泉人気だって同じ憂き目にあう可能性があります。犯罪の陰に女あり、組織の裏に嫉妬有りです。おじちゃんの人気を快く思っていない議員がおじちゃんを取り巻いているんです。唯一の救いは大泉人気ですけど、人気を善用して一向に構いませんが人気があるのは神様の後ろ盾があるという自覚をお持ち下さい」

著名な政治評論家が予備選で大泉が敗退する可能性は99%、対する大派閥の本橋隆太郎は99%の確率で勝つと言った。しかし奇跡が起きて。大泉は圧勝した。その事から大泉人気は沸騰し本線でも勝つことが出来た。しかし風子は人気は神様が後押しをしてくれているだけの事だというのである。

「聞いていますか」

「はい」

「次に、話しのセンテンスが短かすぎます。見ようによっては男らしさに繋がりますが、あるときには無能に思われます」

「又しても、無能ですか」

「ええ、特に経済面の発言は問題です」

「はい」――風子は立て板に水の如く話しを続けている。風子によれば人気を経済に導入せよというのである。経済に人気を――そんな理論は聞いたことがない。大泉は何時の日だったか、柿を盗んだことで母親に怒られたことがある。あの時、母親はこういった。盗んだことは消えません。明日一人で謝りに行きなさいといった。大泉は近所のガキ大将に連れられていっただけで罪の意識がなかったが、母親は言った。『それはお前の言い分で、向こう様には通りませんよ。その論理でいけばガキ大将が人を殺めたら、お前も殺めるのかと言われた時になんと応えるの?』というのである。あの時の母親の口調と風子が重なって聞こえてくるような気がしていた。

「聞いて居るんですか、おじちゃん」

「聞いています。余り辛辣なんでね。辛くなってきました」

「私はセーブにセーブして、気を使って、気疲れしながら話しているんです」

「気疲れしながらですか」

「せめて、相づちくらい打って下さい。会話は調子で進むものです。落語は合の手があるから聞けるんです。一国の総理がそうした間合いも取れないようでは世界の首脳の間で頼りにされませんよ。おじちゃんが相手にされないということは、日本国が馬鹿にされるということです。つまり、風子も馬鹿にされているということになります」

「はい、分かります」

「余り怒っていると、肌に良くないので、ソロソロ終わりにしますけど」

「……あのぉー、お肌が気になるんですか」

「凄く気になります。風子ちゃんは美白で売っているんですから、床屋の娘が色黒いのと、白いのと、どっちがいいですか」

「そりゃあ。山姥より美白です」

「そうですね。続けます。……頼んだ人は一人もいなにのに、選挙になると出てきて、皆さん異口同音に景気を良くして見せまうとって当選する。代議士480名。参院議員250名弱で計730名の諸先生はいい変えれば日本の頭脳でシンクタンクの司令塔です。しかしいっこうに良くなる気配はない。何かやっているとしたら、的を得たことをしていないということになります。これは、もう、はっきり無能であるという烙印を押してもいい時期だと思います。報酬は3千万を超えるんでしょうけど、3千万で計算しても、人件費だけで年間219億。これは頭脳集団ではなくて詐欺集団ですよ」

「じゃあ、どうしろって言うの」大泉はムツとして言った。

「定数削減もなかなかだから、株式連動型はどうですか」

「株式連動？」

「日経平均が3万円になったら報酬3千万、今なら1千万ちょっと」

「……………」

「あきれているようですけど民間はもっと落ち込んでいます。報

酬が減る方が、先生になっても仕方がないと定数削減に寄与するんじゃないんですか。公設秘書の給料は法律で決められているんだし、通ってしまえば参議院で6年間は安泰です。世界的企業のソニーや松下だって6年先は読めない時代だというのに」それにしても、まあよく怒る娘だ。オイ、小皺ができるぞ。もしかすると亡くなったお袋が息子に言いたいことを風子に言わせているのかと思うほど風子は吠えまくっている。

そう言えばお袋も美白だった。

「おじちゃん、おじちゃん、聞いていますか！」

「もち……勿論、聞いております」間違いなく、絶対にお袋だ！
大泉は正座する思いであった。

首相官邸で政治部記者の女性がマイクを突きつけてきた。

「総理、株価が下げ続けていますが、どうお考えですか？」

「株価が上がらないとね。構造改革は出来なくなる」

「何か手はあるんですか」

「あります」

「それは何でしょうか」

「皆さんの資産の1%。百万の預貯金がある人は1万円を、1千万ある人は10万円を株式に投資して欲しい。そうすれば14兆の金が株式に入って、低迷する株価を支えることが出来ます。...
...悪いけどマイク貸してくれる」そういうと大泉はインタビュアーの女性からマイクを取って

「この放送を見ていらっしゃる主婦の皆さん。大泉純一郎です。皆様のご支援で何とか構造改革を推進させたいと考えていますが、景気低迷、株価の上昇が見られない現在の状況では、構造改革も儘ならぬ状況です。そこで絶大なるご支援を頂いたその上にお願いで申し訳ないんですが、百万の預貯金がある人は1万円を、1千万ある人は10万円を株式に投資して頂けないでしょうか。家計を握る財務大臣である皆様のお力添えが景気浮揚に一番利く妙薬なんです。現在は最大のピンチですが、ピンチこそ最大のチャンスです。損はさせません。是非ご協力下さい。有り難う御座

いました」 そう言ってマイクを返すと、

「貴女も協力して下さい。大泉に仕事をさせて下さい」

「総理の声、お茶の間の奥さんに届きましたでしょうか。家庭の財務大臣に総理からの呼びかけでした。以上現場でした」

「総理、株価が上がり始めました。後場1万割れから、上昇に転じました。150円高です」SPの山田が車のテレビを見ながら大泉に言った。

「ホント。マイク握って言っただけなのに。驚いたな」

「言ってみるもんですね」

「言ってみるもんだね」風子に言われた通り、明るく弾んだ声でやったら面白いように効果が現れた。

「風子先生に感謝だな」

「えっ、何かいわれましたか」

「いや、別に」

「総理、今日の交通状況ですと到着するまでに1時間は掛かります。お休みになっていて下さい」

「そう、それじゃあ、そうさせて貰う」大泉はシートに深々と身を委ねた。大泉は車の振動の中で夢を見ていた。

――街の人が騒然となっている。小学生が学年ではなくグループ毎に形成され、全員が晴天なのに傘をもって下校してくるのである。テレビを見ていた大泉が眼を凝らすと、問題の小学校の校長が女性記者のインタビューに答えている。聞き覚えのある声である。何と風子が答えている。どうやら、風子は小学校の校長のようだ。

「この学校の生徒は全員、傘を持って歩いています。晴天の日でも傘を持って通学していますね。高学年の子は女の子も、お父さんの傘を持って通学しているようです。どうしてですか？」

「子ども達が自発的にそうしてくれています。先だって包丁を持った男がこの辺に出没したことで高学年の子ども達が小学校の低学年のボディガードになって自宅まで送り迎えする決議が生徒会で可決されまして」

「ですけど、親御さんから苦情は出ませんか」

「苦情が出たら、その趣旨を高学年の子が話すことになっています。どうしても分からない大人がいたら、校長先生から、その人に言ってくれと言われてはいますが、今のところ生徒達から依頼はありません」

「そうすると、包丁男が現れた時に傘で対抗するという訳ですね」

「そうです。大人に包丁持って追っかけられたら敵う小学生はいないということで、提案として木刀を持たせてくれと云われたので検討しようと思っていまして、そんなことをすると、教育委員会から校長先生が辞めさせられてしまうから、傘がいいという事になったらしいんです」

テレビ画面が女性記者が休み時間に、校庭で遊ぶ高学年の子にマイクを向けている映像に変わった。

「君たち、何かあったら傘で対抗できるの？」

「本当は木刀がいいと思うけど、それだと物議を醸すでしょう。どうせ校長は御身大切だから教育委員会に掛け合ってはくれないと生徒会では、ふんでいたんですけど、今度来た風子・校長先生は、相手は刃物を持った人殺しだ。素手で敵う筈はないピストルの方がいいよ、なんて物騒な事言うんです。でもピストルはマズイんじゃないですか、銃刀法違反でショッピカれますよと言って断ったんです。そうしていたら教育委員会が、木刀を小学生に持たせようとしている校長が居るからって、本当はピストルだったんですけどね。問題にするみたいだという情報を入手しまして

、入手先は頼まれても申し上げるわけにはいきません。生徒会に理解ある筋の人とご理解下さい」

「晴天でも傘は、持ってきても問題にはなりません。とがめられたら、いつ降るか分からない天候に対処するためだと言うように申し合わせています」

「僕も法律的にも正当性は立証できると思います」

「僕は、二本持ってます。二刀流です。宮本武蔵にヒントを得ました。相手は刃物ですが、二本でこうしてクロスして一撃を受けると、一本に比べ遙かに傘は丈夫になって時間を引き延ばせます。それだけ低学年の子が逃げる時間を稼げるので、僕は二本の傘を持つことにしています」

「凄い。でも、相手が大男だったら敵うかなあ、どうだろう」

「ご心配なく、うちの小学生は全員、呼子を胸からぶら下げていますから、危険が生じたときには呼子を吹いて助けを呼ぶことにしています。これを呼子でダッシュ作戦と名付けました」

「低学年はいいけど、君たちは盾になるんだから危険だよね」

「私達は低学年の弟・妹たちを守ることを使命だと思っています。その話しを父にしたら、あぁーサブちゃんの歌が聞こえてくるようだ。親の血を引く兄弟よりも～♪、義兄弟の方が契りは深いもんだ。昔、映画で高倉の健さんがそう言っていたなって涙声で言っていました。普段はクールな奴なんです。古い男の情に触れた気がしました」

「私は女性の見地から申し上げます。私達、年長者のお兄さん、お姉さんが弟や妹を守るのは当然のことですが低学年を守ろうと考えてみたところ、多角的視野での見地が必要であることが分かってきました」

「僕は、中近東諸国の僕らと同じ世代の子が、命がけで戦っている姿を見ると涙が出てきます。僕たちと同じ年代の子が地雷で足をなくしたり、手をなくしたりしています。子どもが仕掛けた訳でもないのにとすると悲しいです」

「命かながら生きている人がいる一方で、マネーゲームをしているだけで儲けている人もいます。しかし、それは時を同じくして生まれているにも関わらず、単に産まれた国が違うというだけのことなんです。このことを新しい人類の宗教観の根幹理念にすべきだと私は訴えたいです」

「僕は今回の事を通じて、子どもネットワークを構築して世界の子ども達が平和を考える習慣が身に付けば、世の中に貢献できると思うようになりました」

「ですから、私達のしている行為を批判されてもいいのですが、子どもネットワークを作っていくには、どのような知識と知恵が必要なのか、大人の人達からアドバイスもお願いしたいと思います。URLで受け付けていますので後でテロップを流して下さい。お願いします」

「そうか、お姉さんも心がけてみるよ。みんなの眼が、あんまり輝いているんで、引き込まれます。お姉さんも何が出来るか考えてみる。子どもサミットが出来るようになるといいね。……以上、現場からのレポートでした」――大泉が寝ながら笑ったのでS Pの山田は不審な顔で大泉の顔を見た。

臨時国会の総理の答弁を国会の運転手控え室で聞いていた運転手の中村の側に大柄のS Pの山田が座った。

「最近、明るくなってきたな」山田は中村に親指を立てて言った。

「私も、何が変わったのかって、今、考えていたところですよ」

「民主党のタレント議員、小橋の追求にはいつもの痛みに耐える米百俵内閣という話しで対抗していたけど、ピンチは最大のチャンス、今、日本は最大のチャンスの時期を迎えていると言ったら、面食らっていたな。当然、痛みに耐えた後の青写真を見せろというつもりだったんだらうけどね」

「昨日の、憲法を護る為に国が存在しているのではないの論議も

良かったですね」

「そうそう、国を護る為に憲法は存在しているといったら民社党の切り込み女隊長の春本が噛みついてたやつだろう。首相が春本に貴方が命がけで守るべきものは何ですか、と聞いたらしどろもどろだった。

そうしたら、首相が守るべき物がなんであるかで、その人の価値が分かるんですよ。自分の命を捨てても子どもを守ろうとしたらその人は、紛れもなく親です。だとしたら命がけで国を守ろうとする人こそが総理大臣で、国が滅びても憲法を優先して守ろうとする人が総理大臣であったなら、その国は内部から崩壊します。一遍の法律でその国は滅びます。そうであるのなら総理を辞めて、その男は憲法学者になるべきです。私は全身全霊でこの国、日本を守ります。太平洋戦争以前の先人が日本を守るために人力を尽くしたのなら戦争に突入することはなかった。何故なら日本を護ると言うことは若人の命を守るということであって、今、どこかで産声をあげた赤ん坊の命を守るということです。春本さん。貴方はいったい何を守りますかって聞いたら、春本は日本を護ると応えたね。そうしたら首相がそれは本当に有り難いと出て行って彼女の手を取って強い握手を交わした。テレビはその姿を映しだしていたけど、あれは演出だったのかね」

「少なくとも、一番見ている主婦層には受けたでしょうね」

「論戦ではどちらに分があるか分からないが映像では首相が野党の噛みつき女を手中に収めた感があった」

「兎も角、変わりましたね」

「守るべきものが何かで価値が決まる。いいね。みんな考えた筈だよ。自分にとって命に変えても守るべき物って何だろうかとね」

「文学的でもありますし、含蓄もある。総理が総理然とした答弁をするって良いものです」

「だけど、不思議なんだよなあー」中村がそう言うと山田が

「何が不思議？」

「大泉さんの車の運転、私は長いんですよ。この前、相模原に頭やりに行ったでしょう」

「ああ、帰り際に見たけど、美人の理容師のところね」

「あの床屋に行くと、大泉さん。元気になるんだよね。昔から……」

「偶然でしょう。床屋行って元気になるなんて聞いたことないね」

「それは、そうなんだけどねえ」

風子が仕事を終え遅い食事を取ると、自分の部屋に引きこもりパソコンの前に座ると5時間は動かなくなる。それが風子の日課であった。風子は、今日あったことを全て入力し理容業の2世で立ち上げた景気ウォッチャーのサイトを整理してからメールチェックすると井上憲司からメールが届いていた。

風子様

ブルースカイの専属コメンテーターになって頂き有難う御座いました。兄と私は飛び上がって喜び合いました。これからも宜しくお願い致します。

ところで、私も風子さんに、お会いしてから、太平洋戦争の研究を始めました。兄も多大な関心を寄せています。この先の日本を考えると時の試金石であり、原点であると捉えています。世論を分割する天皇制と自衛隊の問題こそは、与党・野党の縮図であると捉えました。兄のコメントでは、そこまで考えていたことではないにせよアメリカが、この二つを憲法に明記したことで、日本は一つになれない完璧なまでの政策に成功した。何故なら、東京大空襲・広島・長崎に原爆を落として上陸し天皇制を名目上、存続させる一方で漢字に制限をいれて、自国の一世紀前の新聞記事は読めないようにして民主主義を定着させ、力で屈服させた国が

自ら選んだ総意の憲法が戦争放棄であったから、イスラム原理主義とパール・ハーバーを一緒にされても、日本は何の異議も唱えず。

ショウ・ザ・フラッグの一言で、せっせと押しつけられた憲法枠で自衛隊派遣までしてくれる。日本自体が苦しいのに米国の国債を株式市場の時価総額と同じ200兆という金を注いで米国を支え、それを一切誇示しない。しかしです。怒ることなく従順だけだとどうなるのか。それは、ただただ舐められるだけではないのかと。――天皇は国民の象徴である。このことを前提にしても国民が死に絶え、デジタル頭となって成人してプラスかマイナスかで全てを区分けしなければ納得できない世代の台頭する若者が、アナログの情緒・観念を受け入れず。象徴などいらない。否定できない任命権なら時間の浪費でしかないと言出し出したとき、何をもって天皇制が存在したのかの論評もなければ、天皇制は鯛の頭も信心からという言葉に席卷されて飲み込まれてしまうでしょう。だとすれば、そうした世界に類例のない制度を作り出した祖先は、みな無能という完結した浅知恵で幕を引く日が来るかも知れないという結論に、ひ弱な兄弟は、しばし絶句する思いでした。来るべき日に備え、何故日本は憲法1条と9条で二分されることになったのかの研究をしていこうということになりました。誰かが自発的に率先してやり遂げておかないと大きな禍根を残すと思ったからに他なりません。分かってしまった。気が付いてしまった浅はかな兄弟にご賛同頂ければ幸いです。第二次大戦での死者累計6000万以上、内アジアで2000万、内日本が310万人。この数字は全人類が諳んじられるくらいにしくはないと思っています。ところで、風子さんに、産まれたときから太平洋戦争を考えていると言われたことにショックを受けて

質問する機会を逃しておりましたが、どうして日本は太平洋戦争の道に進んだのでしょうか？ 風子さんの私見で構いません。ご意見をお聞かせ下さい。宜しくお願い致します。

風子は返信ボタンを押して、返信メールを打ち出した。

お仲間に入れて頂いて心より感謝申し上げます。お兄さまに呉々も宜しくお伝え頂ければ、幸いに存じます。

ご賛同頂けるとは思っても居りませんでしたので、赤面しながら、キーボードを叩いています。床屋の娘の戯言を、飛ぶ鳥、落とす勢いのご兄弟にご理解頂けたのですから、穴があったら入りたい心境です。告白致しますと。「フウは、太平洋戦争ばかり言うから、誰にも、もてないのだ」と友達から言われ続けてきて変わり者というレッテルを背負って生きてきた気がしています。自分の感じたことを間違っているとされたのなら聞く耳もあり変わり様もあるのですが、誰一人として異議を唱えたことはないことから、間違っていないのなら自分だけでも問いつめてみようと思出したのが中学2年の夏の頃でした。ですから、ご兄弟に理解頂いたのは、こちらの方こそ飛び上がるほどの喜びなのです。ところで株式上場の噂を耳にしました。私ごときが井上様に提言する事に若干の抵抗はあるのですが、分かって頂いているということをご前提に申し上げますと、WEBサイトはビジネスモデルとしての特許はありますが、オープンアーキテクチャーですから誰にでも容易に真似する事が出来ます。もし真似しようとしても真似られないものがあるとするならば、それは信念とも言える強い意志がWEBサイトに反映できるかどうかだけだと思っています。

ですので呉々もお急ぎにはなりませんように、同様に太平洋戦争のことに關しても、この先、日本が未曾有の大不況から脱却して再び全世界の注目を集めるときが遠からず確実にやって来ると

確信しているのですが、好景気になれば日本人は今にもまして日本人であることを忘れ去るでしょう。しかし、何時の日か日本人が日本人であることを見つけださなければならぬ時がやってくると思っています。そのことは、例えば周辺諸国の人々が、或いは世界が、第二次大戦からの奇跡的復興、ニクソンそしてオイルショックを切り抜け、バブルも克服した日本人に対して尊敬と懐疑の目を向けられた時に正面から対座して語らなければならぬ時が来るとと思っています。

そう言うことから好機にして万雷の時期の、その日まで、ひたすら真実の資料造りに徹していただいた方がいいのではという気持ちを前置きして、私なりの私見を述べさせていただきます。

私は以前から現在のような完備された学校教育の過程から、いっこうに逸材が輩出されない事に大きな疑問を持っています。現在はベルトコンベアーの上に勉強にのみ長けた頭を大量生産している状態ではないでしょうか。その結果、規格商品ばかりが出来て逸材が出ないのです。本来の目的の人物を作り上げるシステムが機能していません。勉強の頭から仕事の出来る頭へと教育を変えるシステム作りが急務です。特に現在はITの普及で過去ログに長けた勉強頭の必要性は意味をなさなくなりました。勉強頭の弊害は一高・東大・軍閥という勉強頭のエリート集団が、勝つという目的から大きく逸脱して太平洋戦争へと進んでいった結果が全てを象徴しています。アノ当時の国民は勉強の出来る秀才がよもや間違った道を選ぶ筈がないと、全幅の信頼を官僚と政治家に捧げていた頃だったと思います。一方、信頼された側の当時の陸軍や首相は本当に勝つという信念はなかったようです。しかし、所詮は勉強の頭、熱狂する国民に対して止めるという結論はプライドが高いばかりに言えなかったのだと思います。

八紘一宇・神風が吹く国日本・現人神の居られる国が破れる筈がない、アノ巨大な中国・ロシアにも勝ってしまっていた日本は悲劇の道を選ぶことになりました。当時の大秀才達は所謂、過去に強い勉強の頭で学歴にふんぞり返り、学士様というレッテルに酔いしれる完成された典型的・学歴勉強集団で到底仕事の出来る

。仕事のしたい坂本龍馬タイプなど完全にシャットアウトするシステムが働いていて多かれ少なかれ、最近まで大蔵官僚の不祥事に代表されるように、風習としてその名残が残っていたのではないかと考えています。

要約すれば、こうした時のエリートと学士様のすることに間違いはないと信じすぎた国民の招いた悲劇ではなかったかと、戦いの目的は全て勝利することに尽きるのに、負けるかも知れない道を選んだのは、そこに仕事が出来ると頭の未来志向の人が居なかったことに尽きます。国会答弁で今も尚、前例がない事だったので、分かりませんでしたという言葉こそ、何よりも勉強の頭を引きずっている人の巢である証明です。最早、彼らは現実を認知する能力と現場を汗を流して歩いた経験もなく、ただただ書類審査だけで事を進める人達ですから、書類が嘘であっても嘘が完璧なら見抜く力はありません。

ですので、日本の将来を考えると、天下り思想の経済から、現場で汗を流しつつ明日を考えるような仕事の頭の人が現場に埋もれることのない。サバイバルが何回でも許されるジャパン・ドリーム思想の組織工学を構築すべきと考えています。

> どうして日本は太平洋戦争の道にすすんだのでしょうか。風子さんの私見で構わないのです。

> 教えてください。

この件ですが

太平洋戦争の本質は太平洋戦争に着目しても分かりません。太平洋戦争の後に着目した方が本質が分かります。戦後、ドイツと朝鮮は南北に分断されました。これは背後に大国アメリカと大国ソ連の凌ぎあいがあったからです。日本はどのようにして分断されなかったのか、アメリカは日本を民主主義による資本主義陣営に組み込

むことで、大国ソ連の防波堤としてソ連の占拠を拒んだのではないのでしょうか。つまり第二次世界大戦の本質は資本主義と社会主義とのイデオロギーの戦いであったというのが私の結論です。話しを複雑にしたのはヒトラーとムッソリーニが登場したことです

。

プロレス流に解説すればメインイベンターの大国アメリカとソ連は睨み合いの状況にあった時、卑怯者のヒトラーとムッソリーニがタッグを組んで場外からメインイベンターの足をひっぱり凶器攻撃したことで収拾がつかないほどに場内騒然となり暴動が始まり、本来戦うはずの人が誰であったのか分からない状態になってしまったことです。資本主義と社会主義からは遙かに遠い島国・日本は一切、介入せずに観客に徹するべきであったというのが私の見解です。不安な状況下で何もしないで情勢を見るというのは、吉田松陰は松下村塾で塾生に何度も言って聞かせた言葉が飛耳長目。情報を出来る限り集め、その中から、信憑性のあるものだけ抽出して、英気を養い、日本国が危機に瀕したときは一命を投げ打って国に尽くせという教えです。これが仕事の出来る頭の人のポリシーです。時代背景からして吉田松陰に飛耳長目の精神を誰が教えたのかは分かりませんが、松陰の精神は情報化社会の現代にも通じる理念で、こういう人が日本の国のリーダーに存在していたらと思うと残念です。しかし、既に答えの出ている過去のデータベースのみに長けて、整理は出来ていても整頓（必要な時に必要なものを出せる能力）の出来ない勉強の頭、集団では望んでも無理だったでしょう。

最近でも旧大蔵省・外務省と不祥事が続いています。これは今もなお、勉強の頭、優先主義の組織構造によるものです。今でも国民の税金は自分のものと思っている節がありますが、事は遡ること50年以上前の事ですから、その時の陸軍・官僚達の税金に対する考え方は追求するのが怖いくらいです。司馬さんが、昭和

の小説を書けなかった最大の理由は昭和の時代に龍馬・隆盛・海舟・松陰を見いだせなかった事だと思います。

作家・司馬遼太郎さんは幕末から明治にかけての小説を書かれましたが、一冊として昭和の小説は書かれませんでした。

戦車部隊の少尉だった。昭和20年、22歳の司馬さんは、逃げてくる民衆が作戦の邪魔になった場合を尋ねると、大本営参謀の「戦車でひき殺しても構わない」という命令に大ショックを受けます。守るべき民衆を守らない戦争に絶望感を抱きました。戦争が終わると、いつから、これほどに日本人は馬鹿で無能になったのか、昭和という時代を「狂気」にした日本人捜しの旅が、司馬作品だと思います。晩年、昭和元年から敗戦までの20年を描こうと旺盛な取材と資料集めに奔走されますが昭和の小説を書くことを断念されています。近くでこれを見ていた半藤さんは、登場人物に魅力ある人物が見いだせなかったのではと前置きして、清いところがない。颯爽としたさわやかさがなく、底知れぬ無責任集団で、全くリアリズムが見いだせない。坂本龍馬・勝海舟・西郷隆盛といった理念とか思想を感じる人に出会えなかったからだと言っています。司馬さん自身、もし書けば一年もたたない内に内蔵までボロボロになって死んでしまう、とまで言わしめた昭和の登場人物は、書いていくほどに気分が悪くなり、書かなければならない恐ろしいほどの無責任と無能と醜態。国民の血税さえ遊蕩三昧に使える無神経を目の当たりにして、特に関東軍の参謀はとても書く気になれない連中だったのでしょう。

風子

でした。

風子は送信ボタンを押した。風子の目に光ものがあつた。風子の人生は天才少女というレッテルか変わり者というレッテルだけ貼られた人生であつた。殆どの人は風子の独学の努力を評価しなか

った。徹夜で調べたことでも、閃いたのだと取られてしまう。その事は風子にとって人間性を否定されているようで辛いことではなかった。最初、井上憲司も興味本位だと思っていたが、井上は風子の努力を認めてくれている。やっぱり、おじちゃんは総理なんだ。相談して良かったと風子は思った。――嬉しい、こういう時はライオンハートだ。風子は電話の受話器を取った。

米軍などの軍事行動を自衛隊が支援するテロ対策特別措置法案が衆院本会議で賛成多数で可決、参院に送られた。参院でも二週間後には可決されるだろう。論戦に次ぐ論戦で大泉の声は枯れていた。

シャワーを浴びてから、長椅子で少量のワインを飲んでいると電話が鳴ったので受話器を取ると

「ハロー、もしかして、ライオンハートさん」

「はい、ライオンハートです。もしかしてジャンヌ・ダルクさん」

「そうです。今日は涙が出るくらいいいことがあったので、嬉しくなって、それでライオンハートのお父さんの声が聞きたくなって、前に相談したブルースカイさんの専属コメンテーターになりました。いい人に巡り会えて良かった。おじちゃんのアドバイスのお陰です」

「それは、良かった。娘の弾んだ声は、こっちも嬉しくなる。特に今日はソウリ・ソウリの魔女の宅急便とバトルやって、ほうきで蹴飛ばされそうなところもあったから余計だよ」

「魔女に聞こえたら、鉢巻きして、ほうきの他に、はたきも持って現れますよ」

「もう、死んじゃうよ。国会だけで疲労困憊なんだから」

「声がかすんでいますね。お疲れさまです」

「問題山積みでね。風ちゃんみたいに未来が見えれば、楽なんだが」

「何もかもお見通しかなんて言われる事ありますけど。関心事が

ない事には、先は見えませんよ」

「唐突だが風ちゃんに前から聞こうとっていて、なかなか切り出せなかったんだが、どうして未来が見えるのか、どうすれば見えるようになるのか、教えてくれないか」大泉は、何度か試みようとして出来なかった質問を風子に言うと、風子は少し沈黙してから、語り出した。

「……友達にも良く聞かれるんです。でも、正直なところ、自分でも分かりません。しっかり見える時もありますし。見えないときもありますから」

「でも、大半の人は、全然見えないからね」

「全然見えないというのは、おかしいと思っています。見えないものだと決めつけていけば見えるものも見えなくなります」

「決めつけるのは良くないことなんだね」

「ええ、過去も決めつけるのではなく、自分もその時代に生きていて同じ環境にいたら、同じ行動を取ったでしょうと思わなければ、過去と話しは出来ません」

「そうか、過去を現在の状態から判断するのはいけないんだ」

「判断するのは良いんですけど、決めつけるのはよくないと思います」

「決定的な膨大な過去のデータベースを全部決めつけられと思うところに驕りがあるという訳だね」

「ええ、それと非決定的な未来でも決定していることがあります。その事から目を離してはいけません。でも、決定している事実を真正面にして対座するのは、そう簡単ではありません」

「決定している事実って？」

「一番ハッキリしている未来は、誰にでも死が訪れるという決定的な真実です。これだけは回避出来ません。いつなのかは分かりませんが、その日が来ることは確実です。これを日々の生活に当てはめると、今日、一日生きたという事は確実に一日死んだということになるんです。この死を真っ正面から捉える人と、回避す

る人として随分と違って来ます」

「当然、真っ正面から捉える人の方が良い人生なんだね」

「そうだと思います。次に死後の世界があると思う人と、そんなもんないと思う人として違って来ます」

「死後の世界なんてないと思えば、人殺しも、犯罪もやりたい放題になるね」

「そうです。おじちゃんは、どっちを取りますか」

「死後の世界はあるを取る」

「私は、死後の世界はあるし、生前の行いで死後の世界の出るところも違うと思っている人間ですから、死んだら何もないと嘘ついて、生きているうちが花よと、殺人を平気でするような人は不幸になることまでは分かりますけど、その人の未来は見えません。恐らく、パソコンでいうOSが違うんじゃないかと思います」

「今の話して、死後の世界の出るところというのはどういう意味なの？」

「今も地球のどこかで、産声を挙げていますが、日本に産まれる子と戦争をしている国に産まれる子とでは人生が変わってくるのは当然です。でもどこかで振り分けられている訳です。それが人の手の届かないところ、言葉でいえば神の思し召しということになります」

「そうか、死後の世界も一つじゃあないんだ。風ちゃんはこの世界に行きたいんだ」

「私は、勿論、日本村、行ったら真っ先に、お父さん捜して抱きつきます。抱いてもらって。お父さんの耳元が近くなったら、耳元に囁きます。風子はお父さんに心配掛けたけど、精一杯やるだけのことはやって来たし、十分に幸せでした。いつも見守ってくれていて有り難う御座いましたって言うのが夢なんです」

「そうか！ それはいい。大将小躍りして大喜ぶぞ。ずーっと風ちゃんのこと心配していたからな。不幸にならなければいいっ

てソレばかり、いつも言ってたよ」大泉は目頭を押さえながら言った。

「その時は、おじちゃんも居るのよ、次に飛びつくんだから」

「オウ、仲間に入れてくれるのか」

「アレ、私のお父さんじゃあなかったの」

「お父さんさ」

「だったら、仲間に入れてくれるのかなんて言わないで下さいよ」

「そうだ。そうだよなあ、……初めから仲間じゃあないか。ド忘れしていたよ」

「フッフッフー」

「ハッハッハー」

「ところで、赤ちゃんはコウノトリが運んできてくれるといいんですけど、おじちゃんもコウノトリが喜ぶような事をしましたか」

「していないな」

「コウノトリが運んでくるのなら、お迎えもコウノトリなのではないでしょうか？」

「それは聞いたこともないから、分からないな」

「私は天動説の時代に地動説を唱えたコペルニクスの発想の中に、遙かに極小の地球の周りを、遙かに大きい太陽が回るより、小さい地球が回った方が効率がよいという考えがあったと思うんです」

「極小の地球の周りを遙かに大きい太陽が毎日回らなければならない義理はないと言う訳か」

「そうですよ。つまらないから、ヤーメタって太陽に言われたら、一貫の終わりですよ。それより自分が回っていた方が安心じゃないですか。第一、天が動いているんだったら、周りの無数に見える星も一糸乱れずに回らなければならない事になります。ですから天動説には人間のエゴと不遜な心が見えてくるんです」

「そうだよなあ。昔の夜は明かりがないんだから月と星が明るさの

シンボルだった筈だ。だから今の人より遙かに空を見上げて考えていた。空は毎日毎日、地球のために天空で一回りするマ스ゲーム、やっていたという事に疑問を持っても確かに不思議はない。地球も一つの星と考えれば、その中にいる自分の存在は一握りの砂の中の砂粒にもならないことは分かっていた。そんな人間が利己主義だったと言うのは偉大な発見だね。

それにしても一個だけ、ヤーメタって止まったら、次から次へと、確かにぶつかっちゃうもんな。一夜にして地球は、イヤ宇宙が壊れるね」

「そうでしょう、それより地球が回っている方が燃費がいいじゃないですか」

「そりゃあ、天空が回る一日分の燃料で地球一生分の燃料は確保出来るかもしれない」

「そうでしょう。シンプルで安心で無駄がない。最高の構造改革的発想法です」

「そうだな」

「私ね。そういう発想が好きなんです」

「風ちゃんは天文学が好きなんだ」

「人間って、自分を見ることは出来なくて、他との関わり合いで自分を見ているでしょう。今見ている星は何千年前に旅立った光と私の瞳が出会った瞬間なんですよね。地球も自分自身ではどこにいて自分は誰なのか分からない。自分の位置と自分の正体を知るためには相手が必要になります。ずーっと星を見ていると自分も星の生物だと思えてきて、それじゃあ、今見ている星を拡大して行って人と人が戦争していたとしたら、お止めなさいと言うでしょう。その反対に、そっちからも、こちらが見えるはずよ、そこで戦争していたら、やっぱりお止めなさいよって言いたくなるでしょうって、争い事や憎しみがあるのに輝いているのは何か変よって。勝手に想像しているの」

「みんな、星を見ている宗教があったら、いいかもな」

「ニュートンはリンゴが木から落ちたのを見ました。きっと、それは夕方から夜になる頃だったんですよ」

「どうして」

「木から落ちたリンゴの遙か向こうに月が見えなくてはつまらないからです。リンゴが木から落ちた時に。月も見えたんです。リンゴより大きくて重い月はどうして落ちないで浮かんでいるんだって思ったに違いないと思っています」

「偉大なる発見はロマンがあるんだね」

「だって、リンゴが木から落ちるところを見た人はニュートンだけではないんですから」

「なるほど、分かった。それでコウノトリなんだ。コウノトリが運ぶのヤーメタといたら、人類は滅びる」

「そーです」

「それに……」

「それに？」

「せっかく運んであげたって、墮胎したり、産まれても、幼児虐待しているところ見せつけられたら」

「風ちゃんがコウノトリなら」

「絶対に、ヤーメタ」

「それじゃ、運んでくれるのはコウノトリじゃあ、ないんだ」

「きっと、波長の違う世界からやってきて、波長の違う世界へと逝くんです。波長が違うから出会えないけど。空間は一緒の所に住んで居るんだと思います」

「この世にどうにも未練がある人が、出てきてしまうのは。幽霊ってやつだよ」

「そうですね。鏡を一枚置いてミカンを置くと、鏡にミカンの虚像が入ります。生と死の境が鏡ですから、鏡の側に置くと生きてる世界なのか死んでる世界なのか分からなくなるでしょう。でも思いきり人生を生きた人は鏡より、より遠くにミカンを置いた状況になりますから、鏡の中の像は鏡の奥深くで出てこれません。つまり生きている世界なのか死んでいる世界なのか、はっきり区

別出来る訳です。それが往生で、前が未練のある状態です」

「なーるほど」

「私は人生観は死生観の裏返しだと思っています。良い行いも悪い行いも死んだら消えるのでは悪い行いを選ぶ人が増えます。私は死後の世界もアメリカのような国もあれば、アフガンのような国もあると思っています。今、この瞬間に産まれた子でも、日本に産まれた子とアフガンに産まれた子では、20才までの生存率では日本なら100%に近く、アフガンだと、どうでしょう言えることは日本よりは低いということです。

次に日本人は死後、やはり多くは日本人の居るところに逝くと思います。日本に産まれた人が日本の為に貢献することは、余程の事情を除けば世界にも貢献している訳ですから死後の世界でも拍手で迎えられと思います。ですから、ただ単に自分の幸せだけを考えた人より、国のために貢献することを考えた人に死後祝福があると思っています。こういふと、それはエゴではないかと言う人がいますけど、それでは国を飛び越えて世界に貢献できる事って何ですかと尋ねると具体的なものがありません。やはり、その国に生まれた人はそれなりの摂理で産まれてきたのですから、その村、その町で、出来ることを見いだして、ひいては国に貢献することが何よりも生きた証になると思っています。信長・秀吉・家康は、これから後も日本という国がある限り、永遠に語り継がれる人物である所以は時代を変えて産まれたきたのなら、時代が変わっていただろうと思うほどに国の中での貢献度が高いからです」

「家康が先で信長が次で最期が秀吉だったら、どうなっていたのかな」

「車は自由自在で何処にでも行けますが、ハンドル・ブレーキ・アクセルの三要素だけで、ブレーキを踏むべき時にアクセルを踏んだり、右に切るべき所を左に切るから事故になります。

不思議なことに視力が弱くて事故に繋がることは希だそうです。それではどこがまずいのか、ということですが、実はこれは人生観つまり死生観に繋がっていると思います。死んだら何もないと思っている人が人の命を、それほど大切に思わないのは当然と

言えば当然じゃあないでしょうか。当たり前ですが、倒産しても失業してもやり直しは利きます。でもやり直しの利かない人の死だけには謙虚でなければならないし、人間の英知を結集しても作り出せない生命を作り出している神の存在に対してより謙虚でなければいけないと思います。

そういうと最近ではクローン人間とかで人間も作り出せるという人がいますけど、人間のしていることは全体の0.25%にも満たないそうです。人間の英知は神の存在に気づくことからはじまりましたが、今は神を語って戦乱の原因を作っているから困ります。ですけど神の領域まで手を入れることより、原点に戻って神の存在を証明するような科学に注目がいけば未だ救われる道はあると思っています」

「なーるほど、頭がスッキリしたよ」

「どうして未来が見えるのかということですけど、それは閃きですから、自分でも分かりません。アイデアのようなもんだと思います。アイデアが出ないときは頭を叩いても出ないのに、散歩していて小鳥のさえずりに耳を傾けた時とか、川の水に触れてみたときにアイデアが出ることもあると聞きますけど、閃きもそういう意味ではアイデアに似ています」

「だけど、根本の考え方は今、言ってくれたようなデータベースがあるということだね」

「そうです。私の根本的は考え方は今、お話したような事だと思っています。地球のどこかが昼ならば、その裏側は夜のように、この世の中は全て相反した者が合い調和して出来ていると思っています。北半球があれば、南半球があつて。西洋があれば東洋があるように。ですから相手を奪ったり無くしたりすることは先祖を否定して自分だけは栄えようとする矛盾をはらむことになります。それは自分の存在もなくしてしまいます。男性という陽の性と女性の陰の性が出会う時、新しい生命が産まれます。どちらか一

色だけになったら出会いがないから、新しい命は芽生えません。
このことは人類だけでなく、あらゆる生物が毎日証明しています。
。私がこの世に女性として存在することを証明するには、まづ私は死んでいないと言うことを証明して、次に男でないという証明をして、アメリカでも中国でもインドでもないことを出来るだけ証明し続ける事で、故に私は日本の女性あるという存在を証明出来ることとなります。

ですから相手を排斥すればするほど自分を証明するものがなくなって存在も危ういという事になると思っています。人類発祥から今日まで何万年あるか分かりませんが一度として陰陽の割合が崩れずに半分半分なのは、神の摂理としか云いようがありません。たった一回でも男性が7割、女性が3割の時があれば、もう、それは世界大戦争の決定的な要因になっていたでしょう。そう考えると神は人類に戦争をしないでもいいように配置して下さったというのが私の考え方なんですけど」

「なーるほど。……そうか、そうになるとテロ法案はどうなるんだ。神に背いた行動なんだろうか。分からなくなったな。それじゃあ、何もしなければどうなる。テロはなくなるよ。どういうふうに考えればいいんだ」

「ごめんなさい。私は皆さんが考えるように考えたことがないんです」

「うん、どういうこと？」

「テロは無くせませんかという問いに、軍事アナリスト・中東問題に詳しい方達は、無くせないという結論を出されていますよね」

「私もテロは無くせないと思うね」

「でも、それは男性の論理ではないかと思っています。私は女性だから、女性という視点で申し上げますけど。宗教が違い、人種が違って、女性には女性だけしか分からない心情があると思います。女性の事で戦争になった歴史はあっても。女性が能動的に戦争に参加したことはないという特色に着目したいんです。どう

してなのかという、これはもう、戦争を根本的に受け付けたくないという性なのだと思います。女性は子どもを産みます。その子どもが戦い死ぬのが戦争ですから、産むという行為、育てるという行為を否定する暴力的な集団行動に女性は最初から嫌悪を感じるのではないかと思います。彼女たちは生活が基本、家族が根本であって、男性では一番に掲げる国とか宗教とかいう意識は心底では一番にはしていないと思います。

国境を越えて宗派を超えて、女性の場合最初に来るのは家族だと思えます。安心して家族と暮らせる環境が一番の安らぎなんです。そのことが根本から保障されない宗教戦争より、豊かな生活を保障出来れば、女性は戦う性の夫や息子を諫める役割をしてくれると思えます。もう、ひとつマスコミが取り上げない視点で申し上げるなら、私はアラブの人にとって、何が重圧なのか考えてみました。今が苦しくとも、明日は、来週は来月は良くなるという展望があれば、男の人でも家庭を捨ててまで戦争には行かないと思えます。その反対に明日は、来週は来月は今より遙かに悪くなるという予測がつくとしたら男の人はどんな考え方をするでしょうか。日本の場合も、失業者が1千万人を超えて、日本は駄目になると感じた男の人が、戦争の道を選び突き進んだ結果が太平洋戦争でした。私は中東問題では、ずぶの素人ですから間違っているかも知れませんが、商売で当てたとか、エンターテインメントとして成功した人とか、新商品を開発した人の中で中東諸国の方の名前が一人も出てきません。サウジアラビアの富豪は一人でキャデラックを数台所有しているそうですが、その富の基本は石油です。この先も油田は枯れず、世界のエネルギーが石油に頼らなければならないという事であればいいのですが、枯渇する可能性がある。代替エネルギーの開発が進んでいて燃料電池等がエネルギーとして商品化されるとすれば、石油の価格は大暴落をして現在の生活は維持できないと考えるのは至極当然な事だと思えます。そうした思いが中東諸国の人にあるのではないのでしょうか。世界的情報化の大きな波が押し寄せてくることは誰でも予想で

きます。物作りの日本・金融工学を駆使したマネー経済の米・人材の中国と考えていくと、石油産出国の中東諸国には焦りがあっても不思議ではないと思います。中東の人の数百倍の生活を米国人、一人でしていることを知っている中東の人は、米国はスーパーパワーの国であり、どうして、米国は今日の生活も儘ならないような自分たちを虐めるのだという被害者集団となって、憎悪の感情を膨らませています。

米国の論理は何を言っても強者の正義と論理でしかありません。その事からイスラム教のジハード（聖戦）思想が芽生え民衆が受け入れたというのが私の考えです。宗教を信仰する人はプライドがあります。特に、中東に育ちイスラム教が生活の一部である人は、経済的理由・将来の不安という観点で世界に自分たちの気持ちを訴えることが出来ません。出来ることなら、過去に経緯を持たない日本こそ、政府が、その事に気づいて、着目して、テロ撲滅の一番の近道となる。生活の糧となる職業を中東にアウトソーシングして安定した収入を供給して家庭・家族を守れるシステムを想像して輸出してもらえればと思っています。日本には世界にない商社という日本独自の経済システムがあります。政府と連携して中東の女性が喜ぶような経済システムのソフトを提供できないものでしょうか。大変なことは分かりますけど成功すれば日本周辺の日本に対する見方も変わってくるかも知れません」

「第二・第三のテロリストを作り出さない為には、人間は生活者である。安定した職業をもって、家族の幸せがなんであるか分かるようになれば、テロリストになろうとしている息子の母が、夫の妻が引き留めるということか」大泉は頭を殴られたような痺れを感じていたが、それは心地よいものであった。

大泉はテレビ局の控え室で、A4サイズにして4枚ほどあるレポートを熱心に読んでいた。それは風子から大泉に来たメールをアウトプットしたものであった。

「総理、本番10分前ですので、そろそろ、お願いしたいのですが」番組のディレクターが緊張した面もちで丁寧に頭を下げな

がら控え室にいる大泉に言った。大泉は風子のレポートから眼を上げると分かったというように手を挙げてからその男にいった。

「長岡さん」大泉に声を掛けられた男はびっくりしたように振り返ると、踵を返し早足で大泉に近づいた。

「何か？」

「長岡さんだったよね」

「はい、長岡です。覚えておいて頂いて光栄です」

「どうしたの、緊張して」

「はい、久しぶりに総理にお会いして、いささか緊張しています」

「代議士の時に、何度か立ち話をしたじゃない。あの時の私と変わってやしないよ」そう言いながら大泉は長岡の肩を叩いた。

「総理お出ましということで、セットを高めにと考えたのですが、秘書官の方からお電話でセットはそのままでいいというお話だったので……」長岡は大泉に緊張した面もちで言った。

「いやあ、総理だからといって、特別のセットにしてくれるのは有り難いんだけど、何だか視聴者との垣根が広がるような気がしてね。他意はないんだよ」大泉は微笑しながら言った。

「そうでしたか」長岡は大泉の微笑を見て、顔から緊張が解けて笑みを返した。

「ところで、今日の司会は田川さんだろう。ツッコミのきつい、代議士時代から僕は何度もやりこめられてさ。トラウマで言いたいことが言えなくなるんだよ」

「そうですか、しかし、田川さんにそんなことを言うと番組、司会者が政治家に対して手加減しろと言うのかと血相を変えそうですが」長岡は声を落として言った。

「その通りだ。それでね。さっきセットを見たんだけど、私がデスクの上に両手をこういうふうに出して両手で一つのグーを作っ

たら、私の顔に寄って欲しいんだ。1%で100万人見ていると言われるテレビの視聴者に真剣に分かって欲しいことを話したいんだ。私と君とのサインだよ。お願い出来ないかな」

「見落としたりしたら、どうしましょう」

「いや、私はそうしたポーズでずーっと話すつもりなんだ。見落とすことはない。それから、それは番組終了10分位前でいい事なんだが」

「分かりました。それならお安いご用です。しかし、そのサインは必ずあるんでしょうか」

「勿論、約束するよ」大泉は大きく、大袈裟に頷いて見せた。ディレクターは、何か感じたらしく深々と頭を下げた頬が赤く上気している。

「趣旨徹底いたしますから、ご安心下さい」長岡は早足で大泉の居る控え室を後にした。大泉は風子のレポートに眼をやった。そこには、心構えとして、決戦の時です。勝敗は視聴者が決めるのですが、その結論はその番組のキャスターの印象を見て決めている人が大半です。つまりディベートは司会者を味方に付けるかどうかで決まってくる。ですから、裏方のディレクターや司会者を敵にしては、いけません。むしろ感謝と労をねぎらう態度が必要なのです。全ての表には裏があることを忘れてはいけません。

「風子先生、お説の通りしておきましたから」そう呟くと、大泉は立ち上がってから深呼吸をした。

番組は局アナの木村典子が一週間の出来事を話すところ始まる。一週間の出来事をダイジェストに知ったところから、特集としてメイン司会者の田川一郎が仕切る構成になっている。一週間の出来事の中で大泉が登場しているテロップには『1%で良いから株を買って。総理からのお願い』とある。全く上手く作るものである。慣れたとはいえ、本人が自分のVTRを見ているところを写し出されるのは気色のいいものではない。

「それでは田川さん。お願いします」局アナが田川にふった。カメラに向かって田川は語り出した。

「物議を醸した。大泉総理の株を買ってくれ発言は、先週、総理官邸でインタビュアーの女性が株価が下げ続けていますがと言う質問に対し、総理が皆さんの資産の1%。百万の預貯金がある人は1万円を、1千万ある人は10万円を株式に投資して欲しい。

そうすれば14兆の金が株式に入って、低迷する株価を支えることができるという発言をしたことで、この発言を巡って賛否両論が噴出しています。主民党の段 直之さんは、総理の発言は即、撤回すべきとの主張で、それならば受けて立とうという総理に本日、お越し頂きましたので、これから徹底討論致します。『総理VS主民党の段 直之さん』です。コマーシャルの後です」田川はコマーシャルの間に聞くべき事をメモしたものを確認している様子だった。主民党は憲民党から別れた一派と社会党右派の一派との合同で出来た党であった。段 直之は旧社会党右派であった。コマーシャルが終わると、合図が田川に送られた。田川はメモから目を転じると

「実は、インタビュアーの女性はこの局の政治部記者でして、さっき廊下ですれ違った時にその時の様子を聞いてみたんですが、総理！ 彼女、株を初めて買ったそうですよ。どうして買ったのって聞きましたらね。ピンチはチャンス。最大のチャンスという総理の言葉に日本の株は上がりそうな気がして買ったというんですよ。それと、日本で一番偉い人が今が一番の買い時というのだから騙される方より、騙した人の責任だともいっていましたが、いかがです」

「大変、光栄です。有難うと申し上げたいです」

「段さんはどうです。今の総理の発言をどう思われますか」

「呆れてものが言えない状況ですね。本来、日本人は額に汗して働くことを美德としてきました。収入を得ると言うことは、神聖な汗を流すということなんです！」

「総理、総理も私も戦中派世代です。生まれた土地は荒れ放題、食べるものもない。GHQが来ればギブ・ミー・チョコレートといった世代ですよ。そうですね。段さんだってそうだ。50年前には、みんな鼻垂らして、あっ、段さん怒らないで、その、いつも栄養失調でさ、鯨の肝油ドロップと脱脂粉乳で生きてきたんだ。

額に汗して働く尊さを知らない世代なんかじゃあない。むしろ、一番知っている世代ですよ。そうですね。だから大泉総理だって、そんなことは釈迦に説法ですよ」

「日本はね。今、最低の株価水準ですよ。これ以上下げたらね。日本経済が沈没してしまうから、銀行・郵便局に預けていたって危険な状況になる。それなら、絶好の機会でもあるわけですから、そのうちの1%でいいから株や投資信託に回して欲しいとお願いしたんです」

「株というものは、リスクを伴います。博打と同じなんですよ。一国の総理が馬券買えというのと、どこが違うのかという問題です」段が切り込んだ。

「馬は一つのレース毎で勝負がハッキリするから勝敗がその場で決定します。しかし株式や投信は時間が加わる。だから1%だけでいいから最低1年は寝かせられる金を回して下さいと申し上げたんです」

「確かに、競馬と一緒に論ずる段さんの分は悪いと思いますね」司会の田川が段を見ていった。

「世界経済順では1位がアメリカ、2位が日本。人口が日本の倍の2億4千万人もいるアメリカに4年半前までは一人当たりGDPでまさっていた。アジア経済全体の6～7割の規模であり、中国などはまだ14～15%でしかない。第3位のドイツ、第4位のフランスの合計よりも大きく、第5位のイギリスの半分を加えて同じくらいです。しかし上場企業の時価総額はアメリカの1/4しかない。これはいくら何でも少なすぎます。アメリカのゼネラ

ルエレクトリックが50兆の経常利益。マイクロソフトが40兆ですから、アメリカ優良企業の5社分くらいと東証が同じ程度ですから、如何に株式が閑散としているかが分かると思います。一年寝かせて貰えれば損はでないと思います」

「思いますでしょう。絶対ではないわけですよ。市場のことは市場に聞けというくらいで、本来政治介入はいけません。ましてや一国の総理がセールスマンになっているようでは不安感を国民に抱かせるだけです」

「家計の資産状況をアメリカと比較すると、アメリカでは株と投信で50%、日本は、わずかに9%です。これから直接金融が伸びてきますから、9%が続く事はない、直ぐに二桁に乗って、アメリカの半分の25%までいってもらつつもりでいます。競馬の話しが出ましたが馬券は100円で買えるそうなので、100円は無理ですが取引単位を下げて買いやすくする為の努力もしていくつもりですので、大泉内閣の構造改革にご賛同頂けるのなら1%の資金を株式に流して頂きたいと思っています」

「大泉さんは、株のセールスマンをいつまでする、つもりですか」段が言った。

「株のセールスを最低1年はさせて頂くつもりです」

「株のセールスマンと今、お認めになったんですね」段が言った。

「はい、総理大臣の大泉純一郎が資産の1%を株式市場に流してくれることをお願いしていますので、株のセールスマンと取って頂いた方が分かりやすければ、それでも結構です。段さんにもご協力頂いて株式1%の資金シフトにご協力下さい」

「人に言われてやるものじゃあないですからね」これに司会の田川が噛みついた。

「段さん。それはおかしい。総理が国民に頭を下げて頼んでいるんだから、閣僚らの株取引自粛を定めた閣議決定を廃止して政治家や役人も参加しようと呼びかけているんだから国会議員なんて1%と言わず。最低でも10%は株式を購入すべきですよ。だって景気浮揚の立て役者の国会議員なんだから」

段は、何か言おうとしたが、田川が遮るように

「私も、株式やったことないけど、この局の政治記者の女の子も買っているんだから、私も買いますよ。ただ、知識がないから、投資信託ですけどね」

「何パーセントくらい回して頂けますか」大泉が田川に言った。

「家内とも相談しなくては駄目だけど、10%はやりますよ。それで株が上がればね。万々歳だもの」田川が株式に10%シフトするといったものだから、国会議員の段は肩身が狭くなって発言に迫力が感じられない展開となった。大泉は、頃合いを見計らって、いよいよ卓上に両手を組んで置いた。ここだ。カメラは大泉にグッと寄った。大泉は語り出した。

「このテレビをご覧の多くの中高・大学生のみなさんに特に訴えさせて下さい。2千年もの間、路傍の旅の中で迫害を受け続けた民・ユダヤ人は強制収容所アウシュビッツで最終的解決と称しての大量殺戮に遭い600万人もの犠牲を強いられました。ユダヤ人は現在でも1400万人ですから、当時、二人に一人の人が犠牲になった訳です。どうしてそんな眼に遭わされなければならなかったのか、ユダヤの人は自前の軍隊がなかったからに他なりません。なぜ持てなかったか、国土がなかった。国がなかったから軍隊は望んでも作れなかったのです。イスラエルを建設したユダヤ人ですが、まだ安住の地とは言えません。一日として枕を高くして眠れない日々なのです。翻って日本は四方を海という大自然の要塞に守られ続けました。中世に於いて日本国の危機といえは元寇の襲来のみです。国家があり鎌倉幕府を持っていた日本はユダヤと違い辛うじて、イザ鎌倉という名の武士軍隊を持っていたことから、元寇と戦う事が出来ました。なんとか日本国を奪われずに済んだのです。もし、元寇の乱の時に軍隊がなければ果たして今の日本は無かったかも知れないのです。ということは、ここにいる大泉も君たちも存在しないということなのです。ユダヤ

の人にしてみれば、安全と水はただと違って防衛などどうでもいいと捉えている日本人を、どのように評価しているのでしょうか。日本の若者は国防とか防衛という話しになると木で鼻をくくるような態度を見せたり、軽蔑した視線をあびせたりする傾向にあります。

日本人が日本と言う国と一度として遊離したことの無い弊害がそうした傾向を生むのだと思っています。屋根の上のヴァイオリン弾きは帝政末期のロシアで国外追放されたユダヤ人を描いた物語です。ヴァイオリンは持ち運びが便利だったことからユダヤの人にこよなく愛された訳ですが、同時にヴァイオリンの調べは流浪の旅のユダヤ人の悲しみを奏でているのかも知れないのです。翻って日本の代表する和太鼓は宝物として神社に多く納められていて、祭りの時期に大の大人が4人も5人も集まって出さなければならぬ程の代物です。つまり日本人がいつ、なんどきユダヤのように流浪の旅をしなければならなかったとしたのなら、和太鼓を捨て、その代わりに横笛が日本を代表する楽器になっていたかも知れないという事なのです。若い人の防衛意識は希薄だと認識しています。しかし、最早、防衛は軍隊では無い時代に突入しています。既に、時代は生物兵器の時代へと変わり、更に。5年後、或いは10年後に社会人になる皆さんはコンピュータ・ウイルス、或いはクラッキングと言われるサイバーテロに遭遇するかも知れないのです。全てがコンピュータ制御で生活している時代です。道路の信号が出鱈目になれば、交通事故が大発生、飛行機も管制塔との交信が出来ずに墜落。水道電気といったライフラインも機能しなくなる。お金も一切機能しないでしょう。銀行のATMは動かないし、スーパー・コンビニだって機能しない。夜になっても一切の電気がない。一夜にして太古の昔と同じ状態の夜を迎える事になります。これらは日本だけの問題ではなく、生物兵器の炭疽菌・天然痘のバイオテロ、化学兵器のサリン・マスタード

・青酸といったケミカルテロを遙かに超える大規模の争乱、動乱が世界同時に発生する可能性を否定出来ないのです。残念な事にサイバーテロが発生しないという保障はどこにもありません。...
...コンピュータをしていくとネットワークという言葉に触れざるを得ません。

ネットワークは大きい方が価値を生じます。大飛躍するであろう中国は、12億の人のネットワークがインドでも6億のネットワークですから、日本の5倍、10倍のネットワークが立ち上がっていきます。そうなると大きいネットワークが作れない我が日本はコンピュータ技術で世界一を目指さなければならないのです。一人一人が、プログラムを組める技術まで行く必要があります。でなければ早晩、日本はどこからも相手にされない国になってしまう。既に日本は10年後にはベストテンからも脱落しているといった報告も聞いています。嘗てエコノミックアニマルと言われた日本は泡沫にすぎなかったバブルを経験した後に、命の次に大事なお金を世界のどこの国よりも多く出して平和貢献しても尊敬されることもなく蚊帳の外におかれている。こうした想いを私は君たちに味わって欲しくないんです。その思いは皆さんのご両親も変わらないと思います。子どもの世代からコンピュータに親しみ、善用していくことで、優秀な皆さんの頭脳を集結して世界のテロリストから守って欲しい。想像を絶するサイバーテロから全世界を救ってくれたのは日本人だったと言われるような日本人になって欲しいんです。生活さえままならない、その上に君たちと同じ年の子がイヤ、日本なら幼稚園にいつているであろう弟や妹が、地雷によって義肢や義足で生きている。これ以上、悲惨なことに成らないためにも立ち上がって欲しい。皆さんが立ち上がれば世界の平和に日本は貢献できると私は信じています。その為には今、何をしなければいけないか。考えて貰いたい。前段で私はあなた達のお父さんお母さんに株式市場に1%のお金のシフ

トをお願いしました。君たちには一日1分でいい忘れることなく日本は何をしたら世界に貢献できるか考えて欲しい。君たちの英知に私は大いに期待してエールを送り続けます。どうか力を貸して下さい」そう言うと、大泉は深々と頭をさげた。

アシスタントの木村典子は、何か云おうとしたが声が出ない。カメラは時間終了まで、木村アナの涙を写し出しながら番組を終了させたのだった。

後日、彼女が語ったところでは、大泉は足を小刻みに震わせながらテレビに訴えていたのだったが視聴者からはデスクの下の部門は隠れているのでロングに引いたとしても、その震える足は写し出せない。総理のそうした様子は代議士時代から出て貰っている事から、癖ではない事は分かっていたので総理は全身全霊で若者に訴えて震えていると強く感じて、そして自分だけが総理の本物の真実を見ていると悟った時、何も言えなくなってしまっただけの涙を抑えきれなかったと語ったのだった。

大泉はその日の日曜日、同様のことを朝から午後に掛けて訴え続けた。

「米国では、既に5才くらいから投資教育をしている。日本の若者も米国のヘッジファンドを圧倒するテクニックを身につけて行かなければならない。額に汗して働くこと、労働を神聖してやまない日本人独自の投資哲学を構築して行って欲しい。アメリカヘッジファンドは金融工学を駆使してデリバティブを開発した。日本はとても敵わないと頭から思っている。しかし大坂の堂島米市場ができたのは、1697年(元禄10年)のことである。これは大英帝国に先立つこと130年前である。しかも、この米市場では春にはその年の秋に収穫される米の売買を行なうという、米の先物取引が1730年(享保15年。八代将軍吉宗の時代)から行なわれていたことである。実物の米は、まだどこにも存在しない

。また、秋にどのくらいの収穫があるかも分からない。だが、当時の堂島では、先物を売る人と買う人が堂々と市場を成り立たせ、こういう取引を、当時は「帳合米商内（ちょうあいあきない）」と言っていたが、帳簿に記入、計算するだけで取引が成立するわけだから、今の言葉に直すと「清算取引」である。

兎も角、世界初の先物取引所の発祥は大坂で先物取引の開始は、実は日本がパイオニアなのである。コンピュータもない時代で教育といっても読み書きに算盤がやっとの状態で高付加価値の金融哲学を作り出していた。小・中・高大生の皆さん、あなた達の300年前の人達は既にデリバティブを取り入れて取引をしていた事実を知って大いに奮起して欲しい」とも呼びかけた。又、大泉はこんな話しをした。それは風子のサイトに書かれている内容だった。

小学6年生の男の子が交通事故で亡くなった。先生は彼の机を片づけるのが忍びなかったので、しばらく、彼の机をそのままにしておく事にした。しかしその光景は殺風景なものだと感じていた。すると、ある日、彼の机の上に花が飾られていた。枯れると新しい花をもってくる。その女の子はあまり勉強が得意ではなかった。それを見たある男の子は、自分は国語が得意で、登場してくる太郎君はその時、どんなことを感じたのか、友達はソレを見てどう思ったかという質問にも難なく応えられていた、でも、その女の子はそうしたことが不得意だったが、交通事故で亡くなったクラスメートの事を誰よりも悼んで花を添えることで彼の霊を慰めている姿を目の当たりにして、自分が嫌な奴に見えてきた。何故なら亡くなった子とは野球をやり、プールへ行き、喧嘩までした仲ではなかったのか。国語の成績は上だが、何もしようとしなかった自分と、分からないけど行動をもって表したその子にみんなは何かを感じて、その後、当番を決めて花を枯らさないようにしているとの話しをした。知識は行動してこそ知恵とし

て花開くのだと思うと大泉は最期に結んだのだった。

翌日の月曜のワイドショーはこのことで持ちきりとなった。特に小・中・高の生徒から多くの反響が局に寄せられた。

自衛隊の派遣には賛成できないが、サイバーテロは許せない。

花を捧げた女の子の話聞いて父と母が涙した。僕はそれを見ていて自分も何かできることを捜そうと思った。

私はパソコンが大好きなので、勉強をしてサイバーテロを撃退するくらいの実力を養いたいと思います。

私はヴァイオリンを奏でる中学生の女子です。ユダヤ人の話を聞いてヴァイオリンの調べにそんな深い想いがあること知ってショックを受けました。これからは、もっと大切にヴァイオリンをひきたいと思います。

先物取引は日本初だったことを知って驚きました。僕は商人というのを軽く見ていたので、反省しています。デリバティブを勉強したい気持ちになりました。

ワイドショーではこうした子ども達のメールを読み上げてから、コメンテーターやパネラーが意見を言いました。大人から、今の子ども達は駄目だと思っていたが、凄い、やっぱり、私たちの子ども達だと胸を張りたい気持ちになったという意見が出されると、親世代からも、デリバティブを勉強したい。プログラマーになりたいと家の子が言っているのだが、何処で勉強したらいいのかという具体的な問い合わせも出てきた。

大泉は移動中の車内で目を閉じていた。マスメディアが音を立てて動き出しているような感覚をもった。総裁選立候補の時の異常人気にも驚いたが、今回のテレビ出演から、さらなる大泉ブームが起きて、下がり気味だった大泉人気を復活させる以上のパワーがあった。それにしても、これほどの反響があるとは、国民とは真っ正面から向き合わなければいけないと大泉は思っていた。

「総理、日経平均株価が上がっています。今日はストップ高になるかも知れませんかと報道しています」SPの山田がイヤホンを取ると大泉に言った。

「そうだね」大泉は短い言葉であったが、満面の笑みでそう言った。すると運転手の山田が

「株が上がるって、いいもんなんですね。初めて思いました。私も、なけなしの金を回します。家内のお爺さんは戦争の時、家にある金の全てを日本国に供出したそうです。55くらい。家内が緊急の消費税だと思えば良いって言ってましたから」

「奥さんに礼を言っておいてくれ。必ず、絶対に損はさせないように命がけでやるからって」背広の内ポケットには風子のドキュメントが忍ばせてあるのだが、気のせいかわかからない。大泉は内ポケットからドキュメントを持つと校長から手渡された賞状を頂くようにしてから読み始めた。

日本人は投資を邪道の経済だと思っている人が多くいます。それは健全な事だと思えます。誰も彼もが生業につかず株投資をすれば、間違いなく世の中は機能しなくなります。額に汗して働く精神・勤勉な精神は世界に誇れる日本の文化です。ここは強調し

なくてははいけません。ですがこう考えてみたらどうでしょうか。

大半の人は節約して郵便局や銀行にお金を預けました。いい換えれば郵便局や銀行は企業努力なしに預貯金の残高を増やす事が出来た訳です。その結果、郵便局・簡保は予算審議を問われない第二の国家予算に成り下がり今財務省、昔大蔵省の天下り機関を作り、特殊法人の温床となって官僚の天下り先になった結果、不良債権に。銀行に預けたお金も、箸の上げ下ろしまで当時の大蔵省のいいなりで、土地本位制を作り出し有限である日本の国土の地価をつり上げるだけつり上げて不良債権。つまり私たちの額に汗して働いたお金は全て悪貨になった訳です。それならば良貨を作るにはどうすればいいか、銀行に預ける金の一部を直接、信頼できる若しくは応援したい企業に投資して、株主として悪用されていないかを監視する。それならば目に余る企業をみんなの力で弱らせる事だって出来ます。

大泉は、顔を上げると、自分の一挙手一投足で株価が変動してしまう。しかし、この通りに言えば銀行株は更に下値を探ることになるから、この通りには言えないが、風子のドキュメントの内容に沿ったコメントは言えたと思っていた。

――車窓から見える青空の中にだだよう雲に大泉は言っていた。

（大将、聞こえるか。アンタに頼まれた娘に、私は今助けられている身の上だよ）

――それにしても、いったい、どの大臣のアドバイスより風子の意見は的を得ている。夕べも、その事を風子にいうと、風子は笑いながら

「私は、票を考える必要がありませんから、こんな事を言うと、

こう反論されマスコミに叩かれるからということも考えないでいいですから、人間は自分の思っている事と反対の事を口に出していると頭が混乱して目標が見えなくなるんです。有言実行でも不言実行でも、どちらでもいいのですが、目的が定まっていない生き方が一番よくありません。

アフリカの人が文明に触れ過ぎるとサバンナに戻った時に簡単にライオンに食べられてしまうと聞きました。五感が鈍り第六感が閃かなくなったからだと思います。政治家のみなさんは頼みもしないのに、自信たっぷりに未来を語って殆どあたらないのは、何より自分を安全圏に入れているからだだと思います。釣り人は魚と対話しながら、つり上げるそうですが、世の中が不況でリストラの嵐でも先生の数は削減されない。6年先見通せる企業のない時代に当選すれば参議院は6年安泰ですからね。庶民の生活感覚とはずれてきます。しかし世の中は庶民が主体で回転していますから、庶民感覚のない先生諸氏に現状把握は難しいのではと思います」

——大泉は自分は未来が見えているかと自問してみた。未来は見えないものだという考えに縛り付けられているのではないか。しかし風子の目には未来を現在の延長として自然に見えているようである。幼い時から、大人が驚嘆するほど未来を見通した風子は、実は邪心のない素直な心で事象を捉えているに過ぎないのかも知れないと大泉は思った。大泉は就任当初、首相所信表明演説で、いよいよ、改革は本番を迎えます。我が国は、黒船の到来から近代国家へ、戦後の荒廃から復興へと、見事に危機をチャンスに変えました。これは、変化を恐れず、果敢に国づくりに取り組んだ国民の努力の賜であります。私は、変化を受け入れ、新しい時代に挑戦する勇気こそ、日本の発展の原動力であると確信しています。進化論を唱えたダーウィンは『この世に生き残る生き物は、最も力の強いものか、そうではない。最も頭のいいものか、そ

うでもない。それは、『変化に対応できる生き物だ』と言ったのだが、風子に言わせると政治家ほど未来を語って言い当てない人種はいないと言っていた。日曜ともなると、幾多の国務大臣や人気のある国会議員が芸能人のようにテレビに出てくる時代になった。

そのことでマスメディアはいったい何を有権者に知らしめたか、人間性も有るだろう。しかし一番伝えたことと言えば、終始一貫、最初から最後まで何回、討論を重ねても考えは最初の一步から少しも逸脱しないということではなかったか。――大泉を乗せた車は国会に吸い込まれていった。大泉は両手で頬を叩いて気合いを入れたのだった。

国会記者クラブの記者会見場に入った大泉は大泉ファンド構想をぶち上げた。

「そうすると、各、証券会社が勝手に大泉ファンドというネーミングを付けて投資信託を販売していいということですか」

「勝手には、少し困る。大泉内閣の打ち出した法案をよく、熟知して頂いて、その中から銘柄を選択して欲しいということです。そうでなければ私の名前を使う意味はないからね」

「その名前を使う使用料金みたいなものは取られるつもりですか」

「証券会社からネーミング代金とでも言うべきロイヤルティを貰えれば国債の穴埋めに使わせて貰います」

「どうして、そのような構想を考えられたのでしょうか」

「昨日も、異論を唱えられた方が居たが。株価は浮き沈みするもので、総理のことを聞いて、損させたら、国挙げての豊田商法だって、でもね。国が潰れたら、豊田商法も何も無いわけだね。私も必死なんですよ。国民に損をさせるわけにはいかないでしょう。だから大泉と言う男を商品にしてでも株価を上げたいとい

う切なる思いが込められているということです。君たちも、今のところ、しっかり書いてよ。ああ、それから、昨日アノ田川一朗さんも株式に資金シフトしてくれるって言ってくれた。私をここまで運んでくれた運転手の方も、ここだけの話しかけど、5%投資にシフトしてくれるって言っていた。記者の皆さんはどうですか。どのくらい株式を買ってくれるのかな。

3%？ 5%？ もしかして10%？ ……何だよ。手が上がらないじゃあないか。それじゃあ、記事にしないでいいよ。……冗談だよ。冗談。……でもね。真剣なんだ。みんな忙しいからね。銘柄選択している時間ないでしょう。だから大泉ファンドなんだよ。1%でいい大泉ファンド買って株価を上げるのに協力してよ」そういうと、大泉は記者に向かって手を合わせた。すると誰かが

「総理大臣に手を合わせられたら、買うしかないね」と呟くと、会場に失笑がもれて、笑い声が起きた。

「私買いますよ」女性記者が黄色い声で言うと、その記者に向かって拍手が起きた。

「有り難う。こんなこと言う総理は、後にも先にも私だけだからね。日本は今、崖っぷちなんだ。私も、もう一度気を引き締めて頑張るから。宜しく頼みます」そういうと大泉は会場を後にしたのだったが記者からの拍手が大泉の背中に伝わってきて大泉を痺れさせていた。その日、SPの山田が言ったように東証株価はストップ高で終え日経平均は12,993円を付けたのだった。

「父が、ブラウン管を通じて国民に支持を訴えて居る様子を見て、僕も何かしなければという気持になったんです」大泉の長男、浩太郎は朝のワイドショーで、群がるマスコミのマイクに向かってこう応えた。浩太郎は総理の息子をキャッチフレーズにして芸能界入りしたのだったが、その浩太郎が大泉ファンド推進の為にキャンピングカーで全国を回って訴えるというのである。

「ギャラはどこから出るんですか？」という問いに浩太郎は

「ノーギャラです。もしスポンサーが付いたのなら、それは皆さんのご厚意ですから、社会に還元したいと思っています」ワイドショーは早速この話題に時間をさいた。しかしワイドショーに無縁のファンドマネージャー・エコノミスト・ストラテジストや経済評論家は違う目でこのニュースを捉えた。

実は大泉は経済に弱いというのが彼らの中での定説だった。米百俵選挙と名打って参院選で圧勝したが、大泉は精神の人・信念の人という点では第一人者であるとされたが、大泉内閣になって、急上昇した株価が下がり始めた時に、大泉は株価には一喜一憂しないとのコメントを発し、それがスッポットCMのようにそこだけ強調されて報道された。当然にして米国・ヘッジファンドがこのコメントを聞いて、安心して空売りをかけ、株価を更に下げた経緯があった。大泉は腹芸が出来ない。財界に何らコネクションがない米百俵の精神は買うが時代が違うよというのが彼らの見方だったのである。所が、浩太郎発言の直後、投資家が株価を見るときに大いに参考とする株式評論家・エコノミスト・ストラテジストを特に先行きは暗いと吹聴する外資系証券筋を風子はピックアップしていた。そのリストに載った者たちを大泉は国会に収集したのだった。風子は財務省役人を初め代議士は株式アドバイザーを一段低く見る傾向にあることを見抜いていた。しかし個人投資家は彼らの意見を聞くのだから、彼らを変えなければ個人投資家は安心しないというのである。大泉は風子にリスト作成を依頼した。何故なら、実は、こうした発想もリスト作成のプロジェクトも首相官邸にはなかったのである。風子はさっそく井上にこのことを依頼した。井上は株のホームページで絶大な人気を誇る若手社長に依頼、短時日のうちにリストを送ってきたのだった。そのリストが添付ファイルで送られ、アウトプットしているとき大泉は

「実に、早い、内閣官房長に入って欲しいくらいだと」言うとき

書官が

「いくら、差し上げましょう」かと言った。

「それが、受け取るような人じゃあないんだな」大泉が言うと
「えっ、無報酬でやっているんですか」と驚いたのだった。
そのリストを元に、国会に集結して貰った彼らに

「本来なら、こちらがお伺いしてお願いする立場なのですが、せっぱ詰まっております。兎も角、お集まり頂き感謝致します」大泉はこう切り出した。一段低く見られていることを知っている彼らは大泉の誠意に感動した。総理に認められているという想いと、自分たちに出来ることがあるのであれば、協力したいという想いから、彼らは身を乗り出して大泉の声に耳を傾けたのであった。SPの山田は大泉のカリスマ性がいつから芽生えだしたかと小首を傾げた。大泉は人を動かす原動力は熱である。熱が人の心を揺さぶるといったが、いったい誰の知恵なのかと思った。大泉の真剣な話すと、長男が何も頼まないのにキャラバン隊を作って応援したいと電話で言って来たときは涙がこぼれたが、電話で良かった。父親の威厳・総理の威厳が守られたとの報道されないエピソードに及ぶとハンカチを捜す者も現れた。エコノミスト・アナリスト・ストラテジスト・経済評論家も所詮は人の親である。大泉の胸中を理解できない訳ではなかったし、何よりも大泉と同世代という、親近感がある。思えば共に戦中を駆け抜けて生きてきたという土壌が彼らを奮い立たせた。『日経平均株価を2万にする会』が発足され、2万円になるまでは定期的会合を持つことになった。大泉は皆さんの意見は出来る限り政策に取り入れると約束したのだった。各、株式関係者は株価2万円構想に乗ったことをテレビ・ラジオ・コラムで発表、いつも弱気の証券筋も弱気のコメントを出さなくなった。強気コメントと弱気コメントが行き交う中で動けなかった氷付け状態の投資家達のマインドが溶け始めだしたのだった。それにより経済に弱い大泉のイメージは

一新された。腹芸の出来ない。おもて裏のない大泉のイメージは信念があるから株価も信念で上がって下げないとの逆転現象を導き出した。浩太郎のキャラバン隊の側で、あわや女の子が車にひかれそうになったとき一目散に駆けだした浩太郎は女の子を抱き上げたことで女の子は無傷で済んだのだが、そのときトラックに肘があたり、病院に担ぎ込まれた。浩太郎は左手を包帯にまかれながらも、右手で女の子を抱き上げている写真を公開、女の子が浩太郎の頬にキスしているVTRが茶の間に流れ出すと、大泉ジュニアファンと名打ったファンも登場したすほどのフィーバー現象が起き始めた。

長男、浩太郎はキャラバン隊を結成して、朝は幟（のぼり）を立てるところから始まる。日夜、テレビ局はこうした光景を放映し出した。スポンサーもつき浩太郎は

「集まった資金は阪神大震災義援金とアメリカ同時多発テロの見舞金とさせていただきます」と発表したものだから人気は人気を呼ぶかたちになった。マスコミは、これを大泉マジックと称した。辛口のパネリスト達も父親を助けたいとする息子の姿に、昨今の親子不在の事件とをだぶらせて、熱く語りだした。若者は若者でインターネットを介し大泉浩太郎を支援するWEBサイトが立ち上がり始めた。若者のサイトには 勝手な〇〇とか気儘に〇〇とか、やるときはやるさ〇〇、私だって日本人といったサイトのタイトルが主流になっていった。堂々と名乗りを上げるのはダサイが、自分だって協力することがあれば、言われなくたって、やるときは、やるのさ。と言う若者気質が流行しだしたのである。兎も角、株価は上がりだしていた。超・悲観的で知られる外資系証券のストラテジストが、先人を切って強気のコメントに様変わりをしだしたのはこの頃であった。――大泉は安堵の溜息が付けるようになっていたが一つだけ心配があった。大泉は受話器を取った。

「風子です」

「ハロー、お父さんです」

「ああ、ライオン・ハートの」

「風ちゃんが人の心を動かすのは熱ですと言ったけど。今は実感しているよ」

「今日の株価は14,224でしたよ。凄い。おめでとうお父さん」

「有り難う」大泉は浩太郎の話しを風子にしだした。浩太郎は組織を運営したことがない。そうでなくとも既に芸能界入りをしていて総理の息子ということでマスコミから脚光を浴びている。行く先は、都会ばかりとは限らない。若い男と女が、同じ場所で寝泊まりすることもあるかも知れない。

トラブルとスキャンダルは、その気の間人間がいるだけで容易に作り出せるのだと言った。すると風子が

「義理の兄さんが、頑張っているんです。おじちゃんの心配の種は娘の私に任せなさい」風子は店を空ける訳にはいかないから具体的に応援は出来ないが、ブルースカイの井上兄弟が適任だから頼んでくれるというのである。その後、井上兄弟は早速、浩太郎にコンタクトを取った。ブルースカイは全国に若者のネットワークがある。日程が決まる毎に浩太郎が井上に詳細を伝えれば、ブルースカイネットワークから各リーダーに司令が回り、一切を取り仕切ってくれるのだった。その日の行動日誌を各々持ち合っ
て朝令暮改でマニュアル化していると浩太郎から連絡があったが表舞台には浩太郎が立つが、裏方には商才のある井上兄弟が、そして全てのマネジメントは風子を取り仕切ってくれている。インターネットのネットワークは使いようによっては、未来の組織を変えるのではないか。今の大泉内閣より、遙かに鬼に金棒だと大泉は思っていた。

池谷サヨリが突然、深夜の経済番組のメイン・キャスターを降板するという事件が発覚した。週刊誌は何が起こったのかと書き立てた。池谷は番組降板後は大泉ファンドの応援で日本全国を飛び回るというコメントを発表した。大泉は、その数日後、テレビのスイッチを入れると日曜の深夜番組に池谷サヨリが出ていた。大泉はテレビの前の椅子に腰を掛けた。代議士時代に池谷のテレビ番組に出たことが何度かあった。その彼女が大泉ファンドを応援するために番組を降りたとの情報は風の噂で聞いていたのだが

、真相は分からなかった。大泉は池谷の言葉に耳を傾けた。番組は池谷と女性の局アナがテーブルなしで椅子だけで対座して話を聞くスタイルになっている。バックの背景は黒だから、局としては池谷の本音を聞き出したいという意図が見て取れる。

「どうして、番組を降りたのですか」

「足かけ4年にもなる番組ですから随分と悩んだんですけど、大泉さんを応援したいと思ったんです。それには今しかないって」

「番組に対する不満はあったんですか」

「子どもが居ますから、深夜番組は辛いものがあります。ですけど、それは問題ではありません」

「そうすると、何が問題なんでしょう」

「私も、そうなんですけど、視聴者のみなさんも経済が分からなくなると思うんですよね。積極財政で景気浮揚を考える人と、その反対に構造改革をすべきだと言う人とが交互に番組に出たり、時として意見を戦わせる事もあるんですけど、考えは全く変わらないんだから」

「それで、番組を降りたんですか」

「それもあるけど。例えば、元大蔵省財務官でミスターエンと言われた先生がいます。ミスターと言えば長嶋さんを思い出しますでしょう」

「そうですね。ミスターと言えば長嶋さんですね」

「ファンの誰かが長嶋さんのことをミスターと言ったんでしょうね。そうしたら長嶋さんのキャラクターとぴったりあって今や、ユニフォームを脱がれてもミスターといえよ。それは長嶋さんの代名詞になっていますよね。誰かが言ってみんなが賛同してミスターと言われた長嶋さんと比べるとね。疑問がね」

「どのようにですか」

「いったい、ミスターエンと言ったのは日本の誰だったんでしょう」

うね？」

「日本の方が言ったというよりも？ 米国の誰かさんじゃあないんですか？」

「現在は大蔵省から財務省に変わって財務官は青田さんですけど、ミスターエンとは言われてませんよね。後にも先にもミスターエンと言われていないんじゃないかしら、どうしてだか分かりますか？」

「そう言われて見れば、そうですね。どうしてなんですか」

「分かりません。ですけど、ミスターエンというのはアメリカ人が付けたニックネームだとしたら、例えば、怖い人にニックネームを堂々と付けますか。男気の強い人だったら、ミスターエンとおだてられても、それは米国にとって都合のいい男という意味かと怒る人もいるかもしれませんよね。でもマスコミが、ミスターエン、ミスターエンというと、どうでしょう。一つの権威になるんじゃないかしら、でもちょっと待ってと言いたいわけ。バブルが崩壊してから10年になろうとしている最中に財務官だったわけですから、別に景気を良くしたという実績はないんじゃないかしら。むしろ、日本に取っては都合が悪い、アメリカにとっては都合のいいと言う意味でアメリカが付けた愛称だったとしたら、日本のマスコミがミスターエンとおだてるのは怖いことですよね」

「そういうことに疑問があったんですね」

「経済番組の一番いけないところはね。どうしてミスターエンと言われたのかの検証がないことなんですよ。嘗て借金を直ぐにでも返済して全ての資産を現金に変えておきなさいと力説した証券会社出身の経済評論家がいたんですよ。ベストセラーになりましたからね。でも、アノ本のようにした人は大損したはずですよ。それでも平気で本を出し続ける経済評論家たちにウンザリしたわけ。ああ、それからもう一つ思い出したわ。政府系金融機関の人で経済を語っていた人がいました。ところが、その金融機関は不良債権で国民からの税金、つまり公的資金を大量に注ぎ込んだ

のに倒産、そして外資に身売りよ。世界経済語る前に、自分のところの銀行経営も分からなかったのかって言いたいわ」

「言う権利はありますよね。私たちの税金が無駄に使われて損しているんですから」

「そうよ。小賢しい理論・理屈の経済の先生に辟易しちゃったんですよ。世界経済なんてね。先物取引があって、思惑があって、生き馬の目を抜くヘッジファンドが居る魑魅魍魎の世界。それがコンピュータで瞬時に世界を行き交う、ところが、ろくすっぽコンピュータも操れない人がふんぞり返って分かったような事を言っているんですもの、民間から、経済だけで、何冊もベストセラーを出した作家の人が当時の経済企画庁長官に起用されたので期待していたんだけど、トンネルを抜けたら、まだ小雨が降っているかもしれないだの。今は午前4時頃で、間もなく夜明けだなんて言っていましたけどね。何のことはない曇りが雨になって小雪になってドカ雪になってトンネルがどこにあったのか分からなくなっただけのことじゃない」

「私も経済番組持ったことがありますけど、日本はこのまま行ったら沈没するなんて言っていた先生が、スタッフから声かけられると、にこやかに銀座に繰り出したりして、さっきの話しはナニって思うこと確かにありますね」

「聞かされた視聴者は堪りませんよ、明日仕事だっていうのに、脅かされて、寝付けなくて。マスコミはね。あたらない占い師とあたらない経済評論家をふるいに掛けて選別した方がいいですよ。当たらない経済評論家なんて意味がないだけじゃなくて害毒ですよ」

「でも、全部は当たらないですよ。高い見地から論評されているんじゃないんですか？」

「私も最初はそう思っていたのよ。以前に経済財政担当大臣に成

られる前の大学の先生だった時に、その方を呼んで、番組で一年の株価の動きを予想をしてもらったんだけど、全く外れているの。商売の経験もない組織も知らない、それで何もかも分かるくらいなら自らが個人の投資家になって巨万の富を築いた方が余程説得力がありますよ。勉強だけして先生になっただけの人が、この国の経済財政担当大臣なんですからね。結局ね、憲法9条と同じでね」

「戦争放棄の憲法9条ですか？」

「最初に心ありき、若しくは性格ありきでね。アメリカにショウ・ザ・フラッグと言われて、援護したいと思う政党は憲法9条のどこにも武力行使しない自衛隊派遣は合憲だとなる。反対に武力行使しなくとも自衛隊派遣したくない政党は憲法九条のどこに、武力行使しない自衛隊派遣は合憲だと書かれているんだということになる。憲法解釈と言うと聞こえはいいけど、最初に心ありき性格ありきだから、朝まで生テレビやったって結論は出た試しは一回もないでしょう。タダ単にご自分の自説を繰り返しているだけ、アノ番組の存在価値は人は変わらないということを視聴者に証明してみせたことですよ。経済だって同じですよ。今の現状・状況は先生諸氏は同じデータを共有しているけど結論が違うのは性格の不一致が主たる原因なのよ」

「経済の先生方に共通している点というのはあるんですか？」

「それは日本は重大危機で、この危機を乗り越えなければ明日の日本はないという点ね」

「確かに、その点だけは共通事項ですね」

「貴女も経済番組を持っていたから聞くんだけど。その、日本の危機だと言われていた先生諸氏が経済建て直しの手法が違う訳よね、大別すれば景気を優先派と構造改革派とね。その人達は番組が終わるとどう？」

「そうですね。番組のプロデューサーが挨拶にきて、局の車でお帰りになるだけですからね」

「やっぱり、貴女の立場では微妙だから、私が今、話しをしてい

るんだけど、その通りなんていったら、あとで上司に怒られるか。降板させられるだけだから、ここで頷かないでいいのよ。私も貴女と数週間前は同じ立場だったから、このままでは視聴者を惑わすだけだからって真剣な表情で語って意見の統一を図ろうと努力する人っていないでしょう。私は根が単純だから、日本の危機なんですよ。

どうして誰一人として、番組の後でも意見を煮詰めないんですかと言いたくなる衝動に何度か駆られたことがあるわ。それで分かってくれる。私が降板した本当の理由は、しがらみに惑わされたくなかったってということなの」

「お嬢さんがお一人いらっしゃいましたよね、どのように気持ちを伝えたんですか？」

「私ね。父親の真剣な訴えをみて、浩太郎さんが立ち上がったの分かるんですよ。というのはね。娘に自分の気持ちを伝えたんです。そうしたらね。小学校5年の娘が『キャスターの収入がなくなるから私は無駄遣いを止めてお母さんを応援する。お母さん頑張っ』と言ってくれたの。子どもは普段のあけすけな親の顔を見ているでしょう。だから親が真剣になると何かを察知するんですよ。それでね、思い切って外に出て、無職になれば、私だってタダの主婦ですからね。主婦の立場で主婦の人に思い切り訴えたいことがあったんですよ。国にも財務大臣いるけど、あの人は大根一本、サンマー匹の値段も知らないって。それより、私たち家庭を護る主婦の財務大臣が結集した方が不況を脱出出来るって、家計をやりくりして、大泉ファンドを買って、今度は投資家であり、有権者の立場で積極的に国に対して物を言っていこうって、私がその架け橋になればなって思ったんですよ」

「でも、思い切った行動ですよ」

「人間って脳の中の細胞にミラーニューロンというところがあって、鏡のように会っている人に共鳴してしまうって最近知ったんですよ。だから、心で批判しているうちはいいけど、そのうち

に評論家の人達みたいにテレビの前では深刻ぶって、終わるとケセラ・セラになる自分を感じてしまったの。大泉さんは政治生命と議員生命の二つを懸けて大泉ファンドを買ってくれと言っている。どちらが、日本の危機と本当に思っているのかは良くわかりますよねえ。だから、私も、後でお婆ちゃんになってから、後悔したくないもの」

「評論は誰でも出来る。でも実践している人の方を信頼すべきだということですね」

「分かってくれたら貴女も、大泉ファンドでも石塚ファンドもいから買って下さい。どうなる経済ではなくて、こうしよう経済には、行動しなくては駄目なの。だから買って下さい。娘とね、私たちのサイトを立ち上げます。大泉ファンド・石塚ファンドを買った人達の意見をメールして貰って、共通する意見はどしどし言っていこうというサイトなの。それには、兎も角、買って欲しいの。1万円カンパすることで国が変わるんだから」

池谷カスタマーの降板の裏に隠された真実は多くの主婦の共感を得ることになった。翌日の夕刻、池谷サヨリには講演の依頼が殺到していると聞いて大泉はホットしたのだった。

大泉は石塚と極秘で会談した。

「純ちゃん。ここはね、僕の後輩が経営しているんだ。だから気楽にして欲しい」石塚はそういいながら大泉の杯に酒を注いだ。

「光栄です」大泉と石塚は嘗て、福富派に属していた。当時、キングメーカーと言われた町中派の全盛時代だったから冷や水の中を共にくぐってきた戦友でもある。石塚はその後、無気力な国会議員に嫌気を起こして辞職したが、見事、都知事選で復活。前知事が少数野党の国会議員でこれといった仕事をせずに東京都は倒産寸前の財政再建団体であったが、石塚の登場で世界の都市の東京は辛うじて面目躍如といった感があった。年は一回り石塚の方が上であったが、石塚も大泉の登場で都政がやりやすくなっていた。大泉が石塚の長男を国務大臣に任命したが石塚の細君と大

泉とは遠縁の間柄である。それよりも、何よりも、お互いに日本を背負っているという重圧がある。これは成ってみた者が初めて知る孤独の味でもあった。

そのことを共に理解しあえる仲である二人は、互いに酒を傾げるだけで通じ合う何かを感じとっていた。

「ところで、純ちゃん。貴方、最近、変わったな。どうして」

「変わりましたか？」

「変わったね。パフォーマンス・センス。何かが変わったね。正体は分からないんだが」

「実は、話すときのキーを努めて高くしています。今は普通の声ですけどね」

「声を、どうして」

「明るくみえるからです」大泉は石塚の杯に酒を注ぎながらいった。

「……声ね」

「それから、もう一つ」

「まだあるの？」

「財政再建なくして、景気浮揚なしを、ピンチは最大のチャンスだと置き換えることにしました」

「そう言われてみれば、そうだな。しかし、それだけじゃあない、まだ、あるんだが」

「……………」大泉は頭を掻いた。

「正直に言えよ。他言はしない。勿論、石塚信照にもだ」信照とは、石塚の長男であり。大泉内閣の目玉である。行政改革担当大臣の任命を受けている。

「任期まで、人気に奢らないように注意しています。人気があるのは神が後押しをしてくれと思うようになりました」

「いつから、クリスチャンだね。まさか、イスラム原理主義じゃあ、ないだろうね」

「……自分では別に人気に奢っているつもりは毛頭なかったんですがね」

「実は心配していたんだ。嘗て総裁選に親友が立候補したことがあった」

「ああ、川中一郎さんですね」

「各地で凄い人気だったが、予備選といった形式ではなかったから。君のようにはなれなかった」

「当時の川中一郎人気は私以上だったかもしれません」

「川中は総裁選の直後に謎の怪死を遂げた。1983年1月の事だった。最早20年にもなろうか」石塚は川中を語り出した。川中一郎は超タカ派の政治家として名を挙げ、ある時期ソ連との接触を重ねるようになった。それは、日本独自の文化や思想などが、アメリカの粗暴な政策による支配の中で荒廃し、それに対抗し日本が大国として生き残るにはソ連との連合しかないと考えたからである。ソ連との極秘の交渉を重ねる彼の身に異変が起きたのは、総裁選出馬の直後であった。警察は神経衰弱による自殺としてこの事件を片付けた。しかし、KGBの極秘文書にはアメリカCIAが川中氏を邪魔な存在として処分したと読みとれる報告が為されているが、今となっては真相は藪の中でしかない。

石塚は嘗ての同士を語り始めた。

「諸説あるんだが、川中はあの異常な川中人気の中で、大いなる挫折を味わった。北海道の厳寒の中で歯を食いしばって生きてきた男で艱難辛苦・辛酸を舐め尽くした男。そんな形容がぴったりと来るような人物だった。そして人の人情に誰よりも感じる男だった。その男が奈落の底に落とされたんだね。たまたま僕は若い頃に脚光を浴びたからね。免疫が出来ている。しかし彼にはそれがなかった。それで死を選んでしまった」

「私も、少数派ですからね。人気だけが頼りです」

「そこなんだ、そこそこの人気ならいいんだけど、失礼だが、50の坂を過ぎての人气だ。人気は年に関係なく有頂天にするものだ。しかし、政治家は芸能人とは全く違う生き物だからね。それに人気は怖い。人気は訳もなく株価のように下がるから、間違

わなといいなとは思っていたんだよ。でもね、すさまじい人気だから苦言を呈すると、やっかみだと思われる」

「石塚さんでも気を使うんですか」すると石塚は真顔で

「人気とは、だからそうした力があるんだ。だから、怖いんだな」

「はい、素直に受け止めさせていただきます」

「ところで誰なんだい。今の人気の話しといい。ポイントを押さえてくれた人は、まさか、君の産みの親、変人を育てた町中さんのご令嬢じゃあないし、他に、そんな気の利いた諸先生が見あたらないんだが」流石に芥川賞をとって文壇にデビューしただけのことはある。石塚は変わった大泉より、そのブレーンに興味があるらしい。

「実は息子がね」

「信照さんが何か」

「息子に聞いたんだよ、ブレーンは誰だってね。……分からないってさ」

「実は、勝手に自分で変わったんですよ」

「それはない。僕はね。人は変わらないというポジションで筆を進めてきたんだよ。そんなこと信じたら、僕の今までの言動も作品も大嘘つきということになってしまう」作家、石塚慎太郎は大泉に、そうは問屋が卸さないよとでも言いたげな面もちで、銚子を取った。

「弱ったな」大泉は先輩の詰問に憔悴している後輩のような心境になっていた。

「僕は作家だよ」

「分かってます。石塚さんほど物書きであることにプライドを持って居る人はいませんから」

「……実は、私には彼女が居ます」

「彼女、そりゃー、君は独身だからね。女性スキャンダルなら、宇田野君の二の舞で総理の座は奪われるけど、結婚するんだったら国会生中継で僕が仲人してもいいよ。今の君の人气が続いていればだが」石塚は半信半疑なのか、上手い問いかけをしてきた。やはり、総理になれる器の都知事であると大泉は妙なところで感心したのだった。

「……その、彼女はですね。例えば、私が散歩をしていると、公園のブランコで人形を抱いているような幼い女の子でして、行きずりの私は、ふと、その子の隣のブランコに腰を掛けます。

足の届かないその子は足をバタバタとさせています。嫌なことでもあったのかと、私がその子を見ると、その子も私を見て微笑するんです。その子は、実に懐かしい目をしています。私が何してるのと聞くと、その子はブランコに乗っているのと応えます。楽しくていいねと言うと、おじちゃんも楽しいと聞いてきます。私はそうだな、お嬢さんと会えたから楽しいなと応えると、その子は再び微笑して、じゃあ私も楽しいと応えます。彼女は不思議なんです。子どもなのに幼さを感じさせないんですね。私と彼女とが同じ年なのかと思わせるような不思議な。そんな彼女なんです」

「いいね。メルヘンチックで、そんな映画あったな。タイトルは忘れたが、そんな出会い方をする洋画が確かにあったよ。古い映画だよ。モノクロだったようね気がするが、男は30半ば。彼女は小学生の3・4年生なんだ。二人は年の差を意識しないで親しくなっていくんだ。確か男は戦争帰りでね大いに傷ついている。女の子も家の事情か何かで寂しいんだ。二人は公園のブランコで恋人のようにはしゃぎ回り、笑いあうんだよ。仲のいい親子だと思っていた村人がそうでないことを知って二人の中を怪しみだすんだ。それで村人の心ない嫌がらせにあうんだったかな。女の子の親もそれを知って、男と会ってはいけないと外に出られなくするんだよ。切なかったことを覚えているよ。名作だったな」

「そう言えば、私も見ましたね。あれ、それで、そんな風に言ってしまったのかなあ」

「もしかして、つまり、私に、承知の事実になれば、村人に叩か

れるといたいたいのかな」

「ご明察です。やはり、石塚さんは大作家なんですね」

「今頃気が付いたのか。まあいいや。追求しづらくなったね。日本で一番偉い人に大作家と言われてわね」

「大作家でなくては、このなぞは解けやしませんよ」

「弟の裕次郎がね。本気で大人の恋の映画を作りたいと思っていた節がある。僕が、からかったら、裕次郎が憤慨した。最近ね。裕次郎に悪いことをしたってね。思って夢の中で謝っているんだ。純粋な恋ってさ、死を全く意識しないで心ときめかせる。小学生か死を意識して心がふれ合う頃にしか出来ないのかもしれない。そう思うようになってきたんだ。結局、裕次郎はできなかったんだが。あの時、やってみろとっておけば、あいつの事だ乾坤一擲（けんこんいってき）を絞り出して映画作ろうと、もう少し生き延びたんじゃあないかってね」強気だけが強調されている石塚だったが、昭和を代表する弟が逝き、兄が平成の世を正している。多忙の中にあっても兄は自分より、遙かに若く逝った弟のことは忘れられないのだろうと大泉は思った。

「そんなことが、あったんですか」

「二歳違いのたった二人の兄弟だったからね。お互いに片意地張ってしまうところがあった。……ところで、そのブランコのお嬢さんは不幸せではないんだろうね」

「ええ」

「それは良かった」

「実はその娘の父親と私は昔からのつき合いがありまして、そんな関係で、その娘を知りました。父親は亡くなったんですが、その父親からは生前、病弱な自分に何かあったら娘を頼むって言われました。そんなこともあって時々、メールとか電話とかで」

「そう、孤独と絶望は癒しの中か。それはいい。人生とはそうした部分がなければ、人生じゃあないからね」石塚はそれ以上、詮

索しようとはしなかった。大泉は石塚の杯に無言で酒を注いだ。石塚はゆっくりと人生を味わうように咽に流した。

大泉は石塚と別れると、そのまま首相官邸に帰った。揚げ足取りの討論は寿命を縮める思いだが、肝胆相照らす仲で腹藏なく話すと言うことはこんなに楽しいものかと思いながら大泉はネクタイを解くとパソコンに向かった。

すると、お嬢さんからメールが届いている。

おじちゃんからリストラについてどう考えるかと言うEメールの私なりの答えを返信します。

世界を悩ます人種問題、南北問題、宗教問題に食糧問題。しかし真実は極小の人間が全世界の実権を掌握しているにすぎません。リストラとは一番安易な企業再建といえます。昔、間引きといって、産まれたばかりの我が子を殺したり、年老いた母親を山に連れて行く姥捨て山も食費削減を減らす為の、余りにも悲惨な手段だった訳です。それより幾分ましかも知れない程度の策がリストラです。外人に買われた日本の車メーカーの株がリストラで上がっていますが、工場を閉鎖して、その土地を売却して、そこで働いていた人の首を切った果ての黒字であった訳です。世の経営者が利益を上げることに血眼ですが、これは間違っています。実は経営とは利益を出すことではなく、本当は雇用をまもる事が真の経営です。

江戸時代、つまり徳川幕府は徳川家康が江戸に幕府を開いて以来、15代将軍・徳川慶喜が大政奉還するまで264年という世界記録を作り上げる事が出来たのは雇用を維持することができたからです。社員を不幸にしないことを考えていれば、仕事をしているとき社員の人数と同じ数の陰が出来るように利益が出てくるものなんです。お陰様でなんとかやっていますというのには、そういう意味があると思っています。将来、お爺さんや、お父さんをリストラの憂き目に遭わせた所の車を、その孫や子どもが乗りたがりませんか？ その会社に勤めたいと思うのでしょうか。リス

トラはその場しのぎのことであって、長い目でみれば信用も信頼も無くなっていきます。

如何に時代が変わっても人間社会ですから、親子・夫婦・兄弟・友人から信用と信頼をとったら、どうなるでしょうかということになります。リストラする会社の株価が上がり、リストラしないで頑張っている会社の株価が下がるとしたら、その差額こそが如何にアメリカに毒されている数値であるかという証明だと思います。アメリカと違った価値観を持つとしないで、追随すればアジアも日本のやり方をまねるでしょうね。

ネイティブ・アメリカンの詩に『100人の村』というのがあるんですが、世界の人口を100人の村人に集約すると男女別では52人が女性、57人はアジア人、50人が栄養失調で、パソコンを持っている人はわずかに1人。70人は文字を読むことが出来ません。世界の富の59%は6人が握っていて、その6人全員が米国人と言うことになるそうです。見ている時代は同じでもとらえ方で変わってきます。この世界村の100人の村にとって必要な人材とは、リストラを中心としたコストカッターのような人か、それとも雇用を第一に掲げる。家族型とでもいうべき人なのかということだと思います。世界で100人中1人の人間だけがパソコンを知っていると言う事実は、一見、低迷しているかに見えるIT産業でさえ、これから果てしない成長の余力を見出すことができるし、所有している人としていない人間のギャップを埋めるための新たな産業が生まれる可能性もあるということです。神はこの世の男女を均等に分けてくれました。それも人類が始まってから一度もその摂理は変わっていません。前に言ったことがあるように思うけど一度でも男性が80%という時代があっ

たとえるなら、男は女を求めて戦乱となり、それは世界大戦争へと発展したと思います。しかし、偉大なる神の摂理は戦争しないでやっていける摂理を、ずーっと守ってもらっていると思います。ソレなのに21世紀初頭から戦争があるのは、そこに気づいている人が殆ど居ないからというのが私の結論です。

それでは、風でした

。

風ちゃん

メール有難う。今日は酔っぱらっているんだ。あんまり良い内容なんで、目が回ってきた。（からかっているんじゃない。本当なんだ）良いドキュメントなんで、明日、しっかり読ませて貰うよ。いつも、有難う。

それから、好きな人が出来て真剣に考えるようになったら早めに私にいいなさい。怒るかも知れないが、男を見る目だけは風ちゃんより自信あるつもりなんだ。それに、そうでないと、大将に叱られる。

それでは、おやすみ。

親愛なるジャンヌ・ダルクへ

老いたドンキホーテ

より

大泉は送信ボタンを押すと、そのまま、ベッドに倒れ込んだ。

構造改革は覚悟していたが、その抵抗勢力の執拗なまでの意固地さに大泉は辟易としていた。秘書官が執務室に入ってくると

「石塚さんが、石塚ファンド構想をぶち上げました」

「石塚ファンド！」

「大泉ジュニアがキャラクターなら、こっちは石塚軍団で中年に呼びかけるって言っています」

「テレビを付けてくれないか」秘書官がテレビを入れると石塚の声が聞こえてきた。

「大泉ファンドの叩きつぶしでしょうか？」

「君たち、相変わらず、ボキャブラリーが不足しているね。ON

が居たでしょう。王と長嶋ね。二人はライバルですよ。宿命のライバルだ。だから巨人は9連覇をやってのけた。何でもね。ライバルが必要なんだよ。イチローに対抗する、ヒットメーカーができればですよ。イチローの打率はもっとあがるんじゃないかな。相乗効果ってやつよ」

「大泉ファンドは大泉ジュニアがキャラクターですが石塚ファンドはどうでしょう」

「そりゃー、石塚といえば石塚軍団でしょう。中年層のおばちゃんのおハートをですな。ギュと掴むのよ。若い人より中年・年寄りの方が圧倒的なんだからね。ただね。石塚ファンドを使うのはいいんだが、何パーセントかロイヤルティー欲しい訳よ。都政の赤字を減らす為に協力費としてね」

「大泉さんの二番煎じという意見もあるんですが」

「あのね、二番煎じでも三番煎じでもいいんだが。そりゃ、やっぱりね。東京は日本の顔なんですよ。同時並行で日本もね。東京も日本も表裏一体で良くしていかないとね。外国の人が来ない訳よ。外国の人が入ってこない国際都市なんてないわけだから、だからね東京だけじゃあないですよ。千葉・埼玉・神奈川にも声を掛けてね、みんなで外人さんと呼ぶわけよ。じゃあないとね、東京は栄えられない。東京が良くなることが日本をよくする訳で、これは卵と鶏とドッチが先かの議論にもなるけどね。その為のカンパ金と思ってもらいたいね」

「大泉総理には相談されたんですか？」

「そんなこと相談しませんよ。純ちゃんとはね、時々、時間を作ってね。会ってますよ。これからの日本・東京を語っていますよ。いずれにしてもね。金がお互いにならないんだから、広く薄くね。金を集めなくちゃー、ならないんだから」

「切ってくれないか。いいじゃあないか。両方とも上がればいい」大泉はいった。

政府の総合規制改革会議は、株価指数連動型上場投資信託や不動産投資信託の銀行での窓口販売の解禁を盛り込むことになり財政諮問会議に報告する。利用者が身近な銀行の窓口販売が出来るようになれば1400兆円に上る個人金融資産を低迷する不動産・株式市場に呼び込めるようになる。何としても株価を20,000円に持っていきたいと思っている大泉にとって、まずは朗報であった。

大泉は疲れを感じてワインをくゆらすと長椅子で軽い睡眠を取った。目が覚めると時計は10時を回っている。メールをチェックすると

風子です。新サイトが順調ですので、このところ嬉しい気持です。それでおじちゃんに伝えたくなったので聞いて下さい。ブルースカイの井上さん達とシニア世代とベビー世代が、より親しくなるためのサイトを立ち上げることになって2ヶ月が経ちますが皆さんからの支持を頂いて成長いただきました。若者からの支持で広告収入も順調に伸びているブルースカイの会合に呼ばれたので何とかシニア世代（60歳以上）とベビー世代（幼稚園・保育園児）を結びつきたいと思っていた私は、井上さん達に提言したら受け入れてくれた経過があります。それにしてもロイヤルベビーのご誕生は国民にとって今年最大の嬉しいニュースですが天皇陛下から見ればお孫さんが出来たことになります。おじちゃん。これからは、運営によっては日本経済を上昇気流に乗せることが出来るかも知れません。ロイヤルベビーつまり将来の皇位継承者のご誕生は、景気に多大な影響を与えてくれると思うからです。

皇太子様ご成婚は1993年12月でしたが、この年は景気の谷に位置していた時期でしたが、前年度1.6%だった婚姻数が5.1%に跳ね上がり、翌年の出生率は、その前の年の-1.7%を4.2%に引き上げています。正に雅子様効果でした。そこで、ロイヤルベビー誕生の年を過去に遡って調べて見ると実質経済成長率が昭和天皇の場合、前年が-1.4%だったのを3.6%に

、現在の今上天皇の時が前年4.4%だったのを10.1%に、お父様になられる皇太子様は昭和35年2月ご誕生ですけど前年9.2%を13.3%に押し上げています。これは日本という国と皇室との関係が固い絆で結ばれていることを実証する数字だと想います。混迷の経済ですので、打つべき政策があるのなら、兎も角41年ぶりの御慶事を祝福したい国民の気持ちを組みながら、発表した方がいいと思います。

どうして、こんなことを言うのかというと。百貨店が敬老の日になんで10月の第三日曜を孫の日としてイベントを組んで3年立つそうです。私個人としては孫の日はどうも、ピンと来ませんけど、問題はそのことではなくて、10月10日をピークに運動会があるんですよ。そこに焦点を合わせておじいちゃん・おばあちゃんが来るのに、その次の週に孫の日が来ても、おじいちゃん・おばあちゃんは帰ってしまっているところが多いんじゃないかって、どうして、そんな時を孫の日にしたのか分かりませんが、政策って、出せばいいというものではないと思うんです。そんなことを感じていたものですから、それは兎も角、ロイヤルベビーの誕生は株式市場に明るい展望ですので政府も便乗してみるといいと思います。目標値は20,000値幅取りの売りが次にまっていますから18,000円を考えた方がいいのではと思います。――これからは、天皇陛下とお孫さんが散歩されるお姿を映像で見る機会が増えていくでしょう。これはシルバー世代とベビー世代とのあり方を国民全体で考える良い機会になると思っています。経済アナリストがお金のあるシニア世代がベンチャーを立ち上げる血気盛んな若者に投資してくれれば、いいというようなことを聞きますが、私は上手く行くかな、と小首を傾げます。若者の歩調とシルバー世代の歩調は合いません。話すスピードも違いすぎます。同じ足取りで同じ会話のペースはシルバー世代とベビー世代の取り合わせが一番なんです。ひと仕事終えて無邪気な幼児を愛おしく愛せるシニア世代。そのおじいちゃん、おばあちゃんが一番好きな幼児世代の交流って私は大好き

です。

公園で外婆さんと男の子が、かくれんぼをしています。男の子はおばあちゃんがどこに隠れたかと捜しますが、見つかりません。だんだん心細くなって、鼻を鳴らせ始めた頃に、絶妙のタイミングで外婆さんが現れます。

その時の子どものキッキとした顔、頬がほころんで赤みがさしてきて、微笑して、お婆さんの微笑をみてとると、首をすくめて紅葉のような手を口にもって行って笑います。小さなおぼつかない足は小躍りしています。よろけて倒れるか倒れないかの頃に、お婆さんの手が伸びてきて高い高いって、男の子は、もう宇宙遊泳でもしているような気分です。私はそういう光景を見ると、嬉しくなってきた涙が滲みます。お母さんでは、あの間合いは取れません。本当に絶妙なタイミングなんです。亀の甲より年の功って、ああいうの言うんだなって思います。――女の子が咲きかけた花を一心不乱に見ています。おばあちゃんも孫のそばで、孫の視線に目をやっています。やがておばあちゃんが

「きれいだね」と優しく語りました。すると女の子が

「お花きれいね」といいました。

「お花とったら、かわいそう」女の子がおばあちゃんの顔を覗いていきました。

「お花いたい、いたって」

「かわいそうね。とったら、かわいそうね」

「せっかく、咲いているんだもんね。とったら、他の人がみえなくなっちゃうね」

「うん、とらないで、みている」

「そうだね、花、きれいだね」おばあちゃんは女の子の頭をなでながら言うと

「うん、すごく　きれい」女の子が微笑しながら言います。たった、これだけの会話でも、花に命のあることを教えて、考えさ

せて、独占したらみんなが美しいものを見られなくなってしまうことを教えています。おばあちゃん言葉には愛があって、子ども時代におじいちゃんと、おばあちゃんがいた子は、それだけで幸せです。私はおばあちゃんを知らないから、将来は、ああいうおばあちゃんになりたいなって思います。最近少子化で核家族ですから、こうした交流は実に少ないんです。シルバー世代は人生を振り返って、伝えておきたいことがあると思いますけど、もう、二十歳を過ぎ30才にもなっている孫には馬の耳に念仏だと思えます。

でもベビー世代だったら、おじいちゃんおばあちゃんは人の孫でも自分の孫のように接することができるんじゃないかしら、三つ子の魂百までといいますから、経験を積んだシルバー世代の人に貴方も親切にされたら嬉しいでしょう。だから親切にしてあげなさいって話してもらえれば耳で聞くおとぎ話のように子どもの心を開いてくれると思っています。

寝たきり老人っていうけど、可愛い孫世代から、おじいちゃん、おばあちゃん長生きしてねって澄んだ瞳で毎日いわれたら、どんな薬よりも効果覲面になるのになあとも思っています。核家族が当たり前になって死語になったものなのか最近、核家族という言葉は聞かなくなりました。でも、最高の贅沢というか、自然の営みは三世代で住むことだと思えます。これは人間だけが出来る特権です。三世代同居が一つの文化になれば、冷蔵庫も洗濯機も風呂場もトイレも一つか二つで、確実に1 / 3は減らす事が出来ますから、その分、趣味とか嗜好品を増やせます。孫世代と一緒になら、それだけでお年寄りも精神面では安定してきますから医療費も下げることが出来ます。車も家族全員で出かけられるミニバン、買い物はファミリーカーと効率のいい使い方でも消費経済も伸びます。こうした三世代文化がロイヤルベビー誕生で見直されるといいなと思っています。それで、お孫さんに伝えたいことや幼い子に言うておきたいことがあったら、一行でもいいから投稿して下さいってお願いしたら、だんだん反響がでてきました。一方で核家族の若いおかあさん達におじいちゃん・おばあちゃんの投稿した、お話しを子どもさんに声を出して、読んであげて下

さいといったら、『勤めがあるので、毎週日曜日に、子どもに読んであげています。この前は、沖縄のおじいちゃんの戦争体験でその話は、私も初めてお聞きする話しでしたが4才の息子が涙を流しているのを見て、私も涙が出てきました。

時代に翻弄された私の親の世代を知った気持で、親子の絆の大切さを、教えて貰いました。運営は大変でしょうが、長く続けて貰えればと思います。私にでも出来る事があったらお手伝いしたいので、その時は声を掛けて下さい』こんな、嬉しいメールも届いてくるようになっていきます。私、今、すごく幸せです。

風でした。

大泉は読み終わると両手を後頭部に置いてから、その手を上にして背のびをしてみせた。

(娘が幸せだと父親も嬉しいものだ。大将、大丈夫だよ。預かったアンタの娘は順調に育っている 安心して見守ってればいい)

世界最速で進む高齢化の国が少子化という問題を含んでいる。日本が体験したことのない少子高齢化社会。経済的には生産性を上げて国際競争力を高めなければならない。核家族文化から親と同居する文化に変われば、風子のいうように人生の味わいの持てる祖父祖母と孫の生活が出来る。社会がバックアップして三世代の旅行商品で割引していけば、孫の為に重い腰を上げるシニアも出てくるはずだ。家も大きくしたいが、家族は増減しながら成長していくものだと考えれば、所有という観念からリースという観念も良いかも知れない。家に掛ける金は当然リースの方が安いから、家という箱に入れる物に金をまわすことが出来る。日本はアメリカほどの個人消費が望めない最大の要因は家という箱が高いから狭くなって、中に詰め込めないということが最大要因で

ある。しかし、風子の考えを真に取り入れられれば、それこそ本当の医療であり情操教育となる。如いては本当の構造改革となりうるのだが

「発想の転換、トレンドの変更、老人と孫が笑い会える街造りってどうですか、いまいちか。シニアとベビー世代の共栄、固いねどうも。ボキャブラリーの不足ですね。大泉さん」大泉はパソコンに向かって、キャッチフレーズを考え出していた。

午後の昼下がりに総理の執務室で

「君、テレビを付けてくれ」大泉は秘書官にいった。

「今日の株式は、大泉ファンドの人気衰えず、日経ダウは219円30銭上がって17,900円で前場を終わりました。その背景には外人も買い越してきているという実体があるようです。今や大泉ファンドブームは外国人までに波及している模様です。街の声を聞いてみました」

「大泉ファンド買いましたか？」

「買いました」

「ところで、石塚ファンドはどうですか？」

「石塚ファンドまでは無理です。お小遣い無理なもの」

「こちらにも伺ってみます。石塚ファンド、どうですか」

「私は太陽の季節のころが青春ですからね。裕チャンファンドよ」

「ああ、石塚ファンドですね。有り難う御座いました。くっきり色分けされて若い子は大泉ファンド、中高年は石塚ファンドということになっているようです。お返しします」

「切ってくれないか」

「今日は、未だ延びますよ」秘書官はテレビを切るといった。

「総理、都知事です」秘書官が受話器を大泉に渡した。

「純ちゃん、石塚です」

「石塚ファンド好調なようで、おめでとう御座います」

「そちらこそ、若者のハートはがっちり大泉ファンドで牙城が崩せないわ。それでね、石塚裕子キャンペーンをやるうって言いだ

したのがいてね。でも、やめておけと言っておいた。若い市場まで荒らすのは良くない。市場が狭いからね。それに都知事が首相に勝つのもバランスが悪いからって」

「恐れ入ります」

「っと、まずは恩を売っておいてだ。僕はね、カジノ構想と埼玉・千葉・神奈川を入れての首都圏構想を同時並行的に進めていきたいと思っているんだが、なかなかね。それで協力要請をかねて近日中にね。あって話しをしたいんだ。取り敢えずそういうことなんだが」

「秘書官に言っておきますので煮詰めて下さい。スケジュール調整が付いたら直ぐにでも……」

「ところで、この前、久しぶりにJRに乗って驚いたよ。女子中学生だか、高校生だか数人の女が、プラットホームの地べたに直接、短いスカートのまま座り込んで化粧をしているんだよ。全員、髪を茶髪に染めていたな。この前は鼻輪をしているのを見たが、寒い日に、ケツと太股、コンクリートで冷やしていると、子ども産むときに苦勞するぞってね。直ぐに思った。アイツ等はそういう女としての防衛本能がないのかねえ。呆れたよ」

「地面にぴたっと座り込むから、ジベタリアンっていうらしいですよ。それにしても、教育しなくちゃあ分からないことですかね」

「そんなことはない。だって私ら男だってそんな教育を受けたことがない。だけど、知っている。産まない男が分かる事が、産む当事者の女に分からない道理はないでしょう」

「恋愛も考えるだろうが、その延長の結婚・出産も真剣に考える年頃でしょうにね」

「あれで、社会に出してOLしてさ、それでもケツと太股、コンクリートで冷やしているOL見たら、もう、都知事、辞めたいね」

「何時頃だったんですか？」

「午前10時チョット過ぎだった。普通、学校さぼるんだったら、鞆を隠すとか、喫茶店にしけ込むとか、隠そうとするでしょう。それだけの美学があったでしょう。今は悪い事する奴に美学も

ない。ヤクザだって任侠という美学があるから認められるんだよ。美学も、メンツもない、恥を知らない。動物と同じだ。最早、女じゃあない。単なるメスだね」

「どうして、こんな事になったのか」

「売春が名を替えて援助交際と言われたが、行き着くところまで行っているなあ。これは教育も根本から考えないとね。待ったなしだよ」何もかもが待ったなしである。大泉は額に手をやて揉みながら石塚の声を聞いていた。

大泉は午後、都内で開かれた政府の「行革断行フォーラム」に初めて出席し、廃止・民営化の先行対象に挙げた日本道路公団、都市基盤整備公団、石油公団など7法人の具体的な組織形態の見直し案を月内にまとめる考えを強調したのだった。――株価上昇は大泉人気を裏打ちさせるものであった。経済に弱いと言われた大泉のイメージは、経済にも強い大泉となっていたのだから、政治とは不思議なものである。人気という得たいの知れない化け物は味方になるとこれほど、心強いものはなかった。もし、風子のアドバイスがなければ、今の株価は考えられなかった。仮に、市場が外人買いなどが急速に入って上げていたのであればマスコミは自立反発として捉えたであろうし、虚ろ気の外人買に対する悲観論も出ていたかも知れなかったのだが、株式関係の評論家諸氏が2万円作戦を後押ししたことで、市場ムードは損得抜きの、一種の祭りにも似た賑わいを見せていた。これは祭り相場だと言った辛口評論家はその後で、しかし国の有事に際して国民が協力する様は生きている実感を感じて嬉しい。まだまだ祭りを終わらせる訳にはいかない。左翼思想の人も、反・大泉の人も、祭りの期間だけは共に内輪と浴衣で楽しもうではないかと言って、市場のマイナス要因になるコメントに釘を差していた。テレビ各局は街頭に出て街ゆく人にインタビューを試みたが

「世界が暗いからね。日本から明るくなっていけば世界に波及する。大泉ファンド買いましたよ。ボーナスでもね。今、株買うことは国に貢献できるからね」

「若い人も、積極的に株式市場に出て、国と人が株によって、変

わるという体験をしておく絶好の時期だと思う」と言った。明るい、積極的な意見が聞かれるようになっていた。インタビューも街ゆく人の足取りが重たい感じでしたけど、スキップするような軽さを感じていますとあって局に返すような軽やかさが出てきた。

こうなるとそれを受けて、キャスターも私も大泉ファンド買い増ししようかなというコメントが聞かれ、コメンテーターが大泉さんばかりじゃ不公平よ。石塚ファンドも買いなさいという話に展開していった。情報化社会はある時点から劇的な変化を見せる時があるとテレビを見ながら、風子は感じていた。

「風ちゃん、こここのところ何を考えているの？」佳枝が珈琲を二つ持ってくるの一つを姉に手渡ししながら言った。

「何って……それよりお母さん。大丈夫かな」一週間ほど前から咳が出て止まらない。もともと気管支が弱い母だった。

「今、先に休んだわ」

「紅茶でうがいした」

「うん、ちゃんとしてから寝た」

「そう、お母さんまで逝ったら、私達。天涯孤独なんだからね。十代で二人も逝くなんてやだもんね」

「分かってるよ」佳枝がそう言いながら、風子を見るとパソコンの前で画面を見て風子は腕を組んだままの姿で固まっている。

「何、考えてるの？ 風ちゃんの癖なんだ。考えているときは溜息が多いんだから、……アノ、珈琲が冷めるんですけど」

「ああ、そうだった」風子は卓上に置いた珈琲を持つと口に運んだ。

「風ちゃんは考え出すと、食事することも忘れるし寝るのも忘れるし、みんな忘れるんだから。何を考えているのよ」スクリーンセーバーが働いて画面が見えなかったが風子がマウスを動かしたので、画面が浮かんできた。佳枝は顔を近づけた。

調べてみたらイスラム教の信者の人は13億人いるかも知れないのに、ユダヤ人は全世界人口の0.25%で1400万です。（米国580万・イスラエルに420万）ですから、イスラム教信者のわずか1%です。それなのにどうしてお金持ちが多いんですか？ 風子先生教えてください。

九州の小学校6年生 多恵子

「佳枝さんに質問です？」

「なによ」

「ユダヤ人は、どうして商売が上手いんでしょうか」

「それは、ユダヤ商法と言われるように商売が上手いのよ」

「違います」風子は佳枝の鼻先の前に人差し指を出しながらワイパーのように左右に振って見せながら言った。

「じゃあ、何よ」

「単に商売が上手いだけで、全人口の0.25%しかいない少数民族が世界を席卷するのは無理よ。中世ヨーロッパはキリスト教社会となり、イエス・キリストをローマ帝国に売って十字架に掛けたのはユダヤだということでユダヤ人は土地所有を認められず、ゲットーと呼ばれるユダヤ人強制居住地区に隔離して、キリスト教では倫理にもとるとされた唯一の金貸業を辛うじてユダヤ人に与えたのよ。シェイクスピアのヴェニスの商人は、その時の様子を描いた戯曲。でも、商業の時代になると、どこの国でも金貸し業は儲かる商売になっていった。金を貸すということは法律を含め、政治にも強くなっていったし情報を集めるユダヤ人ネットワークもあったんじゃないかしら。ユダヤは金融業の覇者だった。具体的に云えば銀行・保険・証券会社の草分けよ」

「そうして、金融を牛耳ってしまったのね」

「今や金融だけではなくて主要なメディアもユダヤ資本が牛耳っているんだから。人口比からいえばね。ノーベル賞を一つも取らなくてもおかしくないほど少数民族なのに。ノーベル賞受賞者の21.1%がユダヤ人なのよ。筆舌に絶する迫害を受けながら偉業

を成し遂げているのがユダヤ人。……大泉のおじちゃんがセンセーション巻き起こした日、どういう事を言っていた。私お店があったからテレビ見てなかったのよ。ユダヤ人かユダヤ教に触れた部分あったの？」

「うんと、確か、こう手を組んでさ。このテレビをご覧の多くの小中高・大学生のみなさんに特に訴えさせて下さい。2千年の間、路傍の旅の中で迫害を受け続けた民・ユダヤ人は強制収容所アウシュビッツで最終的解決と称しての大量殺戮により600万人もの犠牲を強いられました。ユダヤ人は現在でも1400万人ですから、当時、二人に一人の人が犠牲になった訳です。どうしてそんな目に遭わされなければならなかったのか、ユダヤの人は自前の軍隊がなかったからに他なりません。なぜ持てなかったか、国土がなかったから国がなかったから軍隊は望んでも作れなかったのです。翻って日本は四方を海という大自然の要塞に守られ続けました。中世に於いて日本国の危機といえば元寇の襲来のみです。国家があり鎌倉幕府を持っていた日本はユダヤと違い辛うじて、イザ鎌倉という名の武士軍隊を持っていたことから、元寇と戦う事が出来ました。なんとか日本国を奪われずに済んだのです。もし、元寇の乱の時に軍隊がなければ果たして今の日本は無かったかも知れないのです。ということは、ここにいる大泉も君たちも存在しないということなのです。ユダヤの人に見れば、安全と水はただと思って防衛などどうでもいいと捉えている日本人をどのように評価しているのでしょうか。日本の若者は国防とか防衛という話しになると木で鼻をくくるような態度を見せたり、軽蔑した視線をあびせたりする傾向にあります。日本人が日本と言う国と一度として遊離したことの無い弊害がそうした傾向を生むのだと思っています」

「貴女、おじちゃんの物まね上手いのね」

「風ちゃんが、分かりやすいように無理してやったんだよ。ゴホン、ゴホン。ああ咽が疲れたよ」

「それで、国が欲しくても持てなかったユダヤ人と、あって当然の日本人を対比して考えたんだわ、それで、ユダヤ人に対する質問が増えたのね」

「でも、その事はテレビで言っていたよ。ワイドショーで何回もコメンテーターがさ」

「でも、その時間帯、子ども達は学校でしょう」

「そうか。風ちゃんも余りテレビ見ないから行き違いがあったんだ」

「でも、それで悩んでいたんじゃないんでしょ」

「悩んでいたのは6年生の教科書よ。渡したコピー読んだ」

「ああ、今、持ってくるわ」佳枝は自分の部屋に行った。

風子は店に頭を刈りに来る小学生と仲が良くなったので社会科の本を見せてもらったのであった。教科書問題が取り沙汰されているから、偏向しているとは思っていたが、風子のサイトには小学生の質問も多く寄せられてきているので、知っておく必要があると考えて社会の教科書を読んだのだが、見る見る風子の眉間に皺が刻まれていった。

「これね」佳枝がもってきたコピーを二人は改めて額を合わせて読み出し始めた。

日本は東南アジアの各地や太平洋戦争の島々を次々に占領していきました。そして、日本軍の飛行場や鉄道を造るために多くの住民を無理矢理働かせました。また、占領地の資源や食料を奪い、軍用に使ったり日本国内に送ったりしました。日本に反抗する住民は、逮捕されたり殺されたりしました。

上海の大きな駅には、女性や子どもが1000人ばかり逃げ込んでいた。また、汽車に乗って中国の奥地に逃れようとする人も多く、駅はごった返していた。そこへ日本軍の爆撃機が次々と爆

弾を投下した。駅は8発の爆弾で焼かれ、大量の死傷者が出た。南京では捕虜にした兵士や、女性や子どもを含む多くの住民を殺害しました。

「99%は日本人の残虐・残忍・極悪・非道性をうたい挙げたものね。日本が戦争に突入した理由を捜してみると、ここだけだわ」佳枝が声を出して読み始めた。

「軍人や政治家は満州は日本の生命線だ。満州を奪えば国民の暮らしはよくなると考え満州を奪ったと。……たった、これだけ書いてあるだけだ」

「周辺諸国の検閲にあった教科書とはいえ、これが日本人の社会科教科書なのよ。イヤでも教科書は読まなくてはならない。日本が戦乱の火ぶたを切った理由がこれだけの記述では子どもは理解できないわよ」佳枝がコピーのあるところを指さしながら言った。

「小学生は、おろか私だって、理解出来ない。……ところで、ここに、さっきのところと関連するんだけど1931年、日本軍は南満州鉄道の路線を爆破し、これを中国の仕業ぎであるとして、中国への侵略を開始しました。これは満州事変とよばれ、日本軍は満州全土を占領して満州国を作り上げ政治の実権を握りました。これは本当のことなの？」

「それは本当の事よ」

「オウ、ショック！」佳枝は額に人差し指を持っていくと溜息混じりの声で言った。

「でもね。歴史は結論から見てはいけないの。経過を見なくてははいけないわ」

「これこそ、小学生がしっかり認識しなくてははいけないことなんだね」

「特に満州事変は日本が太平洋戦争の道を選ぶことになる切っ掛けの事件だからね。まず当時の日本を取り巻く世界情勢を考えると。第二次大戦が始まる切っ掛けは1929年10月24日、後に暗黒の木曜日と呼ばれることになるニューヨーク株価大暴落が起点なのよ」

「アメリカが最大の原因だったんだ」

「アメリカ大恐慌の波は世界中に及び。アメリカ政府は自国の産業を守る為に海外からの製品に高い関税を掛けて、結果国際貿易を大幅に縮小して、世界規模の経済危機に陥らせたの。ドイツでは失業者が3割。

大衆の不満を背景に、ヒトラーのナチスドイツが台頭して1939年ポーランドに侵攻、過激な海外拡張政策を取って6年に及ぶ第二次大戦がここに始まる訳ね。日本は輸出が大きく減少・農産物の価格が暴落。政府は建て直しを計るんだけど、軍事費増大に歯止めが利かない状況になっていた時代だった訳ね。……ところで貴女が地球儀か世界地図で初めて世界の中での日本の位置を知った時はいつ？」

「初めて見たのが何時だったかは思い出せないけど、日本の位置とか大きさを知った時、日本が小さいことに驚いたことを覚えている。関東地方を探して、神奈川はこのくらいで、4人の家族で住んでいる相模原となった時には、ボールペンで点を付けるくらいの大きさになってしまう。それに引き替えユーラシア大陸のソ連・中国の大きいこと、アメリカ大陸の大きいこと、オーストラリア大陸なんて五角形でドシッとしていて良いなって思った」

「やっぱりね。私もそう思った。日本の国の形がそう思わせるのかも知れないけど、海に浮かぶ木の葉のようでしかも縦長だから、何だか流されそうで頼りないのよ。地球は丸くて上も下もないんだから、地球儀を横にして見れば横長になるんだと分かるのは後のことね」

「そうか、言われてみればそうだけど、どうしても真ん中に頼りない日本列島があって、左にはユーラシア、右はアメリカ大陸の地図しか浮かばないな」

「地図で自分が住む日本を初めて知った日本人の感想は、例外なく佳枝と私が抱いた感情と似ていると思うのよ。インターネット

、ネットワークの情報化社会になってきて、日本全国、津々浦々にまで光ファイバー網のネットワークということになると大国より日本の方が有利かなという考え方も起きてくるけど、地図で日本を知ったアノ時代の人たちは、私たち以上に日本を悲しいほどに小さな国だと感じたと思うの。

その小さい日本が巨大な相手と戦っているという恐怖は日本人の言うに言われぬサイレントマジョリティーとなり、日本人の共通した地図史観として、日本が大国であったらという切実な願望を特に軍部・戦士達は持っていたと言うのが私の考えなの」

「軍部は風ちゃんが解く歴史史観からソ連、中国、アメリカを忘れたことは一時もなかった。だから、満州王国建設だったと言う訳ね。1DKに住む人がお屋敷に憧れるような感情を日本人がもっていて。特に軍部はその思いが強かったという風ちゃんの説ね」

「余談だけど、私たちが見ている地図は、まだ日本が真ん中だからいいのよ。アメリカの地図はアメリカを中央に持ってくるから日本は右はしに位置していて、漢字で言えば、犬の字が大に点だけど、あの点のような感じになって、もっと頼りない国になるのよ」

「見ようによっては邪魔な存在とも言えなくもないよね」

「時代には色々な顔があるから真相という物はひとつではないけど、そんなことを言っていたら、何が何だか分からなくなってしまふ。そこでね、主人公を見いだす必要性がある訳、満州事変は首謀者、関東軍の参謀・石原莞爾を読み解くことで当時、日本がどのような状態に置かれていたのか理解出来るのよ」

「その石原と言う人はどんな人だったの」

「陸軍幼年学校、士官学校、陸軍大学などを卒業。ドイツに留学し戦史を研究する経験があって日蓮宗を熱心に信仰していた人。この時39歳」

「分別がついて、日本の将来を考える最高の年齢と時期だったわけね」

「日蓮は世界平和が達成される前に前代未聞の大鬪諍一閻浮提に起こるべしと予言していて石原はドイツに留学し戦史を研究した事もあって近い将来、西洋文明を代表するアメリカと東洋を代表する日本との間で世界最終戦争が起きると思っていたの」

「大きな国土を有するアメリカを迎え撃つには、何としても満州がなければ勝てないと思っていた。さっき話した日本の地図だけど、鮮明にアノ当時の地図史観もあったでしょうね」

「同じ土俵で雲を突くような大男に小兵力士が対するとき、同じ間合いで仕切って相手に合わせて立って、がっぷり四つに組んで勝てる見込みはない」

「小兵力士が勝つには、何よりも相手よりも早く立って、まわしは取っても取らせない戦法が必要だよ。真珠湾攻撃の裏にはそういう事情があったんだ」

「さっきの地図史観だけど、列強は極東の問題に感心があっても、アメリカは、まだ不況から脱出しきれていない。何より心配なソ連は国内の体制の整備を急ぎ兵を動かすことは出来ないと踏んでいた。日本国内に目を向ければ、失業者が巷に満ちあふれ農村は疲弊し娘の身売りが後を絶たないという状況を異国の満州の地で聞いて石原はどう思ったか。石原は山形県出身で特に酷い東北の惨状を聞いていたたまれなかったでしょうね。こうした問題を一挙に打開する為に満州事変を企てたわけ。彼の書いた満蒙（まんもう）私見の中で、満蒙の農産は我が国民の糧食問題と解決するに足る。満蒙における各種企業は我が国現在の有職失業者を救い不況を打開するを得しと、言っているの。そして問題解決の手段としては謀略により機会を作製し、軍部主導となり国家を強引すること必ずしも困難にあらずと言っているのよ」

「それって、手段を選ばないって事、謀略のシナリオをでも強引に敢行せよということでしょう」

「うん、その背景にはね。当時、満州帝国に敵対する張・学良はその頃、中国統一を旗頭に台頭してきた蒋介石の国民政府にわり反日政府を鮮明に打ち出して、満州鉄道に平行するように中国系鉄道を中国東北部から北京に掛けて敷設したの、満州鉄道は鉄道の他に炭坑、製鉄事業をしていたんだけど、鉄道事業の冷え込みから全ての事業が悪化の一途を辿っていたという事情があったわけ」

「何かしなければという焦りがあったんだね」

「歴史というものは川の流れるようなもので、切れ目がないのよ。だから、そこだけを見て論じるのは問題があるのよ。満々とゆったりと流れる川面に浮く木の葉も上流では石に当たり岩肌の細かい隙間を縫い入り交じる激流の川に翻弄されてきたに違いない、時の流れが急流の時は個人の力で立ち向かえられるものではないわ。私、川を見ていると、川の流れが歴史なら人は川に生息する魚だと思うの。今、川に居る魚は激流に翻弄された時代に生きた魚の末裔でしかない。満州事変に何ら正当性はないけど、日本国内は娘を身売りさせるまでの大不況、頼みの綱の満鉄は大赤字。異議を唱えるのはたやすいけど、それじゃあ、お前が関東軍の参謀だったらどうしたと言われたら返答出来ない。あの時代の魚の生き方を問題にするのであれば、少なくともその時代に自分が生きていたのなら、こうしていたというビジョンを語るべきだと思うの。現代は容易に批判する時代だけど、本当の批判というのは、口にしていふべきものではないわ。例えばカール・ルイスを批判したければ彼よりも早く飛び、そして走ってルイスよりも金メダルを取ればいいのよ。口先だけで非難するのは卑怯だと思う。子どもだって大人の事は批判出来るんだから。先人を批判するのであれば、自分たちも又、いずれ非難されるときがあることを心得ているべきだわ。……どうしたの？」

「うん、軍属が全て悪くて、一般の人達は悪くなかったという、くくり方をする人がいるけど、歴史というものはみんなが参加者なんだからアノ時代の男の子は立派な兵隊さんになって、お国の

為に尽くすことが宿命づけられていたんだもの。土台色分けなんか出来ないよね。間違いなく言えることは、現代の私たちの誰よりも、質素で、楽しいこともなくて、苦しくて、仲の良かった人や知っている人がどんどん亡くなっていった。それは軍属の人も同じだったんだよね。

それなのに亡くなって、なお、子孫に馬鹿にされて、何だか可哀想になってきた」佳枝は目頭を押さえた。

「私ね。小学生の子の頭刈りながらね。アノ教科書を使っている6年生の男の子に先生はなんて教えるのかなあって聴いたら、日本人は悪いことを散々したんだと教えられたって、えっ、まだ教わってはいないでしょうって言うと、既に何かの時間に、そういう話しは何度か出ているんだって、そこだけは教科書より、早く教えているのよね」

「アメリカ同時テロを起こしたとされるイスラム原理主義のことは、どう教えているの？ 教科書に載っていないからとはいえ、あれだけの事件だから話しには出るだろうと思うけど」

「それも聞いたら、聖なる戦いジハードを唱えるはイスラム原理主義の言い分にも聞く耳を傾けなければいけない。でないとならば報復は報復を呼ぶって」

「でも、自分たちの祖先が起こした太平洋戦争だけは扱いが違うんだね」

「そう、だからアノ教科書で勉強した子は、日本人の祖先は悪いことばかりしたという加害者意識で頭が一杯になって、東京大空襲・広島・長崎の原爆という比較にならない大量殺戮に対して一切の被害者意識がないの。自業自得・天罰・報いというような観念で捉えてしまうのよね。先生が日本人は散々悪いことをしたんだってということに付いて友達とその辺の事話すのと聞くと、話さないし話そうとも思わないと言うわけ。お父さん・お母さんに先生が言っていることを話すことはあるのと家に来る同学年の子

に聞くと、異口同音に算数の教科書は見ることあるけど。それ以外は勉強しなさいと言うだけだってと答えたわ。第二次世界大戦での死者総数は6000万人でしょう。内ユダヤ人が10%、日本人が5%。戦争による日本人死亡者310万人。当時の日本人の100人に3人、日本国民の3%が第二次大戦で死亡した理由を教科書では、切って捨てるような、たった17文字で表しているだけなのよ」

「日本の軍人はナチスより残忍で非道だよ。無差別で人を殴り凌辱して殺したように書かれているもの」

「日本の教科書だけは、最低条件として、そうしなければならなかった理由があってしかるべきだと思うのよ。さして動機もなく、他国に押し入って、人をみれば殴る蹴る、最期は殺すということを私達のお爺さんがやってきた訳はないもの。……お父さんがね」

「お父さんが、どうしたの？」

「お父さんの叔父さんだから、私達の大叔父に当たる人が亡くなってお父さんはお葬式に出たのよ。お通夜の席で叔父さんの思い出話が出たときに叔母さんが、戦争の時の話しを شدしたの。あるとき亡くなった叔父さんは長男だったんだけど、兄弟みんなをよんで、負けるとは思わないが、万が一戦争に負けたら、女は凌辱の目に遭わされる、そうなる前にお前達を殺す。それから俺たちも死ぬから覚悟しておけって言ったらしいの。お父さん、ビックリしたって、あんなに穏やかで優しくかった叔父さんがそんなこと言ったのかって、その話を、お父さんが髪切りながらお客さんに話すと、そう言えば、両親から、同じ話しを聞いたことがあるということで、どこかの家の屋根の下で繰り広げられていた、もうひとつの悲しいドラマが展開していた訳ね。国と国が争うということは個人に、そこまでの覚悟を求めるものなのよ」

「知らなかった」

「まだ佳枝に話すには早いと、お父さん思っていたのよ。アノ当時、そういうことは各家庭で言われていたことらしい。そして

、それを言われた女の方は全員その覚悟で臨むより仕方なかったのよ。ということは、異国の地で家族を見れない男達は日本に残した親・兄弟がそうならない為に祈りながら生きていたわけでしょう。そういう人達が、誰もしなかったとは言わないけど異国の地で住民を見れば殴りつけ、女子を見れば凌辱したということは考えられないのよ」

「教科書通りだと、日本は理由もなく戦争を仕掛け、周辺諸国に侵略して強奪をして殺戮を楽しんだとしか取れない内容になっている」

「私は日本人に産まれた事を誇りに思っているし日本人が大好きだけど、この一点に関する限り私は日本人に対して絶望的になるのよ。世界の誰もがあの時の日本人を問題にしたとしても私達だけはかばってあげるべきだし、反論するべきよ、そうでなければ何のために死んでいったの。私達に馬鹿にされるために死んでいったというの。国を守るために死んでいった人を、まるで犯罪者か鬼畜のように言うのは許せないのよ。あの時代の人居たお陰で今生きていられるのに、人を教え導く教育者や政治家こそ、率先して死んで語れない人の代弁をしなければならないのに、逆に洗脳していることが我慢出来ない！」

「どうして、こんなことになってしまったの」

「そのことはね。全共闘世代まで、つまり団塊の世代以上に遡らないと分からないのよ」

「つまり50年前？」

「ええ」

「気が遠くなる、でも大切なことだから聞いておきたい」

「人間はね、大人に言われた通りには必ずしもしないけど、大人がやっていたようには知らず知らずのうちにやっているものなのよ。徐々に静かにゆっくり、毎日、積み重なっていくもんだから自分では自分の個性だと思っているのよ」

「それは分かる。頭刈って帰るとき、さっぱりした有り難うと言

う親の子はやっぱり同じように、さっぱりしたお姉ちゃん有り難うというもんね。又来てねって言うと、又来るよって言う子の父親も、又来ますからって言って帰るもの。何言っても黙っている親の子はやっぱり黙っていることが多いし」

「そうなのよ。朝、両親がおはようと声を掛けて育った子どもは親になってもおはようといっているわ。だから、子どもは親の様子を垣間見ている、同じようにしているうちに自分の個性だと思いきこんでいるだけなのよ」

「そうすると、教科書に書かれているよりも、先生がどう表現するかって事が重要って事」

「そう、例えば、先生が『ここに書いてあることは、周辺諸国がうるさいからこう書いてあるけど、実は日本の兵隊さんが全員いい人だったなんて言わないが、住民が困っていると手をさしのべた人だって沢山いた。それに日本自身がアメリカやロシアからけっして尊敬されているとは思わなかったから異国の地の人とは、上手くやっていけるように努力したんだ。自分が悪いことをすれば日本人全体が恐がられると思うから、それは親切に接した、しかし何と言っても戦時中だし、あの軍服姿から優しい人とは思われにくい、君たちだって警察や自衛隊の人を見たら、最初に怖い人だと思うだろう。まして言葉が通じないんだ、こちらが親切にしても、相手はそう取れないことはあったかも知れないさ。だけど、君たち、君たちの両親、君たちの祖父母、君たちの近所の人がそうであるように、倒れている人がいれば近寄ってどうしましたと声を掛けたいし、道を聞かれれば一生懸命答えて分かってもらえれば嬉しいじゃあないか。兵隊さんだって同じだよ、君たちも時代が早く生まれていれば、いやが応でも兵隊さんに成らなければならなかった。君たちと、ここに出てくる当時の兵隊とは何も変わることはない』といってくれたら、子ども達同士でも話し合うだろうし、その中の何人かは、家でその話をすると思うのよ。そうすれば教科書が気になって父親が持ってこいというかも知れないでしょうからいくらか救われるけど」

「子ども達が可哀想。家族で言えば殺人鬼の家の子だよと教え込

まれているようなものだもの」

「テレビで説明するとね。ある人気のあるニュースキャスターがいたとする。ゲストと何かの口論になったときに、そのキャスターが不快な顔を見せたとする、ゲストが正しいことを言っている、ゲストが悪役になってしまうわけ。

実はこのことが団塊世代の話しにも通じることなの。これは、やはりお父さんに聞いた話なんだけど、お父さんが中学時代のある日に、モロ、赤に染まった日教組の社会科の教諭が興奮した様子で現れ、授業をやらずに貧乏人は麦を喰えといったと言って熱弁口調で時の首相を詰ったことがあったそうよ。立ち去った教諭を見ながら、友人がお父さんに、あの勢いだと今日一日中、あの先生の授業は、貧乏人は麦を喰え問題だと言っていたとか。詰られた池田勇人が今、この時代の首相ならばと思えるほど歴代の首相の中で群を抜いていることに後で気づくらしいんだけど、そのことに永いこと到達出来なかったのは、たった一回の教諭の熱弁の弊害によるものだったって、池田勇人を知る前に悪いイメージをインプットされたからだって、教科書に池田勇人は悪い奴だって書いてなくても、たった一回の講義で池田憎しをインプット出来る権限を教師は持っているという訳、そうして大学で実行してしまったのが全共闘世代で、親の知らないところで洗脳教育されているんだから、だって、教師と接している時間って相当なものよ。集団隔離状態ですからね。怖いことに洗脳された子ども自身がそのことに気が付いていないってお父さんが言っていたわ」

「現場の教師は文部省と犬猿の仲だったから恨み辛みのとばっちりを手中の生徒に向けたということ」

「そう、日教組・教師と学生の上に黒く太い心のパイプが親から逸脱した空間で出来上がり、大学世代になった時に実践・行動されたのが全共闘世代だったわけ。その中の重症患者だった彼らは連合赤軍になったりして、日本には無縁の地でテロを敢行した

わけ、ところが彼ら自身が自分の考えで行動したと思っているから、張本人の教育者は安閑としたまま裁かれないわけ」

「怖い！」

「その他の軽症患者は企業に入って労働組合を組織したり、教職者になって子どもに教えられたように施しているわけ。だから、教える側に問題があるということなの」

「まるでコンピュータ。ウィルスね」

「ウィルスなら感染したって分かるからまだいいの、でも教育は何十年たっても続けられるから恐ろしいのよ。発病するかどうか分からないし、発病しても何十年先か分からないから施した教師はいつも時効って訳ね」

「マスコミも気が付いていないの」

「佳枝、今の日本は全員が中学まで行っているのよ。今の教師の世代は多かれ少なかれ、日本は悪いことをした国民だって刷り込まれた世代なのよ。軽症患者はどこにでもいる。マスコミにも就職しているということよ。以前に校長と意見が合わなくなった学校教師が授業をボイコットするという事件が起きたことがあるの。その時のマスコミの論評は、教育熱心な先生だから出てきて欲しいと結んだわ」

「なんか、変」

「子ども達は、ずーっと担任の先生が授業をボイコットしたことを覚えているでしょう」

「それは覚えているよ。私、学校の先生って隠れた有名人だと思うもの。私の中では教えてくれた先生のイメージをいつでも思い出せるし、何年たってもその時のままだもの、その先生が授業をボイコットしたのなら絶対死ぬまで覚えているよ」

「新聞はね。ボイコットした教師を教育熱心な良い先生と称したのよ。天下の大新聞がお墨付きを与え最期に教育熱心な先生に出てきて欲しいと結んだわ。ということは、そのことを知っている子ども達が社会人になって面白くないことに出会ったときは先生

のマネをしていいということを新聞記者は暗にほのめかしたわけだから、ストライキをしたり生産ラインをストップする教育を先生と新聞が教えたことになるわけよね。一番言いたいことは、隗より始めよという諺があるけれど、戦前・戦中に子ども達に兵隊さんになって国のために戦えという教育を施した教育界からの謝罪って調べてもないんじゃないかしら、アノ当時の教育は兵隊になれ教育よ。

それが今は教科書の中で兵隊さんがしでかしたことを崇げ奉っているけど、頑是無い少年に寄ってたかって洗脳した最大の大人集団は教師だったんじゃないの。その張本人が兵隊さんのせいになっているのに誰も文句を言わない。それが今の日本の教育よ、誰一人、俺の教え子から兵隊は出さない。国は間違えていると叫んだ教師はいなかったと思うの。ああ、情けない。私は卑怯だと言いたい。」

「それじゃあ、何のために学校行かせているのか分からなくなってきちゃう。でも、敢えて反論するけど、太平洋戦争は全て日本が悪かったと言う人には、どうやって説得するの」

「私ね、子どもの頃から、今日はいいいお天気ですねって言う会話から入る日本人っていいなと思っていたの。今日は生憎の雨ですけど、たまあには、しっとりとして、いいですね。そうですね。このところ日照りがつづきましたから、ホットしますね。素敵じゃない。私も大きくなったらあんな会話をしてみたいなって。みんながみんな分かり合えているのに。でも、どうして戦争と天皇制と憲法9条の自衛隊だけは、まるでユダヤとイスラムのように別れて、目くじら立てていがみあうのかが分からなかったの。その理由を知りたくて国会中継を子どもの頃から見ていた訳なんだけど、いくら話しても平行線でどちらが正しいのかハッキリ見えない訳。ある日のこと、私が待合室で本を読んでいたら、お父さんとお客さんの会話が聞こえて来たのよ」

「へえー、聞かせて」

「白髪で品のいいおじいちゃんがいたでしょう。私たちにキャ

ンディは齒に悪いからって、おせんべいを持ってきてくれた」

「ああ、成田さんだ。確か損害保険会社を退職した」

「そうそう、その人とお父さんとのある日の会話だったのよ。その時の会話はね」

『成田さん、長いことやってらしたから尋ねるんですけど、いったい事故を起こす人と起こさない人とでは、どこが違うんですかね』

『それが分かったらノーベル賞もらってますよ。でもね自信もって答えられることがひとつありますね。それは、保険の入り方で分かる』

『入り方で？』

『説明の聞き方で分かるんですよ』

『へえ、説明の聞き方だけでね』

『俺は事故なんて起こさないさ、先だってもね。こっちの車線に突っ込んできたのがいたけどね。華麗なるハンドル裁きでさ。素人の運転とは違うからね。保険会社儲けさせるだけだが、お守り代わりに入っておくかと言うような自信過剰タイプと、こういう事故の時は保険会社はどう動いてどこまでやってくれるかと根ほり葉ほり聞く人がいます。若い頃はね。その言葉を額面通りに受け取ってしまい。前の人は事故を起こさない、後の人は事故を起こすタイプだってねそう思いましたよ。でも結果はね、俺は事故は起こさないという自信過剰な人が事故を起こすと、適切な措置を踏んでいないんですよ。だって、ろくすっぽ、説明聞いていなかったんだから。俺は事故は起こさないといっていた奴が変身して、相手にああも言われる。こうも言われて弱っていると保険会社に泣きついてくる。得てしてこうした輩は慌て者でルーズなんです。ところが事故の時のシステムを具体的な事例で質問してきたタイプは実に的確なんです。事故の支払いの方は私が決めることは出来ません。示談は保険会社に任せます。私の出来ることは事実を隠さずありのままを保険会社に通知することですからと後で問題になるような発言は少なかったですね』

『どういう事で、問題になるんですか』

『大将、加害者が100%悪い事故というのは、信号で止まっている車にぶつかったとか、駐停車している車にぶつかった場合だけで、信号のない交差点内の事故にあっては一方的加害者も一方的被害者も存在しないんですよ』

『それじゃあ殆どは、お互いに悪いって訳ですね』

『ええ、必ず、お互いの過失が問われるものなんです。だからその過失の割合は保険会社に任せて下さいって口酸っぱくしているのに、事故になると、悪さ加減では相手の方が悪いのに、私が悪うござんしたって勝手に全額賠償を約束してしまう』

「私は衝撃を覚えたわ。国と国との間を交通整理する信号機なんてないじゃない。国というのは宗教・文化・歴史・風土が違うんだから100の国が存在すれば100通りの正義が存在するのに、100対0なんていう論理が国対国に成り立つこと事態がナンセンスで不自然なんだって。日本は正しかったとは云わないけど、全部悪かったということもあり得ない、成田さんの言葉を借りれば相手にも何割かの過失はある筈だと思ったのよ」

「そうか」

「それと、国会で政府に対して、いったい戦争をいつ、どこで、誰がするというんですかって凄い勢いで追求する人の顔が、私は、相手が突っ込んできたって運転が上手いから避けきるよってって保険掛けるのを嫌がる人に見えてきたのよ。こういう人に限って、有事の時には慌てふためいて、適切な処置が出来ないんじゃないのか。それより、苦虫つぶしたような顔をしているけど有事の時にはどうすべきかの防衛という名の保険を考えている人の方がイザと言うときは適切じゃあないか、攻める方がヒーローで、護る側がヒール演じているように思いがちだけど、そうじゃあないって確信したのよ」

動機なき殺人を日本は国家レベルで敢行したということを教科書は見えないテーマとして封印しているように風子は感じていた。

しかし、動機なき大量殺人を国レベルで敢行した歴史は過去に一
例もない。それなりの大義名分は存在している。風子の門下生で
頭を刈っている子が、この前来て

『風姉ちゃん。アメリカ同時テロを起こしたイスラム原理主義が聖なる戦い。ジハードって言っているでしょう。この前、先生がイスラム原理主義の言い分にも耳を傾けなければいけないって言ったよ』この話を聞いて、風子は思わず吹き出した。イスラムには寛大すぎる教師が、自分のお爺さんにあたる正義には耳も傾けようとしない。問答無用で悪魔の子守歌を歌いだす。日本を鬼ヶ島にたとえ、日本人を鬼にたとえ、主役の桃太郎はアメリカが演じるのである。日本の兵隊さんは捕虜も女性も子どもも、ことごとく殺して占領地の食料や資源を奪い、無理矢理日本の飛行機や鉄道をつくらせ、嫌がる民間住民も殺し続け。だからアメリカが日本を征伐するために立ち上がってくれて、東京大空襲で死傷者14万・広島原爆で20万・長崎原爆で15万、太平洋戦争で亡くなった日本人の累計は310万人になって漸く日本は自分のした罪を知って戦争を止めますと桃太郎さんに宣言しました。こんなストーリーが体制に逆らうようにアンチテーゼとして盛り込まれているのよ」二人の娘の話し合いは深夜に及んだ。

大泉は国際会議場で東南アジア諸国連合（ASEAN）の首脳と会談した。テロ根絶に向け、国際テロ対策、入国管理、航空保安の分野で研修員の受け入れを倍増するなどASEAN諸国の取り組みを積極的に支援していくこと。又「国境を越える問題」として海賊、薬物、感染症、女性・子供の搾取などを指摘。最近、アジアで急速に拡大するエイズの脅威を踏まえ、専門家養成、情報交換、研究などを通じた感染症対策のネットワークを強化する意向を示したのだった。しかし最大の目的は「日本は平和に徹する

。軍事大国にならない」ということを強調することであった。

特に日本・韓国・中国3国首脳の昼食会では、テロ対策特措法の成立を受け、米軍への後方支援などのため自衛隊を海外に派遣する考えを説明した。大泉は「武力の行使、戦闘行為への参加、戦闘地域への派遣は行わない」と、自衛隊の活動範囲が限定的なものであることも述べたのだったが、しかし、その場でも大泉の靖国神社参拝を大きな問題として取り上げられた。無論マスコミにこのことは流れない。政治には表向きと裏の本音の顔があるのだ。

大泉は中国・北京のホテルの一室で夜空を見ながら溜息を付いた。今、中国経済は破竹の勢いで伸びている。そういうときの政治家は強気である。実は経済は形を変えた戦争なのである。国土の雄大さだけで大国である時代はすでに終演している。中国の宰相の顔はほころんでいたが、大泉を見る目は冷ややかなものがあった。

嘗て日本が韓国や中国の歴史教科書に異議を唱えたことがあったであろうか。日本が他の国の歴史教科書に口を出したことはないし、諸国の宰相がどこを参拝しようとする興味を持ったことはない。しかし、半世紀もたつのに日本の歴史教科書だけは自国の歴史教科書以上に興味があるようである。大泉は異国のホテルの一室から空を見上げた。思えば、太平洋戦争勃発の翌年に自分はこの世に生を受けた。物心着いたときにはギブミーチョコレートと言っていた。日本は焦土化し、瓦礫の山となり、アメリカは日本は二度と立ち上がる事が出来ないと思ったに違いない。大人達は語らない人間になっていた。子ども達は親の背中を見て、黙々

と瓦礫の後かたづけをした。男の子は丸坊主、女の子はおかっぱ頭、男の子は瓦礫から縄と棒を見つけだすと宝物のようにしてチャンバラごっこをした。アノ時代、女の子は何をしていたのか思い出せない。

同じ空間にいたのに、男と女が離れている時代であった。人は時代という名の巨大な生き物の前では無力だが、団結することで時代に翻弄されない生き方も出来た。イヤそうは行かない、時代とは団結する人間の能力さえ超えたところに位置することがある。だから先人の霊に対しては謙虚であるべきである。どこの誰が、若干二十歳で敵艦に突っ込んでいく自分を想像しただろうか。全ては時代の成せるワザなのだ時代を憂いて人を憎まずの気持が後人になれば、先人は浮かばれない。先人に、私も同じ立場であったなら、そうしていただろうという想いで心から崇拜して礼拝してどこが悪い。私だって高々、10年少し早く産まれていたら、澄み切った空にわずかな黒煙をまき散らして消えていたかも知れないのだ。歴史とは、もし、その時代に居たのなら、自分もそうしていたであろうという謙虚な態度でまず見て、その後で他に手だてがあったか、あるとしたのなら、どうしてその道を選べなかったかを見いだすべきではないだろうか。死んだ人を分け隔てしない日本人を自分は誇りに思っている。今生きている人々は過去に葛藤の中で生きた末裔である。そして又、自分たちも葛藤の中で生きている。人間社会が続く以上、後人も又、試行錯誤の葛藤の中で生きていくに違いない。だからこそ仏になったら、罪は忘れてやる。罪を憎んで人を憎まずとは誰が言った言葉であったか誰もそう思っていたから、誰も詮索をしなかった。誰がいったか分からない言葉に言い伝えがあり、その中に日本人の魂がある。語らずとも分かる国民が、いくら語っても分かりあえない国民になり下がった。嘗てはエコノミックアニマルと称され、それ以

前はウサギ小屋に生きて滅私奉公している国民と称された。世界第二位の経済大国になっても、世界から信頼も尊敬もされない国、ああ先人はこんな国にするために死んでいったというのか、大泉は異国から見る空の星の一つ一つの光が先人の涙に見えて仕方なかった。

戦争の世で人を殺せば英雄だが、今では如何なる正当な理由があっても罪人でしかない。戦犯も何かが違っていたら大英雄になっていたであろう。価値に絶対はない。価値は変貌しているのに残念ながら気が付く人が少なすぎる。大泉は、いらいらしながらシャワーを浴びると、タオルで頭を拭きながら、ただ、部屋を歩き回った。ストレスが貯まっているのが自分でも分かるほどであった。酔いたい気分になり、ワインをくゆらしながら歩いていたが

「そうだ」大泉は思い出しようにノートパソコンの前に座った。ホテルにも備え付けがあったが、日頃使い慣れたものでないと調子が出ない。それで秘書官に日本から持ってこさせていた。風子のWEBサイトを見ると大泉は安堵の表情に変わった。我が家に帰ってきたような気分になれるような気がした。大泉は、ひとり呟いた。

「今や、風子さんは癒しだな」それにしてもIT革命とはかくも便利なものか、世界のどこに居ても風子に出会えるのである。風子のサイトに風子と会員との一問一答のコーナーがあった。大泉はその場所が気に入っていた。大泉はワイングラスを傾けながら、マウスをクリックしてみると

私の両親は、憲法第9条の戦争放棄は世界に誇れる平和憲法だといっています。テレビの司会で有名な久米武さんも同じようなことを行っています。しかし、私の彼は平和憲法ではない。あれは、アメリカの謀略憲法だと云います。私は彼を尊敬しています。だけど私にはどちらが正しいか分かりません。風子さんは

どのように考えているのか教えてください。

杉並区の 秀

子

下巻に続く